
R18
ADULT ONLY
イズモと神の棲む森
上
むらうえ
イラスト・窓枠

祈りの獣

イズモと神の棲む森　上

むらうえ

イズモと神の棲む森　上　目次

イズモと神の棲む森　下　目次

イズモと神の棲む森　上

イラスト　窓枠

序章　三年前

御山（おんやま）にひとりで登ってはならない。
村に古くから伝わる掟のひとつだ。
なぜ？　大人たちに尋ねると、いろんな答えが返ってくる。
帰り道が分からなくなる。
見えない何かが付いてくる。
神に連れ去られる。
確かな答えはない。誰も本当のことを知らないからだ。
ただ、ひとつだけ、皆が口を揃えて言うことがある。
村に災いが訪れる。必ず。

――そう教えてくださったのは、あなたでしょうに。
御山の荒涼とした山道を歩きながら、カリムはため息を吐いた。
静かな夜だった。
いつもは夜通し騒いでいる虫たちが、今夜はなぜか鳴りを潜め、草や木も人目を

はばかるように葉擦れの音を忍ばせている。この場所を教えてくれた〈風〉たちでさえ、今は何を尋ねても答えようとしなかった。
空に雲はなく、それでいて星も見えない。ただ、熟れすぎた果実のような月が夜空を煌々と照らしている。
動くものも音を立てるものもない。この森の生きとし生けるものすべてが、これから起こることを固唾(かたず)を呑んで見守っているような、張り詰めた静けさだった。
山に響く自分と同行者の足音が、ひどく場違いに感じられた。
「カリム、本当にここで間違いないのか？」
名前を呼ばれ、隣を歩く男に目を向ける。
口を引き結んだ険しい顔の虎人が、カリムを見下ろしていた。岩を削り出したような体格の、村でも指折りの豪傑でありながら、目には子どものような不安を滲ませている。
「祈祷師の言うことを疑うわけではないが、御山にいるなど信じられない」
「大丈夫です。バーリ」カリムは相手を安心させるように微笑む。「〈風〉は嘘をつきません」
バーリは複雑な顔をして前を見やる。岩山に張りつくように伸びる道は、霜が降りたように白く染まっていた。

「しかし、どうやって。あの御方は……」
目が見えない。それはカリムも知っている。
返事に困り、崖の向こうを眺める。眼下には黒々とした森が地平の彼方まで続いていた。
魔獣の棲む森を夜に、しかもひとりで出歩くなど正気の沙汰ではない。しかし、自分たちが探している相手は、そういうことを平気でする人物だった。
「分かりません。ですが不思議はないでしょう。あの方は特別ですから」
「お前が言うと説得力があるな」バーリが皮肉げに口元を歪める。「ただ、そうなると、あの御方は自らの意思でここへ来たことになる。よりによって〈命脈(めいみゃく)の儀(ぎ)〉の夜に、ひとりで。いったいなんのために」
ふと、バーリが足を止める。視線を追い、息を呑む。
少し離れた崖の縁で、男がひとり、こちらに背を向けて佇(たたず)んでいた。
金毛の虎人だった。
背が高く、均整の取れた体躯(たいく)。全身を覆う金色の毛は、それ自体が輝くように淡い光を放ち、闇色の縞が体の陰影をより深く見せる。
人ならざる存在が光を紡いで作ったような、異次元の造形。
村の男たちの中でもひときわ異彩を放つ風貌だが、今はいつもにも増して現実感

がなかった。
「ラシド様」
カリムの呟(つぶや)きに男の完璧な形の耳がピクリと動く。
「カリムにバーリか」男は振り返ることなく訝しげな声を出す。「なぜ、汝らがここにいる」
「バーリに頼まれたのです。ラシド様の姿が見えないので協力してもらえないか、と。〈風〉に尋ねると、御山にいらっしゃると――」
「余計なことを」
吐き捨てるような言葉に、カリムは口をつぐんだ。
静かだった風がざわざわと騒ぎ出した。
「こんなところで何をなさっていたのです」バーリが痺れを切らしたように口を挟んだ。「皆が心配しております。村にお戻りください」
ラシドは返事をしなかった。森の果てに顔を向けたまま、風が毛を嬲(なぶ)るに任せている。まるで何かの声に耳を傾けるように。
「もう少し、近くで見守りたかったのだがな」しばらくして、ラシドはポツリと漏らした。「神の子のお目付け役は今日で終わりらしい」
ラシドが振り返る。

男の顔には、両目を横切る大きな傷があった。鈍い刃物で無理やり切り裂いたような、醜い傷痕だった。
「カリム、汝が我らの希望だ」潰れた目がカリムを射抜く。「汝の祈りが我らを在りし日に導く」
「どういう、意味ですか？」
戸惑うカリムに、ラシドが微笑む。非人間的な、得体の知れない笑みだった。
「三年後を楽しみにしている」
笑顔が後ろに傾く。男の体が崖の向こうに倒れていく。
「ラシド様!?」
叫ぶカリムの横をバーリが駆け抜ける。崖めがけ、躊躇(ためら)いなく走る。
太い腕が捉える寸前、ラシドの姿が崖の向こうに消える。
バーリは崖から身を乗り出し、手を伸ばす。
が、その手が途中で止まる。
「そんな馬鹿な」バーリが呆然と呟く。
遅れてカリムが崖の縁に駆け寄る。崖下を覗き、バーリの戸惑いを理解する。
切り立った崖のはるか下には、荒々しい岩場が広がっていた。
しかし、金色の虎の姿はどこにもなかった。

一章　銃撃の魔術師

「はるか北の地に、双子の兄弟がいた。病弱だが聡明な兄と、直情的だが優しい弟だった。彼らは父親とともに、慎ましく暮らしていた」

「ある日、父親が言った。どこか遠くに引っ越そう。ここには悲しい思い出が多いから、と」

「彼らは住み慣れた土地を離れ、新天地を目指した」

1

草むらで鹿が死んでいた。まだ若い牡鹿だ。首を奇妙な方向に曲げ、鬱蒼とした森の片隅に、静かに身を横たえていた。半開きになった口からは軟体動物のような舌が力なく垂れ、開いた黒い瞳は突然降りかかった死に戸惑うように虚空を見つめている。

その腹を魔獣が漁っていた。

ワイン樽のような寸胴な体に短い四肢。口は胴体に達するほど大きく、赤い三組の目が口吻に沿って並んでいる。全身を覆う毛は返り血を浴びたように赤黒く、それ自体が意思を持つかのごとく蠢いている。

およそ生き物とは思えない醜悪な姿だった。

魔獣が鹿の臓物を引きずり出し、咀嚼する。胸の悪くなる音とともに鹿だったものがすり潰され、飛び散った血や肉片が口元や地面を新たな赤で染める。

そんな凄惨な食事風景を、イズモは木の陰からじっと眺めていた。

「猪の魔獣、大猪口か」イズモが顔をしかめる。「焼けば食えるが、問題はどうやって仕留めるかだな」

　男の目に鋭さが宿る。

　大猪口の体はそれ自体が凶器だ。突進する巨体は暴走する小型トラックに等しく、直撃すれば骨折や内臓破裂は免れない。加えて、飛び出した牙は刃物の鋭さで、刺されば大出血が待っている。鼠人のイズモが直接対決を挑める相手ではなかった。

　その一方で、祈る力はほとんど感じられない。高度な魔術を使う知能はなく、本能のままに魔力を生命維持と筋力強化に向けているようだ。

　――なら、問題ない。

　魔術を使わない魔獣など、猛獣をひと回り凶暴にしただけの獣だ。適切な間合いで適切に処理すれば、恐れる相手ではない。

　イズモはゆっくりと息を吐くと、銃を構えた。

　アサルトライフルを魔術用に改造した魔術銃だった。砲身は短く切り落とされ、艶のない黒い銃身に湾曲した弾倉が刺さっている。銃床と一体化した銃把は木製で、飴色に磨かれていた。

　照準器の向こうで、魔獣は相変わらず肉を貪っている。自分が夕食として狙われているなど、想像の埒外だろう。

少し考え、魔獣の頭に狙いを定める。
――肉はできるだけ残さないとな。
呼吸を整え、祈る。
――顔のない獣を射る始まりの鳥の矢羽。
胸の中で呟いた言葉が、凪いだ水面に石を投げ入れたように、心の奥底に波を作る。ザワザワと、言いようのない感情が広がる。
――腕は弓、願いは矢。
言葉を重ねる。心に次々と石が放り込まれ、泡立つ波は複雑な模様を描いていく。
それらはやがてひとつの感覚となって浮かび上がり、祈りとなる。
魔獣は肉しか見ておらず、口の端から血を撒き散らしている。
魔術銃に組み込まれた術式機構が反応。祈りが意味に変換され、概念空間に魔術を展開する。組成、向き、力が決定。弾丸を構築。
――貫け、駒鳥！
引き金を引き絞る。薬室の魔石と術式機構が接続、魔石に封じられた魔力と祈りが結びつく。
イズモの魔術、『鳥打ち』第四十二羽〈駒鳥〉が起動。
魔力が現実世界に干渉、物理法則を改変。

弾丸が実体化。
射出――。
不意に風が木々を揺らし、大猪口が頭を持ち上げる。
「はあ⁉」思わず叫ぶが、後の祭りだった。
銃口から飛び出した弾は一瞬で森を駆け抜け、直前まで魔獣の頭のあった空間を横切り、奥にあった木に到達。
爆音。
大人の腕が回りきらない太さの幹が大きく抉れ、木片を撒き散らす。
魔獣は悲鳴を上げると、鹿を放り出して森の奥へと駆けていった。
土煙を上げながら遠ざかっていく後ろ姿を、イズモは呆然と見送った。
薬室から使用済みの魔石が排出され、地面に転がる。
「いくらなんでも運が悪すぎだろ」
より心臓に近い部分を狙っていれば、動かれても仕留め損なうことはなかった。
しかし、それでは上半身を吹き飛ばすことになり、可食部が減ってしまう。
少しでも食べられる部分を残したい。そう企んだ結果がこれだった。
食欲に負けて雑な銃撃をしたと知ったら、師匠はどんな顔をするだろうか。ただでさえ合わせる顔がないというのに。

「で、でもまあ、鹿は手に入ったし、結果オーライだよな」
終わったことを嘆いても仕方ない。ここは成果があったと喜ぶべきだ。
イズモは足元に置いていた背嚢(はいのう)を背負うと、軽快な足取りで鹿へと向かった。
「何はともあれ、これでようやく肉にありつけ――」
そのとき、不穏な音がイズモの声を遮った。メキメキと木が軋む音。だんだんと大きくなっていく。
音の発生源を探すと、先ほど銃弾に幹を抉られた木がイズモの方へと傾いていた。
破砕音は激しさを増し、豊かに生い茂った樹冠と極太の幹がイズモに影を落とす。
「うっそだろおおおぉぉぉ!?」
荷物と銃を抱え、横に跳ぶ。
直後、内臓を揺さぶる振動と、耳を聾する大音声に襲われる。身を縮め、耐える。
揺れが収まるのを待ち、体を起こす。
目の前に巨木が横たわっていた。
「えっと、鹿は……?」
周りを探すが足先すら見当たらなかった。どうやら木の下敷きになってしまったらしい。無駄と思いつつ、木の幹に力をかける。むろん、びくともしない。
「勘弁してくれよ……オレの飯……」

イズモは崩れるように膝を突くと、大地に身を投げた。

「腹減った……」

賛同するように腹の虫が鳴いた。

太古の昔から連綿と続く命の循環を見守ってきた原生林は、多種多様な生き物の気配に満ちあふれていた。

蔦をまとう大樹の群れ。陽光を遮る空を覆い尽くさんばかりの樹冠。大地は積み重なった葉と下草に埋め尽くされ、歩くたびに足が沈み込む。

地図が正しければ、ここはバルグリフ王国の南東、エトローシャ連邦共和国との国境近くにある名もなき森だった。イズモの本拠地であるクワンズ市から鉄道を乗り継ぎ、一番近い街から歩いて丸一日かかる。まさに辺境と呼べる場所だった。

イズモはそんな森で大の字になり、わずかに見える空を漫然と眺めていた。獲物を逃したショックが大きく、しばらくは立ち直れそうになかった。

鞄から金属製の水筒を取り出し、あおる。しかし、一滴舌に落ちただけで、あとはどれだけ振っても何も出てこなかった。

「……水もないんだったな」

空の水筒を戻そうとして、側面に映った自分の顔が目に入る。

緑色の瞳、尖った鼻、丸い耳、ゴワゴワした茶色の毛。どこにでもいる鼠人の風貌だった。特徴と呼べるのは目深にかぶったハンチング帽くらいで、他に特筆すべき点は見当たらない。
こんな平々凡々な自分が、なぜこんな目に遭わなければならないのか。
「どう考えたってガラントのせいだろ。こんな森に人なんているわけないだろうが」
悪態をつき、上司である赤毛の牛人の顔を思い浮かべる。
ガラント・アルムストラング。イズモが所属するガラント魔術師事務所の所長であり、広範な情報網を持つ情報屋〈地獄耳のクドン〉であり、巷で人気の酒場〈赤べこ亭〉の店主という、その道では名の知れた魔術師だった。
ただ、人一倍負けず嫌いな上に思い込みが激しく、早とちりの常習犯という、情報屋としても、人の上に立つ人間としても、だいぶ問題のある性格をしていた。
おまけに持ってくる仕事がまともだった試しがなく、今回の依頼も「サバイバル経験豊富な自殺志願者でもない限り絶対に近寄らない、魔獣が多数生息する辺境の森に子連れの魔術師が逃げ込んだっぽいから探してこい」という、正気を疑う内容だった。
もっとも、提示された金額に目が眩み、一も二もなく引き受けたのは他ならぬイズモだったが。

「迂闊だったのは認めるにしても、なんでオレが道に迷うんだよ」
イズモがこの森に入ってから、すでに一週間が経とうとしていた。
当初の契約では、捜索は三日で切り上げることになっていた。イズモの仕事はあくまで手がかりを見つけることであり、成果があろうとなかろうと、決められた期間、やることをやれば報酬が出る。
しかし、約束の期日を迎え、引き上げようとしたとき問題が発生した。森から出られなくなったのだ。
地図が間違っているわけでも、地形が複雑なわけでもない。そもそも、イズモは山育ちで、森の探索にも慣れていた。
にもかかわらず、森を抜け出さなかった。それどころか、歩けば歩くほど深みにはまり込んでいく感覚すらあった。
頼みの綱であるガラントお手製の魔術式通信機もなぜか通じず、助けを求めることもできないときている。
「魔力切れでもないし、この森には何かあるのか？」
今から思えば、違和感は森に入った当初からあった。
招かれていない他人の家に入ってしまったような居心地の悪さ。視線を感じるわけでも敵意を感じるわけでもないが、どこからともなく様子を窺われているよう

な落ち着かない感じだった。
そのときに引き返していれば、こんな目に遭わなかったはずだ。しかし、森の雰囲気に呑まれて逃げ出すなど魔術師としての矜持が許さず、何より報酬が出ない。仕方なく、気のせいだと自分に言い聞かせ、奥へと進んだ。
それが運の尽きだった。
五日目には切り詰めながら食べていた食料もなくなった。
獲物を捕まえようにも、見つけた途端、逃げられてしまう。まるで誰かに危険を教えられるかのように。結局、昨日から何も食べていなかった。
そして今日、ようやく肉にありつけると思ったら、木の下に消えた。
運がないにも程がある。
「とりあえず水を探すか」
愚痴にも飽き、現実に目を向ける。目下の課題は生き延びることだ。
水だけでも、あと数日は生きられる。肉が無理なら草でも虫でも食べればいい。
そうやって命をつないでいれば、そのうち解決策が思い浮かぶだろう。人生を悲観するのはその後でも遅くはない。
そう決意を新たにしたとき、遠くで何か音がした。
慌てて起き上がり、耳をそばだてる。息を止め、神経を集中させる。風のざわめ

き、木々の葉擦れ、鳥の声。余計な音を取り除き、違和感に耳を傾ける。
だが何も聞こえない。気のせいかと思ったとき――。
悲鳴。
そして、咆哮。
イズモは帽子をかぶり直すと、銃を構え、走り出した。
木々の間を縫うように走る。
邪魔する枝を銃身で跳ね除け、まとわりつく下草を蹴飛ばす。周囲に意識を向けながら、音のする方へとひたすら走る。近づくにつれ、声がはっきりしてくる。
男。それも複数。
声は恐怖と緊張を孕んでいる。
嫌な予感がした。しかし、イズモは足を止めなかった。
この機会を逃せば次はない。経験がそう告げていた。
大きな岩を飛び越えたとき、前方で動く何かが見えた。木の陰に飛び込み、身を潜める。数秒待ち、体を半分出して様子を窺う。
――花畑？
鬱蒼とした森の中に、ぽっかりと開けた空間があった。

温かな陽光が燦々と降り注ぎ、地面を埋めつくように色とりどりの花が咲いていた。薄暗い森とは別世界のような場所に、いくつかの人影が見えた。

――人だ！　助かった！

イズモの視線の先にいたのは、虎人の男たちだった。全部で五人。目の覚めるような黄色の被毛に黒い縞模様が引っかき傷のように走っている。毛艶から判断するに、十代後半から二十代前半だろう。

イズモの位置からでも、彼らの体格の良さが分かった。

胸板ははち切れんばかりに発達し、引き締まった腹は六つに割れている。腕はイズモの足ほどに太く、盛り上がった肩は巨大な果実を思わせた。大地を踏みしめる太ももには筋肉の束が浮いて見え、筋肉の上には太い血管がうねっている。

巌（いわお）のように逞しく、それでいて無駄がない。野生の猛獣を彷彿（ほうふつ）とさせる研ぎ澄まされた体躯だった。

――それはいいとして、なんであんな格好なんだ？

喜びから一転、イズモは首を捻る。

有り体に言えば、彼らは裸同然だった。上にも下にも何も着ておらず、腰に垂らした深紅の布で、申し訳程度に股間を隠しているだけ。あとは首や腕の装飾品くらいで、靴すら履いていない。

真夏の海辺でもどうかと思う露出度。百歩譲っても、魔獣のうろつく森で見かけていい格好ではなかった。
彼らは何者なのか、助けを求めていいのか、疑念が分厚い雲となってイズモの心を覆っていく。
――そんなことを気にしていられる状況でもないか。
思うことは多々あったが、とにかく人がいた。その事実に比べれば、服装の奇妙さなど些末なことだった。個人的感情は心の端に追いやる。
――ってことは、さっきの悲鳴はあいつらなのか？
あらためて観察すると、男たちの様子が尋常ではないことに気づいた。
彼らは扇形に並び、身長の倍ほどの石槍を構えて同じ方向を睨んでいた。さらに全身の毛を逆立て、威嚇するように尻尾を立てている。
明らかな臨戦態勢。張り詰めた緊張がイズモにまで伝わってくる。
――森の中に何かいるのか？
彼らの視線の先、森の薄暗がりに目を向ける。目を凝らすと、闇の中に何かが潜んでいるのが分かった。大きさからすると、おそらく魔獣。しかし、あれほどの敵意を向けられても動じないとなると、ろくな相手ではない。
扇の中心にいた男が腰を落とし、地を這うほどに低く構える。威嚇するように牙

を剥き、射抜くような眼光で相手を見据える。
男たちの中でも、ひときわ大きな体。全身を覆う無数の傷痕に、巨大な牙の首飾り。漂わせる風格は歴戦の戦士のそれだった。
彼が男たちのリーダーらしい。
突然、男が雄叫びを上げた。離れたイズモの腹にまで響く咆哮。
イズモがギョッとした瞬間、男が突進。腰だめに槍を構え、巨体からは想像もできない早さで距離を詰める。
闇と衝突する寸前、男の姿が消える。横に跳んだのだと理解すると同時に、男が渾身の刺突を繰り出す、と見せかけて後ろに大きく跳ねた。
直後、男のいた空間を銀色の何かが横切る。
男は闇から距離を取った後、さらに後退。元の位置に戻る。男の胸から脇腹にかけて、鋭利な刃物で切られたような切り傷ができていた。傷口から血が流れ出し、毛を赤く染めていく。
周りの男たちが声をかけるが、男は前を睨んだまま指示を出し、虎人たちは広場の中央へと下がる。
それに応じるように闇が蠢く。隠れていた何かが光の下に出てくる。
最初に見えたのは前脚だった。肉食獣に似ているが、太さは木の幹ほどもある。

飛び出した爪は妖剣を思わせ、男の血で赤く濡れた爪の先が、ぬらぬらと不気味な光を放っていた。
　続いて顔と体が出てくる。造形は犬に近いが、口吻はやや長く、耳は小さく尖っていた。体高は男たちと同程度。赤い眼球に収まる漆黒の瞳孔は赤い地面に空いた穴のようで、地獄の淵が見える気がした。異様に痩せた体は艶のない黒い毛に覆われ、のどかな風景に虚無ができたような禍々しさだった。
　我知らず、全身の毛が逆立つ。
――あれはまさか、魔狼⁉
　叫びそうになり、慌てて口を塞ぐ。
　魔狼は魔獣の中でも桁違いの凶悪さを誇り、経験豊富な魔術師たちでさえ、見かけたら全力で逃げろと言う相手だった。
　巨体が振るう爪や牙は人間の体を紙のように引き裂き、行使する炎の魔術は地獄の業火に例えられ、街を火の海にした逸話を各地に残している。
　おまけに、その性格は残忍で狡猾。人間に匹敵する知能を持つとされ、待ち伏せや誘導はおろか、戦意を削ぐために人質を取って嬲ることさえあるという。
　間違っても、関わっていい相手ではなかった。
――なんでこんな所にいるんだ⁉　冗談じゃないぞ⁉

慌てて周囲に目を走らせる。

魔狼は通常の狼と同じく家族を中心とした群れを作り、狩りをする。あれは囮で本命が別に潜んでいる可能性があった。

――見た限り、気配はないな。群から離れた一匹狼か？

不幸中の幸いにしても楽観には程遠い。すぐにでも逃げ出したかったが、せっかく見つけた虎人たちを見失うわけにもいかない。仕方なく見守ることにする。

牽制が失敗したことで相手の力量を悟ったらしい。男たちは槍を構えたまま後退していく。魔狼も空気を察したのか、男たちの恐怖を味わうようにゆっくりと歩を進める。

男たちが花畑の中央まで下がったとき、リーダーの左隣にいた男が、何かにつまずいたように尻もちをつく。

その場にいた全員の視線が集中。

魔狼が腕を振り上げるのと、リーダーが動くのが同時。

転んだ男を抱えるようにして転がり、振り下ろされた腕を回避。素早く起き上がると、助けた男の首根っこを掴んで後方に投げ飛ばす。厚みのある体が軽々と宙を舞う。

そのわずかな隙に、魔狼が再び腕を振り下ろす。

リーダーと周りにいた男たちが槍を突き上げ、巨大質量を四人がかりで支える。槍の先端から血が跳ね、男たちをまだらに染める。魔狼が痛みに顔を歪め、腕を引く。男たちは示し合わせたように散開、魔狼を囲む。

「おいおい、戦う気かよ」

イズモが驚きとも呆れとも怒りともつかない呟きを漏らす中、男たちはすでに次の行動に移っていた。

男たちは互いの距離を維持したまま、魔狼の周りを回るように動く。ゆっくりした歩みから早足になり、走り出し、やがて残像を残す速さとなる。

黄色い颶風となった虎人たちが、魔狼の前後左右から一斉に襲いかかる。

魔狼の正面から、ふたりの男が魔狼の目を狙って槍を突き出す。魔狼は右目を狙っていた男の槍を噛みついて防ぐ。そのまま振り回し、左目を狙っていた男にぶつける。ふたりはもつれ合うように吹き飛び、地面に叩きつけられて静かになる。

右後方から迫ってきた男の突き上げるような一撃を、左側へと転がるように倒れて回避。空いた男の胴へと蹴りを放ち、跳ね飛ばす。男はとっさに腕で庇うが、骨の折れる音が響く。

仰向けになった魔狼の無防備な腹にリーダーが飛びかかる。穂先が心臓に突き立つ寸前、魔狼の口腔が光る。

炎の塊が飛び出し、男の胸に着弾。巨躯が丸めた紙くずのように放物線を描き、地面に衝突。何度か転がったあと、そのまま動かなくなった。

――なんだ、今の。

男たちの動きはイズモの予想を超えていた。

ひとりひとりの練度が相当に高く、とっさの連携も悪くない。身のこなしだけで言えば、一流の前衛のそれだった。相手が他の魔獣なら、例えば大猪口程度なら苦もなく倒せていたはずだ。

貧弱な装備と高い戦闘技能のギャップに、イズモはますます混乱する。映画の撮影だと言われた方がまだ理解できた。しかし、カメラはどこにもなく、魔狼は本物だった。

魔狼は体を起こすと、痛みに呻（うめ）く男たちを静かに見下ろしていた。

――食うんじゃないのか？

いかに魔狼が強大かつ残忍でも、意味もなく人を襲うことはない。人間を傷つければ報復の危険があると理解する知能がある。痩せこけた様子から、虎人たちを餌にするつもりで狙ったのだと思っていたが、違うのだろうか。

そのまま立ち去ってくれないだろうか。

淡い期待を胸に魔狼を見る。しかし、その目に煮えたぎる憎悪を発見し、背筋が

凍る。魔狼は怒り狂っていた。男たちを、ただ食い殺すだけでは飽き足りないとでもいうように。
——なんであんなに怒っているんだ。
魔狼が激昂している理由など知るよしもないが、このままでは虎人たちは間違いなく殺される。
それも生きたまま喰われるという最悪の方法で。
助けたい気持ちがないではないが、いくらなんでも状況が悪すぎる。
魔狼は魔術を察知する能力が高く、狙撃しても避けられる可能性が高い。横槍は火に油を注ぐことになり、その怒りは間違いなくイズモに向けられる。
赤の他人のために、勝算の低い戦いに臨む義理はどこにもなかった。
——いっそ、このまま逃げるか？
正直なところ、男たちにもう用はなかった。
彼らがいるということは、この近くに村なり集落なりがあるということだ。あると分かれば探すのは難しくない。
彼らに死なれて困るとすれば、道案内を頼めなくなるくらいだった。
——かわいそうだが、ここは……。
イズモの合理主義が見殺しに傾き始めたとき、魔狼が動いた。地面に転がる男た

ちには目もくれず、悠然と花畑を横切っていく。
奇妙に思い、音を立てないよう、別の木の陰に移動する。
「…………！」
魔狼の向かう先、イズモからは死角になっていた場所に、別の虎人がいた。
他の男たち同様、赤い腰布姿で槍を持っていたが、体はひと回り小さく、顔にはあどけなさが残る。大人になる数歩手前、少年と呼んでも差し支えない年頃だ。
男たちと比べると体の厚みも四肢の太さも頼りないが、胸の大きな傷痕は少年が少なからず修羅場をくぐってきたことを物語っていた。
少年は魔狼を前にしても、槍を構えたまま引く気配がない。顔には年齢には不釣り合いな、悲壮な決意がみなぎっていた。
「ラティフ！　――！」
突っ伏していたリーダーの男が少年に向かって叫ぶ。
ラティフというのは少年の名前だろう。後半は聞き取れなかったが、状況から逃げろと言っているのは明白だった。
――馬鹿野郎！　気取られるだろうが！
心の中で罵声を飛ばす。魔狼は人間の言葉が分からずとも、言動から関係性を見抜くくらいのことはする。

案の定、魔狼の口がつり上がり、刃物のような牙が覗く。裂けた傷口のようなそれは魔狼の笑みだった。他者が傷つくことに喜びを覚える、高度な知性を持つ生き物だけが浮かべる最悪の笑み。
あまりの陰惨さに、場慣れしたイズモですら怖気(おぞけ)が走った。
魔狼の口腔に地獄の炎が灯る。

2

それはラティフが初めて見る生き物だった。
犬に似ているが、体は見上げるほどに大きく、毛は目がおかしくなったのかと疑うほどに黒い。瞳には憎悪の炎が燃えたぎり、口からは火を吐き出す。その上、大人たちが束になっても敵わない。魔獣にしても異常極まりなかった。
その黒い犬がラティフに近づいてくる。
一歩ずつ、ゆっくりと。それが相手の恐怖心を煽ることを熟知しているように。
「ラティフ！　逃げろ！」魔獣の後ろでバーリが叫ぶ。
もう立ち上がる力も残っていないらしい。それでも黙って見ていることに耐えられないのか、地面に赤い線を残しながら、必死に手足を動かしている。

バーリの言う通りにすべきだと、頭では分かっていた。
大人たちですら相手にならなかった魔獣に、自分ができることなど何もない。そのことはラティフ自身が一番よく知っていた。
——でも、逃げるわけにはいかない。
ラティフは前を見たまま背後に意識を向ける。カリムが起きる気配はない。カリムにもしものことがあれば、村は終わる。それだけは避けなければならない。無力だろうと引くことは許されない。
ラティフが逃げないのを見て、魔獣が口を開く。
闇に浮かぶ赤い三日月。それが魔獣の笑みなのだと、ラティフの直感が告げていた。悪意が滴るような、圧倒的な害意の込められた笑み。
息が苦しくなり、心臓が異常な速さで脈を打つ。体が震えているのが分かる。今すぐ槍を投げ捨て、逃げ出したかった。
——そんなの絶対に嫌だ。
気持ちを奮い立たせ、槍を握る手に力を込める。腹に力を入れ、足を強く意識する。歯を食いしばり、魔獣を睨みつける。
ラティフと魔獣の視線が交錯する。
魔獣の瞳がすっと細くなる。笑っていた口元が閉ざされ、体勢を低くする。後ろ

脚に力が込められる。空気が張り詰めていく。
　ラティフは息をするのも忘れ、神経を集中させる。
　緊張が限界に到達。魔獣の耳がピクリと動く。
　――来る！
　そう思った瞬間、魔獣が後ろに跳ねた。
　魔獣のいた地面が爆ぜる。花と草がついたままの土塊が、めくれ上がるように空高く舞い上がる。
　耳を聾する大音声。天が割れるような、衝撃を伴う爆音。
　爆風が吹きつけ、腕を盾にして耐える。遠くで、土砂が地面や木に降り注ぐ音が聞こえた。
　振動と風が収まったころ、おそるおそる目を開ける。魔獣がいた場所に大穴が空いていた。大人が数人、入ってしまうほどの大きさだった。
　――魔獣は⁉
　慌てて探すと、魔獣は穴の向こうで、ラティフの左方向を睨んでいた。意識は完全にそちらに向けられ、ラティフのことを忘れてしまったかのようだ。
　倣うように目を向ける。
「…………？」

花畑を囲む木の隣に、奇妙な姿をした何かがいた。
ラティフの知識において、一番近いのは鼠だった。家に忍び込んでは食べ物を盗んでいく、あの鼠。
ただ、その鼠は背丈がラティフと同じくらいあった。さらに体中を布で覆い、二本足でしっかりと立っている。
――もしかして、森の外の人間？
カリムが〈風〉から聞いたという話に出てくる異貌の人々。決して見ることは叶わないと思っていた存在。
彼は驚いたような、困ったような顔をしていたが、何か叫ぶと、持っていた黒い杖を魔獣に向けた。表情が一瞬で引き締まり、戦士の顔になる。
その瞬間、空気が軋んだ。
ひげの先が焦げつくような緊張感。
胸の奥底で、ゾクリと感情が波だった。
イズモは戸惑っていた。
自分がしたことが信じられなかった。助ける気などなかったのに、魔狼が少年に飛びかかろうとするのを見て、気づいたら撃っていた。当たるかどうかさえ頭にな

かった。
魔狼の目がイズモに向けられる。
不機嫌そうだった顔が、憤怒の形相へと変わる。激烈な殺意の放射。空気が急激に冷えていき、重力が増したような重苦しさに包まれる。
音と衝撃で逃げ出すことも期待したが、それほど甘くはないようだ。
魔狼はイズモを獲物として認識したらしい。向きを変え、後ろ足を弛める。
もう逃げられない。
「こうなったら、腹を括るっきゃねえよな！」
烈帛の気合とともに、イズモは銃を構え直す。引き金に指をかけ、祈る。
射出。
魔術により生成された銃弾が木々の間を抜け、魔狼に迫る。が、魔狼はすでに動いた後。代わりに当たった地面が盛大に吹き飛ぶ。
〈駒鳥〉を連射。しかし、魔狼は不規則に向きを変え、狙いを定めさせない。外れた弾が地面や木の幹に大穴を開け、生い茂った下草を吹き飛ばし、木の破片を撒き散らす。
平和そのものだった森が、瞬く間に無残な姿に変わっていく。
――こいつ、慣れてやがる！

弾倉を交換しながら、イズモは歯噛みする。
おそらく、この魔狼は魔術師と戦ったことがあるのだろう。動きから魔術を使う相手との戦い方を心得ていることが見て取れた。
男たちを嬲るような戦い方やイズモに対する殺意も、過去に何かあったと考えると納得もできる。憎悪から人を襲うなら、かなり危険な存在だ。
イズモは撃ちながら森の中へと走る。魔狼は木を盾にしながら、見る間に距離を縮めてくる。
『高速で動く相手を点で捉えることはできない。機動力を奪うか面で攻めろ』
脳裏に師匠の言葉がよぎる。
ダメ出しをされた気分になりつつ、祈りを切り替える。
――溶け崩れる砂糖菓子の玉座。群がるネジ穴の職人。悦楽する臓腑の饗宴(きょうえん)。突き立つ歯型の糖蜜。穿て、啄木鳥(キツツキ)！
振り向きざまに放つ。
魔狼は瞬時に反応。木の陰に隠れる。直後、轟音とともに木の幹に無数の穴が空き、周辺の草が刈り取られるように千切れる。
第三十三羽〈啄木鳥〉は、散弾銃のように多数の小さな弾丸を放射状に撃ち出す魔術だ。面に対して絶大な破壊力を誇り、動く対象にも当てやすい。

魔狼が顔を覗かせたところで、再度撃つ。盾にされた幹の表面は見るに堪えない姿となるが、貫通には至らない。魔狼も魔術の性質に気づいたらしい。走りつつも、ときおり木の陰に隠れ、イズモの出方を窺うような動きに変わる。
——魔獣のくせに見抜くのが早いんだよ！
〈啄木鳥〉はその性質上、有効射程が短く、貫通力がない。至近距離ならともかく、この距離では毛皮を貫けるかどうかも怪しい。目や耳、口などの毛のない部分を狙うが、木を盾にして防いでくる。
しかし、イズモもこれで倒せるとは思っていなかった。
魔狼には単純な銃撃は通用しない。必要なのは致命の一撃を確実に当てるための方策だ。そのためには魔狼の接近を防ぎ、時間を稼がなければならない。
魔狼が木の陰に飛び込んだ瞬間を狙い、新たな祈りを紡ぐ。
——剥離する記憶の鳥の右心房が見る赤い夢。静かに燃える非公式の墓穴が漂わせる死臭。燻れ、爪羽鶏！
銃口から金属の円筒が飛び出す。煙を引きながら放物線を描くように飛び、魔狼の潜む木の前に落ちる。爆発。周囲に白煙と硫黄のような悪臭を撒き散らす。
煙幕の向こうから、魔狼の咳きこむような音が聞こえる。
第十七羽〈爪羽鶏〉。煙と強烈な臭いで視覚と嗅覚を奪い、対象を足止めする非

殺傷系の魔術。
　魔狼の視界が塞がっているうちに本命に取り掛かる。
　煙に向かって牽制の散弾を放った後、未使用の弾倉をふたつ開け、魔石を取り出す。もったいないが、出し惜しみすれば死ぬ。
　数十の魔石を握り、祈る。
　──落ち葉と砂塵で作る青灰色の極楽浄土。宵闇を飛び交う熱に浮かされた象牙の蝶の乱舞。
　魔狼が動く気配を感じ、散弾を撃ちつつ後退。魔狼が身を潜めそうな場所に祈りを込めた魔石を撒いていく。
　しかし、魔狼が追ってくる気配がない。煙に巻かれて警戒しているのか、戦意を喪失したのか。
　──もしかして諦めたのか？
　イズモが振り返ったとき、煙の中に光点が浮かぶのが見えた。膨大な魔力の波長に血の気が引き、近くにある木の陰に飛び込む。
　直後、極大の火炎の帯が木々の間を駆け抜ける。
　照射線上にあったものは輪郭を失い、光の中に消える。熱で膨れ上がった空気が熱風となり、吹きつける。毛のない手や尻尾が高熱に晒され、焼けるような痛みに

歯を食いしばる。
　火が消えたのを確認し、そっと顔を覗かせる。
　森は一変していた。
　炎に巻き込まれたものはことごとく焼き払われ、焦げた地面が露出していた。膨大な熱量を浴びた木々は炭化し、煙を上げている。地面のあちらこちらに、隠れていた小動物と思しき赤黒い塊が転がっていた。
　まるで山火事にでも遭ったかのような光景。一歩間違えれば、自分もその一部になっていたのだと思うと背筋が寒くなる。
　地獄の風景の奥に、鎮座する魔狼の姿が見えた。〈爪羽鶏〉の煙は残滓すら残っていない。
　――まさか煙を吹き飛ばすために、森を焼いたっていうのか。
　手段を選ばないにも程がある。
　イズモが戦慄していると、魔狼と目が合ってしまう。黒い瞳に獰猛な光が浮かぶ。
　小細工は通用しないとでも言いたげに。
　反射的に〈駒鳥〉を撃つが、魔狼は予想していたように避け、追跡を再開する。
　魔狼に諦める気などないらしい。いったい何が魔狼を駆り立てるのか。気になるが、余計な思考だと切り捨てる。

──相手がその気なら、応戦するまでだ。
イズモは逃げるように走り出した。策を破られ、取り乱した風を装い、顔に焦燥を滲ませる。たまに振り返り、〈駒鳥〉を撃つ。魔狼を大きく外した銃弾は周辺の木々を無造作に倒していく。
魔狼が策に気づいた様子はない。対抗手段を失った獲物を追い詰めるように、嬉々として追いかけてくる。異種族である人間の表情や素振りから感情を推し量る恐ろしさ。だが、演技までは見抜けないようだ。
魔狼が罠の中心まで来たところで振り返る。
第五十九羽〈塚造(ツカツクリ)〉を起動。
──爆(は)ぜろ、塚造！
魔狼が違和感に気づき、急停止。横に跳ねる。着地した瞬間、地面が破裂。土と炎が巻き上がる。
爆炎に巻かれ、魔狼が初めて悲鳴を上げる。
逃げるように跳ねるが、逃げた先で再び爆発。混乱する魔狼めがけ、〈駒鳥〉を放つ。魔狼はとっさに身を捩り、脇腹を抉られつつも致命傷を回避。転げるようにして隠れる。
イズモが先ほど撒いた魔石には、対象の接近を検知して爆発する〈塚造〉の魔術

が込められている。設置型であるため、大量の魔石と誘導が必須という欠点はあるものの、通常の魔獣なら脚を粉砕する威力を誇り、魔狼といえども無視できる火力ではない。

魔狼が逃げ道を求め、周囲に目を走らせる。

しかし、安全地帯に抜ける道には倒れた木があった。イズモが逃げながら撃った弾が、正確に逃げ道を塞いでいた。

魔狼のいる方角から、地の底から響いてくるような唸り声が聞こえてくる。ようやく、自分が罠にかかったことに気づいたらしい。

だが、もう遅い。

いくら魔狼が魔術に敏感でも、ばらまかれた小さな地雷を検知するには意識を集中しなければならない。その隙を見逃すイズモではない。

動けば地雷の餌食だが、動かなければ格好の的となる。魔狼に残された手は、その場で魔術を連発するか、負傷覚悟で突っ込んで来るかだ。

――選ばせる時間なんて、やらないけどな。

イズモは魔狼の隠れている木に銃口を向ける。

そのとき、魔狼が足を弛め、後ろ足に力を込めるのが見えた。

――来る気か。

祈りを紡ぎ、引き金に指をかける。
だが、指に力を込めた瞬間、魔狼は後ろへと跳んだ。逃げた先で爆発。魔狼は痛みに呻くが、さらに後方へと跳び、地雷原を抜ける。
そのままイズモに背を向け、来た道を戻っていく。
――クソがっ！
意図を察し、全速力で追いかける。
魔狼の本来の目的は、虎人たちを食うことだ。イズモとの戦闘は副次的なものであり、いくら人間を憎んでいても、命の危険を冒してまで続ける理由はない。
木々の向こうに魔狼の姿が見え隠れする。爆発で負傷したのか、後ろ足の毛皮が剥がれ、肉が露出していた。
最初に比べれば動きは鈍いが、跳ねるように遠ざかっていく相手を狙うのは難しい。さらに、外した弾や倒木が虎人たちを巻き込む恐れもあった。
銃撃を諦め、追いかけることに専念する。
前方が明るくなり、視界が開ける。
イズモが花畑の縁にたどり着いたとき、魔狼はすでに男のひとりに襲いかかっていた。交戦中に尻もちをつき、投げ飛ばされた男だ。負傷者を介抱していたところを狙われたらしい。

男は悲鳴を上げて槍を振り回す。しかし、魔狼は槍の上半分を咥えると、無造作に噛みちぎった。半分の長さになった槍を、男は唖然として見つめる。
魔狼が男の上半身に噛みつく。花畑に男の叫びが響く。
「そいつを離せ！」
その場に膝を突き、銃身を固定。魔狼の胴体に狙いをつける。
イズモが引き金を引く寸前、魔狼は咥えていた男をイズモに向かって投げた。
男の体が射線を遮る。
――しまっ……！
避けられない。
衝突。
もつれるように転がり、仰向けに倒れる。
起き上がろうとして、胸から下が銃ごと男の下敷きになっていることに気づく。
押しのけようにも、男は思いのほか大きく、びくともしない。
「おい、起きろ！　死ぬぞ！」
耳元で叫ぶが、反応はない。死んではいないようだが、完全に気を失っている。
もがくイズモに、影が落ちる。見上げると、魔狼の黒い瞳があった。地獄の業火を宿しながら、凍えるほどの冷たさ。

圧倒的憎悪を前に、体が動かなくなる。
――逃げたのは、演技だったたっていうのか。
冷たい汗が背筋を伝う。
魔狼は諦めてなどいなかった。虎人たちを食うと思わせてイズモをおびき出し、彼らを盾にして動きを封じた。
あの状況では、魔狼が逃げ出したとしか思えなかった。それこそが罠。魔獣に心理戦で負けたという事実を、すぐには受け入れられなかった。
魔狼の口に火が灯る。目の前で熱が生まれ、熱風が顔に吹きつける。灰も残さないつもりらしい。
――まずい。死ぬ。
イズモが死を覚悟した、そのとき。
何かが唸りを上げて飛来、魔狼の口吻に突き立つ。
絶叫。
耳を覆いたくなるような悲鳴を上げ、魔狼が体をのけ反らせる。魔狼に刺さっていたのは、虎人たちが使っていた石槍だった。
槍の飛んできた方向に目を向けると、胸に傷のある少年が肩で息をしながら立っていた。

――あの子がやったのか？
それ以外に考えられないが、到底、信じられなかった。
あの槍は魔術で生成したわけでもない、ただの木の槍だ。それを魔狼の反応速度を上回る早さで投げ、魔狼の毛と肉を貫いた。それも子どもが。
魔狼は槍を引き抜くと、少年を睨みつけた。
光点が再度発生。赤から橙、白へと変わる。
直視できない閃光。
焼けつくような熱波が押し寄せ、毛先が縮れていくような錯覚に陥る。直撃すれば灰すら残らない。
光が収縮、発射――。
「させるかあああぁぁぁっ！」
銃から手を放し、両腕を無理やり引き抜く。右手の人差し指と親指を立て、残りの指を折りたたむ。左手で右手の手首を掴み、固定。狙うは魔狼の首。
脳裏にあの日の光景が浮かび、感情が波立つ。
指先に鈍色の円筒が出現。
魔力の波濤（はとう）に、魔狼の目が驚愕に見開かれる。
「飛べ!!」

射出。
銃弾は瞬時に音速の数倍に加速。反動で右手が砕け、右前腕の骨が折れる。
着弾。
魔狼の首に大穴が開き、血と肉と骨の混ざりあったものが後方へと撒き散らされる。衝撃で頭が飛び、自らの血肉でできた海に落ちる。
頭部を失った体が傾く。
首の断面から鮮血を吹き出しながら、地響きを立てて倒れる。
森に静寂が戻る。
「し、死ぬかと思った」
イズモは腕の痛みも忘れ、体を投げ出した。

草を踏む軽い音が近づいてきたかと思うと、にわかに体が軽くなった。
見ると、先ほどの少年がイズモの上に覆いかぶさっていた男を抱き起こすところだった。
少年は意外な力強さで男をどかすと、イズモの隣に寝かせ、傷と呼吸を確認する。
ホッとした表情から、大したけがではないらしい。
少年が男からイズモに視線を移す。少年の目には明らかな戸惑いがあった。どう

接すべきか決めかねているようだ。
「助かった。お互い命拾いしたな」できるだけ優しい声を出す。
少年は首を傾げていたが、イズモが起き上がろうとすると手伝ってくれた。イズモの腕に腕を入れ、肩を組むようにして体を引っ張り上げる。慣れているのか、まったく危なげがない。
立ち上がった瞬間、視界が揺れ、体から力が抜ける。
――反動、か。
そう思ったときには膝を突いていた。前のめりに傾く体を左腕で支え、倒れることは防ぐ。少年が心配そうに話しかけてくるが、殴られるような頭痛と耳鳴りでそれどころではなかった。息をするたびに、ひゅうひゅうと喘鳴（ぜんめい）が漏れる。
しばらくすると、痛みが引き、呼吸も落ち着いてくる。
「すまない。もう大丈夫だ」
「――――？」
イズモが体を起こすと、少年が何か言う。
不思議なことに、少年の言葉がまったく聞き取れなかった。
耳の調子が戻っていないのだろうか。しかし、何度やり取りしても、少年が何を言っているのか何ひとつ理解できない。

そこでようやく、少年が聞いたこともない言語を話しているのだと気づいた。少年の様子から、こちらの言葉も通じていないらしい。
「この国で言葉が通じないとかあるのか？」
母語が違うのは珍しくないにしても、共通言語で一切の会話が成立しないのは初めての経験だった。
まるで漫画のような状況だが、このままでは埒が明かない。
イズモは少年を指差し、「ラティフ？」と首を傾げてみせる。
少年が驚いた顔をして何度も頷く。
続いて自分を指差し、「イズモ」と名乗った。
「いじゅ……みょ……？」
少年が真似をするが、かなり違う。
「い、ず、も」と音節を区切り、はっきりと発音する。それを少年が復唱する。何度か繰り返し、それらしい音になる。
「話せば長くなるんだが、ちょっと助けてほしいんだ」
身振り手振りで状況を説明しようとして、持ち上げた右腕がぐにゃりと曲がる。
いまさらながら折れていることを思い出し、痛みで汗が吹き出す。
再び倒れそうになる体を、ラティフが素早く支える。

ラティファが心配そうな顔でイズモを見る。言葉は通じずとも、こちらを気遣う意思は汲み取れた。

「事情の説明の前に、まずは傷の手当てだな」

左手で、ゆっくりと右手の袖をまくり上げる。現れた右前腕はひどく腫れ上がっていた。見ているだけで痛い。

骨折に効くやつは、と呟きながら、イズモは懐から長方形の紙片を二枚取り出した。手のひらほどの大きさで、表面に複雑な文様が描かれている。それを前腕と手の甲に貼る。

絵柄が淡く光り、鎮痛と治癒の魔術が発動。明後日の方向を向いていた指が元の位置に戻り、痛みが引いていく。

光が収まる頃には、傷は完全に治っていた。

「やっぱり高級なやつは違うな」

右手を握ったり開いたりしながら、しみじみと言う。

イズモが使ったのは治癒用の魔術符だった。樹脂製の紙に魔石で作った塗料が塗られており、けがをした場所に貼り付けることで魔術が発動する。

治癒魔術が使えないイズモにとっての生命線だ。決して安くはないが、魔狼相手にこの程度で済んだのは幸運だった。

ラティフを見ると、あんぐりと口を開けていた。

——まさか魔術を知らないのか？

科学技術が発達した昨今、魔術の出番は減っている。それでも小学校の歴史の授業で習うことであり、存在すら知らないのは奇妙だった。

疑問が次々と浮かんでくるが、今やるべきことは他にある。

「とりあえず、他のやつらを治療するか」

介入した以上、最後までやり遂げるべきだろう。幸い、治癒用の魔術符は大量にある。恩を売って損はない。

手始めに、隣で気を失っている男を診ることにする。傷を調べていると、ラティフが「ガビト」と男の名前を教えてくれる。

ラティフが安心していたように、魔狼に噛まれた傷は重要な血管を外していた。血を吐いていないから呼吸器系や消化器系も無事だろう。運のいい男だ。

放っておいても問題なさそうだったが、念のため低級の魔術符を貼っておく。

次にリーダーの男に向かう。けがの程度は一番ひどいはずだが、意識はしっかりしており、イズモに畏怖の眼差しを向けてくる。

「バーリ」とラティフが言う。

「バーリはオレの言葉が分かるか？」

念のため尋ねてみるが、男は怪訝な顔をするだけだった。しかし、イズモが傷を見せるように仕草で促すと素直に従った。
男の体は惨憺たる有様だった。
胸や腹は焼け爛れ、血と体液が滲んでいた。おまけに地面を這ったせいで、すりおろしたような状態になっていた。
しかし、それを加味しても、魔狼の火を浴びたにしては軽傷だった。地面に伏せて素早く鎮火したのが功を奏したらしい。その際、息を止めていたのか、肺へのダメージもなさそうだった。驚くべき対処能力だ。
イズモが傷を調べていると、バーリがラティフに何か言う。ラティフは雷に打たれたように飛び上がると、慌ててどこかへ走っていった。気になったが、バーリの治療を優先する。
胸の中心に高位の魔術符を貼る。未分化細胞が損傷部位を覆っていく。皮膚が再生し、傷口が塞がる。ものの数秒で、肌は元の滑らかさを取り戻した。さすがに毛までは再生しないが、そのうち生えてくるだろう。
バーリは自分の身に起きたことが信じられないかのように体を触っている。
同じように他の男たちを見て回る。
ガビト以外は意識があり、魔狼と直接やりあった割には程度が軽い。彼らが丈夫

なのか、魔狼が手加減したのかまでは判断がつかなかった。
どちらにせよ、あのまま見捨てていたら、彼らは仲間が殺される様子を見せつけられながら、自分の番を待つ羽目になっていただろう。
「よし、これで全員だな」
最後のひとりに魔術符を貼り終えたところで、ラティフが戻ってきた。
花畑の奥を指差し、早口で話しかけてくる。
イズモが首を傾げると、強張った面持ちで、腕を強く引かれる。イズモの理解を待っていられないらしい。
仕方なく、腕を引かれるままに付いていく。
ラティフが向かった先に、草花が乱れているところがあった。よく見ると誰かが倒れている。
「おい、大丈夫か⁉」
急いで駆け寄って、息を呑む。
そこにいたのは、白い虎人の青年だった。
年頃は十代後半といったところ。毛は雪を思わせるほどに白く、茨のような灰色の縞模様が全身に絡みついている。
眠った横顔は、虎人特有の精悍さと秀麗さを宿しながら、男のイズモでさえ目が

吸い寄せられるほどの美貌。それでいて、胸は逞しく盛り上がり、腕も足もイズモと比べるまでもなく太い。
妬むことも羨むことも馬鹿らしく感じるような、芸術の神が作った彫像だと言われても信じてしまうような、まさに神がかった美しさだった。
この世にこんな人間がいるのかと、イズモは思わず立ち尽くした。
「イズモ……」
ラティフが不安そうにイズモを見る。
イズモは自分が見惚れていたことに気づき、慌てて検査に移った。
口元に手を近づけると、規則的な呼吸があった。
背中に外傷がないことを確認し、仰向けにする。目に見えるけがはなく、骨折している様子もない。右手の人差し指の腹に軽い出血があったが、血はすでに止まっており、魔術符を使うほどでもない。見た限り、健康そのものだった。
「気を失っているだけだな。放っといても目を覚ますだろうが……」
横目でラティフを見ると、少年は期待を込めた目でイズモを見ていた。集まっていた男たちも硬い表情でイズモに視線を注いでいる。
彼らにとって、この青年は特別な存在なのだろう。すぐに無事を確認したいと目が訴えかけていた。

仕方なく、小物入れから瓶を取り出す。手のひらに収まるほどの大きさで、液体と白い結晶が入っていた。
青年の鼻に近づけ、栓を緩める。
次の瞬間、青年が目を見開き、跳ね起きて盛大に咳き込む。突然のことに、男たちが驚いたように一歩引く。
瓶の中身は香油に浸した炭酸アンモニウム、いわゆる気付け薬だった。脳を突き抜けるような強烈な刺激臭があり、強制的に意識を覚醒させる。
嗅がせたのはごく少量なのだが、青年には強すぎたのか、うずくまり苦しそうに唸っている。ラティフが背中をさする。
間違ったことはしていないはずだが、悪いことをした気分になる。
「あー、その、大丈夫か？」
責任を感じ、おそるおそる声をかける。
イズモの声に、青年が驚いたように顔を上げる。涙を浮かべた目が、イズモの視線を真正面から受け止める。凪いだ湖面を思わせる、澄んだ薄青。
青年が何か言おうと口を開いたとき、ラティフが青年に抱きついた。青年は困惑していたが、優しく声をかけながらラティフの頭を撫でる。
ラティフは早口で何かを言い、魔狼の死体を指差す。青年は力尽きた魔狼を見て、

ハッと息を呑んだ。しばらく魔狼を見つめた後、イズモに目を向けた。
「あなた様が、我々を助けてくださったのですね」
青年はイズモと同じ言語でしゃべった。
驚いたのはイズモだけではなかった。ラティフや他の男たちも、青年が突然知らない言葉を使ったことに戸惑いを隠せないようだった。
「お前、オレの言葉が分かるのか？」
「はい。実際に森の外の方とお話するのは、これが初めてですが」
青年はラティフに手伝われながら立ち上がると、深々と頭を下げた。
「私はカリム。村で祈祷師をしています。我々を助けてくださったこと、皆を代表して、お礼申し上げます」
「オレはイズモ。銃撃の魔術師と呼ばれている」
イズモが右手を差し出すと、カリムはにこやかに応じた。青年の手はイズモよりも一回り大きく、がっしりとしていたが、とても優しかった。
――なんとかなりそうだな。
握手をしながら、イズモは胸を撫でおろした。
一時はどうなることかと思ったが、天は自分に味方しているらしい。命を張った甲斐があったというものだ。直前まで見殺しにしようとしていたことは記憶から速

やかに消しておく。
「ところで、イズモ様はどうやってこの森に――」
カリムの言葉を遮るように、イズモの腹が鳴った。その場にいた全員が聞き取れるほど盛大に。緊張で忘れていた空腹を、今になって思い出した。
ラティフがクスクスと笑い、とても気まずい。
カリムとバーリが頷き合い、バーリが男たちに何か言う。ふたりが返事をして、森の中へと走っていった。
話の見えていないイズモに、カリムが微笑む。
「イズモ様。もしよければ、私たちの村にお越し願えませんか？　何もない小さな村ですが、食事と寝床をご用意させていただきます」
「そりゃもう、喜んで！」
イズモには、カリムが神のように見えた。

3

――いったい、どこまで歩くんだ……？
薄暗くなった森の中を歩きながら、イズモは思った。

すぐそこです、とカリムは言ったが、すでにかれこれ一時間は歩いている。出発した頃はまだ明るかったというのに、今は男たちが灯す松明の明かりだけが頼りだった。

「疑うわけじゃないんだが、本当にこの道で合っているのか？」

心配になってきて、隣を歩くカリムに尋ねる。イズモの不安を知ってか知らずか、カリムは穏やかに微笑む。

「ご心配には及びません。もう少しです」カリムの目がイズモの背嚢に向けられる。「お疲れでしたら、お荷物をお持ちいたしましょうか？」

「いや、気にしないでくれ。自分の荷物くらい自分で持てる」

笑顔を作り、荷物を背負い直す。

正直なところ、荷物どころか体ごと運んでほしいくらいに疲れていた。連日の捜索活動、空腹、森から出られないという心労。極めつけは魔狼との戦闘で、体力は限界に達していた。

――だからって、見ず知らずの相手に荷物を預けるのはな。

笑顔の裏で、イズモは心を引き締める。

旅人が親切な現地人に心を許した結果、追い剥ぎに遭うという話は枚挙にいとまがない。彼らがそうだと言うつもりはないが、用心するに越したことはなかった。

カリムは気を悪くした様子もなく、「そうですか」と素直に引き下がった。しかし、前を歩くラティフに何事か伝えると、歩く早さが気持ち遅くなる。気を遣われているらしい。疑った手前、居心地が悪い。
「ところで、あれはどうするつもりだ？」
ごまかすように、イズモは後ろに目を向ける。
イズモとカリムの後方を、バーリが魔狼の首を抱えて歩いていた。首の断面からはまだ血が流れ続け、バーリの体を伝って、地面に赤い斑点を残している。魔狼の目は死んだときのまま開いており、濁った瞳には怨嗟の炎の残滓が暗く燃えていた。
「やっぱり売るのか？　魔狼の牙とか延髄なら、いい値段になるだろうな」
暗に分け前を要求してみるが、カリムは頭を振る。
「我々のやり方ではありますが、弔ってやろうと思います」
「弔うって、相手は魔獣だぞ？」
「だからこそ、です。命に人も魔獣もありません」
ぎょっとしてカリムを見る。青年は静かな目でイズモを見返してきた。どうやら本気らしい。
魔獣は自然の理を超えた異常な存在だ。人間とは常に敵対関係にあり、その死を悼むなど、イズモには理解できなかった。

捨てるならくれ、と言いたくなるのを、ぐっと堪える。
「殊勝な心がけだな」なんとか、そう口にする。「それもお前の仕事なのか？」
「はい。葬儀を始め、村の特別な行事は祈祷師が担います。他にも豊作や安寧の祈願、薬の調合、それと村の吉凶を占うことも。今日は儀式で使う薬草を採りに来ていました」
あらかじめ用意していたような、よどみない返事だった。
祈祷師とは、村を精神面から支える宗教的な色合いの役職らしい。
そういう役割を担うにしては、カリムはかなり若い気がした。しかし、指摘して機嫌を損ねるのは嫌なので黙っておく。
「それはまた重要な立場だな。こいつらは付き人ってとこか」
イズモの言葉に、カリムは複雑な表情を浮かべた。
「彼らは護衛です。普段はひとりかふたりなのですが、先日の占いで気になる結果が出たため、長が用心のために増やしたのです。まさかこんなことになるとは思いもしませんでした」
「どんな結果だったんだ？」
何気なく尋ねたイズモに、カリムが目を向ける。薄青の瞳は冷たい輝きを宿していた。

「村に災いが訪れ、多くの血が流れる、と」
そのとき、何かが悲鳴のような声を上げ、頭上を横切った。
反射的に銃口を向けるが、何も見えない。
羽ばたく音と甲高い鳴き声は、そのまま森の奥へと消えていった。
鳥ですね、とカリムが言った。イズモは銃を下ろし、また歩き始める。
「あの魔狼が、占いで警告された存在だったってことか？」
「分かりません。しかし、無関係ではないでしょう」
カリムは険しい顔をしていたが、ふと表情を緩めた。
「イズモ様には本当に感謝しています。イズモ様が助けてくださらなければ、我々は今頃、あの魔獣の腹の中でした」
「まあ、死人が出なかったのは不幸中の幸いだな」
道がなだらかな坂道に変わる。
丘を登っているのだろうか。前を見ても、松明を持つラティフの後ろ姿が見えるだけで、森の奥に何があるのか、依然として分からなかった。
暗い森の中で、ラティフの剥き出しになった小さな尻から伸びる尻尾が、闇に浮かび上がるように揺れている。
まるで得体の知れない存在に手招きされているような、未知の領域へと誘われて

いるような、言いようのない気分だった。
「うおあっ⁉」
尻尾に気を取られ、盛り上がった木の根に足を引っ掛けてしまう。とっさに踏み出した足が落ち葉で滑る。
「だあっ⁉」
バランスを保てず、前のめりに傾く。倒れる寸前、横から伸びた腕がイズモを支えた。白く逞しい腕は、イズモの全体重を受けても揺らぐことはなかった。
顔を上げると、カリムの端正な顔があった。息がかかりそうなほど近い。
「おけがはありませんか？」
「あ、ああ。悪い。大丈夫だ」
男たちの視線を一身に浴び、ひどく気まずい。慌てて体を起こし、背嚢を背負い直す。
カリムが声をかけると、行進が再開される。また少し、速度が落ちたようだ。足元に気をつけつつ歩く。
ふと、カリムがまだこちらを見ていることに気づいた。
また転ばないか見張っているのかと思ったが、松明に照らされた瞳は子どものように輝いていた。新しいおもちゃを買ってもらった子どもが、家に着くのを待ちき

れないような、期待と興奮が入り混じった目だった。
「オレの顔に、何か付いているか？」
気になって尋ねると、カリムはハッとして顔を赤らめた。
「申し訳ありません。森の外の方とお会いするのは初めてなもので、つい」
カリムは恥ずかしそうに目を伏せた。見つめていた自覚がなかったらしい。
イズモはカリムの言葉を、「森の外の人間と会うのは久しぶりだ」と言おうとして、訳し間違えたのだと解釈した。こんなに流暢にしゃべれるのに、街の人間と会ったことがないとは思えない。
「お互い様だな。オレもこの森に人が住んでいるとは思わなかった。近くの街で情報を集めていたら、自殺しに行くのかと疑われたくらいだ」
魔術用品店の店員の顔を思い出し、忘れていた怒りが再燃する。
その熊人は透き通る目で「生きていれば、きっといいことがある。人間の身長なんて宇宙から見たら誤差みたいなもんだ」と言って、悩み相談所の連絡先を教えてきた。鼠人に身長の話は禁句だ。腹立たしいことこの上ない。
「先ほども聞こうと思っていたのですが、イズモ様はどのような理由で、この森にいらしたのですか？」
いくらか言葉を交わしたことで打ち解けてきたのか、カリムは好奇心を抑えられ

ないといった様子で話しかけてきた。
「知り合いから人探しを頼まれたんだ」
事情を話す義理はないが、黙っていても気が滅入るだけだ。余計なことを言わないよう気をつけつつ話す。
「そいつは酒場を経営しているんだが、漏れ聞いた話を独自に調べたがるという悪癖がある。今回の依頼も、先日やってきた客の話が発端だ」
閉店の時間が近づき、そいつ――ガラントが店じまいの準備に取りかかろうとしたとき、四人の見慣れない男たちが入ってきた。
「そいつの店は雑誌でも紹介されるくらいで、初見の客は珍しくない。だが、入ってきた男たちはカタギとは思えない雰囲気だったらしい。そいつらは隅の席に陣取ると、注文もそこそこに、頭を突き合わせて話しだした」
ガラントはここぞとばかりに聞き耳を立てた。
聞くつもりがなくても、これ見よがしに小声で話されては興味を惹かれない方が難しい、とは本人の談だが、単純に他人の秘密を握るのが好きなだけだろう。
『やつの隠れ家……子どもを連れ……どこへ逃げ……何人も殺し……』
聞き取れた話は断片的で、話の全容は分からなかった。確実に言えるのは、彼らは誰かを探しており、その誰かは人を殺した上、子どもと一緒に逃亡しているとい

うことだった。
「その少し前に、王都で雑居ビルが爆破される事件があった。死人も出て結構な騒ぎになったのに続報がない。そいつは客たちが秘密裏に犯人を追っていると考えた」
ガラントの情報網に引っ掛からないということは、かなり強力な箝口令が敷かれているということだ。好奇心を刺激され、ガラントはあらゆる情報を集めた。
「すると、ひとりの魔術師が浮かび上がった。ユピトガという男だ」
取り出し、ページをめくる。「あった。ユピトガという男だ」
ユピトガは中堅の警備会社に勤める狸人だ。勤務態度は良好。数年前に妻に先立たれ、今はふたりの息子と暮らしている。周囲からの評判も悪くないが、ガラントの入手した顔写真を見ると、何を考えているのか分からない陰鬱な目をしていた。
「決め手は事件のあった日以降、無断欠勤が続いていることだ。家には誰もおらず、子どもたちの行方も分かっていない」
「その方が犯人だとして、なぜ、イズモ様に依頼が来るのですか?」
「そこがそいつの面倒臭いところでな。とある事情で、その魔術師たちよりも先に事件を解決したくなったんだよ」
原因は魔術師たちの装備に刻印された社章だった。
エルシウス綜合警備保障。王都にある三大魔術師事務所の一角であり、所長であ

る獅子人のエルシウスは、ガラントが一方的に目の敵にしている相手だった。
結果、ガラントは対抗心を爆発させた。
なんとしてでも相手の鼻を明かしたくなり、極めて断片的な情報だけでイズモに依頼を投げた。正気とは思えない。
「なるほど」カリムが納得したように頷く。「人から依頼を受け、事件を解決する。いわゆる『名探偵』ですね」
「いや、それは、ちょっと違うような」
イズモは言いかけたが、楽しそうなカリムの顔を見ていると、どうでも良くなってしまった。
「しかし、それだけの情報を元に、この森にいらっしゃったのですか？　お話を伺った限りでは、関係があるようには思えないのですが」
「そいつはひとつ手がかりとなる情報を聞いていた。ユピトガたちは竜の棲む森に向かった可能性が高いってな」
「リュウ？」カリムが首を傾げる。「この森が、そうなのですか？」
「噂というか、昔話だけどな」
イズモは手帳をめくり、書き留めていた話をざっくりと説明する。
「竜は翼の生えた大きなトカゲみたいな魔獣だ。大昔、一匹の竜がこの辺にあった

国を滅ぼし、自分の棲家にした。多くの者たちが竜に挑んだが、ことごとく追い払われ、やがて誰も近寄らなくなった。国ことは忘れ去られ、深い森になった」
竜は魔狼がかわいく見えるほど強大な魔獣だ。その多くは人間と敵対し、滅ぼされた国は数知れない。この地域も、そのひとつらしい。
「という話なんだが、それらしい魔獣は見たことあるか？」
「残念ながら、見たことも聞いたこともありません」
「だろうな。本当に竜がいるなら、人間が住めるはずがない」
イズモは肩をすくめ、手帳を閉じた。
竜にまつわる伝説や伝承には嘘も多い。他の要因を竜だったことにして、話に箔をつけるのだ。
この森にしても、本当に竜がいるなら第一種魔獣警戒区域に指定されているはずだ。おおかた、開発の手が回らない言い訳にしているのだろう。
「竜が棲んでいるとされる森は他にもあったが、ここが一番近いってことで選んだ。それでも食料と装備を背負って歩き回るのは楽じゃなかったけどな」
カリムがイズモの背嚢に目を向ける。そこには野営に必要な道具が一式入っていた。食料がなくなった今でも、決して軽くはない。
「依頼のためとはいえ、そこまでなさるのですか？」

「金がかかっているんだ。当然だろ」
依頼の馬鹿馬鹿しさは百も承知だった。
耳にした話を元に、憶測に憶測を重ねた情報など、手がかりと呼ぶのもおこがましい。イズモのやっていることは、存在しないものを当てもなく探し続けるようなものだった。不毛極まりない。
それでも、ガラントが金を出すと言っている以上、引き受けない手はなかった。
金払いの良さ。それが、イズモの思う、ガラントの唯一の美点だ。
カリムが暗い顔をしていることに気づき、イズモは慌てて笑顔を作る。内面を疑われるような話はすべきでなかった。
「それにしても、お前たちと出会えて本当に良かった」できるだけ明るく言う。
「森から出られなくなって困っていたんだ。水も食料も尽きるし、獲物は捕まらないし、もう少しで死ぬところだった」
カリムの耳がピクリと動く。
「森から出られない、ですか？」
「ああ。地図で見た限りじゃ、そんなに広くないはずなんだけどな。なのに、どんなに歩いても森を抜けられなかった。これでも方向感覚には自信があったんだが」
「なるほど、そういうことでしたか」

直後、カリムの雰囲気が変わる。
和やかだった空気が冷えていき、息の詰まるような重苦しさに包まれる。
周囲を警戒していた男たちが身を強張らせる。
視線を向けるが、目を合わせるのを恐れるようにそっぽを向く。よく見ると、ラティフも尻尾の毛を逆立てていた。
「なんか、まずいことを言ったか？」機嫌を伺うように、カリムを見る。「もし、気分を害するようなことを言ったのなら謝――」
言いかけて息を呑む。
青かったはずのカリムの瞳が、赤く染まっていた。宝玉のように美しいが、体温を感じさせない冷徹な瞳。風がざわざわと木を揺らす。
「イズモ様は、神に魅入られたのですね」
ぞっとする声だった。声色も口調も変わらないのに、人間らしさが消え失せていた。見た目は変わらないまま、中身だけ人間ではない何かと入れ替わったような、言いようのない違和感だった。
「お前は、いったい」
「イズモ！」
ラティフに呼ばれ、前方に目を向ける。少年が指差す先、木々の間に煌々とした

明かりが見えた。

ようやく村に着いたらしい。ほっと息を吐く。

「ようこそ、我らの村へ」

穏やかな声に視線を戻すと、カリムの優しい青い目があった。

先ほどまでの得体の知れない不気味さは、どこにも見当たらなかった。

そこは村とも呼び難い、小規模な集落だった。

見渡せるほどの広さの空き地に、茅葺屋根の三角形の家――いわゆる竪穴式住居が二十ほど、輪を描くように並んでいる。村の中心では大きな火がたかれ、その周りで人々が慌ただしく動いているのが見えた。

村の周りには柵もなく、森の片隅を間借りしているような、ひどく慎ましい空間だった。どう見ても、電気やガスが通っているようには見えない。

カリムの何もない小さな村という表現は比喩でも謙遜でもなかったらしい。

――いわゆる、部族ってやつか？

うすうす感じていたことだが、どうやら彼らは独自の文化を持つ民族らしい。

この世界にはまだ、近代文明とはかけ離れた生活をしている人々がいると知識では知っていたが、まさか自分が関わることになるとは思わなかった。

異文化交流といえば聞こえはいいが、先行き不安さは拭えない。
村に着くと、護衛の男たちはカリムに一礼して、どこかへ行ってしまった。魔狼の首をどうするのか気になっていると、カリムが声をかけてくる。
「イズモ様。お食事の前に、長と会っていただけないでしょうか」
「構わないが、外の言葉が通じるのか？」
「私が通訳させていただきます。おおよそのことは先に走らせた者たちが伝えていますので、簡単に紹介するだけです」
カリムに促され、村に足を踏み入れる。
すでに宴の準備は整っているらしく、火の周りには料理が並んでいた。大きな葉の上に載せられた焼けた肉の塊や大きな魚。山と積まれた蒸した芋。見たことがあったりなかったりする野菜や果物。意外なことにパンらしきものもあった。
漂ってくる香りに、唾液がとめどなく湧いてくる。すぐにでも飛びつきたい気持ちを抑え、誘惑から目を引き離す。
カリムはイズモを、火を囲む一角に案内した。
地面から一段高く盛り上げられており、植物を編んで作った敷物が敷かれている。質素ではあるが、特別に設えられた席だと一目で分かった。
そこに男がひとり座っていた。

炎の方を向き、輪郭しか見えないが、発せられる圧は尋常ではなかった。
大型の魔獣か高位の魔術師と対峙したときのような緊張感。思わず後ずさってしまうような威圧感だった。
カリムが男に声をかける。
イズモが息を呑んで見守る中、男がゆっくりと立ち上がり、向き直る。
男は、若い漆黒の虎だった。
艶のある黒毛に、雷を思わせる金色の縞模様が筋肉を縁取っている。分厚く張り出した胸、均等に割れた腹、逞しい腕と足。軍神を思わせる雄々しさと神々しさ。カリムに感じたのと同種の、別次元の美だった。
カリムが黒虎の隣に並ぶ。
「彼はアドル。この村の長で、私の双子の兄です」
「双子の兄？」
思わずカリムとアドルを見比べる。
言われてみると、背丈や体つき、その力強さや美しさ、縞模様に至るまで瓜二つだった。だが、その顔つきはまるで別人だ。穏やかに微笑むカリムに対し、鋭い眼光を宿したアドル。顔の造形が同じでも、表情でこうも違うのかと驚いてしまう。
——でも、長って、この若さでか？

圧倒的な雰囲気はともかく、アドルもカリムもどう見ても若者の域を出ない。カリムが祈祷師というにも違和感があったが、長となると驚きを禁じえない。

この村では重役に若者が就く習わしなのだろうか。服すら着ていないのに、ずいぶん先進的だ。

不思議に思っていると、アドルが深く、腹に響くような声でイズモに話しかけてきた。カリムが同時に訳す。

「私はアドル。この村で長を任されている。この度は我が一族の者を助けてくれたこと、心より感謝する。ささやかではあるが、貴殿のために宴の席を用意した。どうか旅の疲れを癒やしてほしい」

簡潔で謙虚な感謝の言葉だった。男の質実剛健な性格が伝わってくる。

「オレの名はイズモ。あなたの兄弟や仲間が無事で良かった。心遣いをありがたく思う」

右手を差し出すと、アドルの分厚い手が握り返してきた。カリムの手は力強くも優しさがあったが、アドルのそれは鋼のようだった。

アドルは手を握ったまま、イズモの顔を覗き込んできた。天体を思わせる黄金の瞳は、心の奥底まで見透かすかのような、超常的な光を帯びていた。

イズモは瞬きすらできず、黙って見つめ返すしかなかった。

長い握手を終えると、アドルはイズモを上段に促した。
上がろうとしたイズモに、カリムが声をかける。
「まことに恐縮なのですが、お食事の前に少しお時間をいただけないでしょうか。村の者たちにイズモ様を紹介したいのです」
「まだ食えないのか」と言いたくなるのを堪え、頷く。
上段に上がると、炎の周りに村人が集まっているのが見えた。
いずれも若い虎人の男たちだった。揃いの赤い腰布姿で、鍛えられた肉体を惜しげもなく晒している。子どもたちに至っては全裸で、二次性徴前の未熟な男性器を無防備に揺らしていた。
処女なら近寄っただけで妊娠しかねないほどの、むさ苦しい光景だった。
イズモの姿に男たちがざわめく。皆、一様に好奇の色を浮かべ、頭の先から尻尾の先まで食い入るように見てくる。舐め回すような視線に、喉の奥から苦いものがこみ上げる。
「イズモ様」カリムが耳元で囁(ささや)く。「イズモ様は我々の英雄です。どうか胸を張ってください」
イズモはカリムを見やり、一拍遅れて「余計なお世話だ」と呟いた。再び前を向いたときには、不思議と吐き気は収まっていた。

場が静まるのを待ち、アドルが話し始める。夜に響く、朗々とした声だった。
「カリム、ちょっといいか？」小声で尋ねる。「女の姿が見えないのは、宴の席では一緒に食べられないとか、そういうしきたりか？」
目のやり場に困っているイズモに、カリムが不思議そうに首を傾げる。
「この村には女はいません」
「はあ!?」思わず声が大きくなってしまい、アドルが横目で視線を投げてくる。慌てて声を潜める。
「どういうことだ？」
「我々は男と女で分かれて暮らしているのです。女たちはここから離れた村で、女たちだけで生活しています」
「マジかよ」
イズモの体から、みるみる力が抜けてく。
村人の命を救い、歓待を受けるとなれば、村一番の美女が付き添うのがお決まりだ。なんなら、外の血を取り入れるという名目で、夜の相手をしてもらえるかもしれない。そんなイズモに、イズモの夢は、あっけなく潰えた。
肩を落とすイズモに、カリムが申し訳なさそうな顔をする。
「英雄をもてなす花がないことを心苦しく思います。しかし、これればかりは私にも

変えることができません」
「お前たちにはお前たちの事情があるんだろ。気にしないでくれ」下心をごまかすように笑みを作る。「花って意味じゃ、お前も十分きれいだしな」
カリムが驚いたように目を見開く。
カリムの美貌があれば、場のむさ苦しさも薄れる。そういう意味合いで言ったつもりだったが、何かとんでもないことを口走った気がする。
「ちょっと待て。今のは言葉の綾だ」
「ご安心ください。心得ております」
カリムの言い方に不穏なものを感じないでもなかったが、アドルの話が止まったことでイズモの意識は広場に戻った。
「もう食べていいのか？」
「いえ、私たちを襲った魔獣を見せると言っています」
「魔狼な。あれを食事の前に見せるのはどうかと思うが」
イズモの懸念をよそに、アドルがすっと手を挙げ、広場の奥の闇を示す。
男たちが振り向くと、魔狼の首を持ったバーリが闇の中から現れた。男たちの間から悲鳴に似た声が上がる。子どもたちの中には泣き出す子もいた。
無理もない。イズモも突然あんなものを見せられたら反射的に撃ちかねない。

場が騒然となるのを、アドルが一喝し、静寂が戻る。
アドルはイズモを示し、話を続ける。今度はどよめきが起こり、イズモを見る目が劇的に変わる。
好奇から畏怖と尊敬へ。露骨な手のひら返しに吹き出しそうになる。
アドルが言葉を切り、イズモに目を向ける。
「突然で申し訳ないのですが、一言いただけませんか？」
「一言って、何を言えばいいんだ？」
「なんでも構いません。村の者たちは英雄の声が聞きたいのです。いわゆる『ヒーローインタビュー』ですね」
「絶対違うぞ、それ」
突っ込みつつ、ため息をつく。大勢の前で話すのは苦手だったが、このままでは食事にありつけない。仕方なく、一歩前に出る。男たちを見回し、息を吸う。
「オレはイズモ。森の外から来た者だ。あなた方の大切な仲間が無事で嬉しく思う。オレのために盛大な宴を用意してくれたこと、心より感謝する」
森に響かせるように声を張り上げる。聞き慣れない言葉に男たちは奇妙な顔をしたが、イズモは気にしなかった。
イズモの話が終わるのを待ち、カリムが通訳する。

大歓声。
地面が揺れんばかりの雄々しい声が森に響く。男たちはその場に立ち上がり、声を上げていた。喝采を送る男たちの中に、昼間助けた顔があった。彼らは目を輝かせ、イズモに手を振っていた。
――悪くないな。
自分に向けられた賞賛に、イズモは素直にそう思った。
魔術師を志した時の、捨てたはずの青い祈りが心に蘇る。
アドルがイズモに会釈をし、男たちに向かって何事か告げる。
「ありがとうございました。どうぞお召し上がりください」
カリムが言い終わる前に、イズモは肉に食らいついていた。

4

「いやー！　食った食った！」
夜道を歩きながら、イズモは満足げに腹を撫でた。一週間ぶりにまともな食事にありつき、まさに生き返った気分だった。
肉は赤身ながら柔らかく、塩加減や火加減も絶妙の一言。魚は炭火で炙ったよう

な香ばしさで、野菜も果物も驚くほど新鮮で甘かった。
正直なところ、あまり期待していなかっただけに、想像を超える味わいに手が止まらなかった。
「お気に召したようで何よりです」隣を歩くカリムが微笑む。しかし、すぐに心配そうな顔に変わる。「ただ、その、お腹は大丈夫ですか？」
宴は一時間ほどで終わった。イズモが料理を食べ尽くしたのだ。
イズモの目の前にはアドルとカリムの分を含めて、軽く五人前の食べ物が用意されていた。残すことが前提の、見栄えを良くするための量だった。しかし、イズモは食事が始まって間もなく、すべて平らげてしまった。
その後も次々と追加の料理が運ばれてきたのだが、底の抜けた瓶に水を注ぐがごとく、イズモは際限なく飲み込んでいった。
アドルが宴を終わらせなければ、全員分を食べかねない勢いだった。
「あー、そうだな」イズモは恥ずかしそうに頬をかく。「本当はちょっと物足りなかったんだが、さすがに控えた」
カリムは額に脂汗を浮かべ、笑みを引きつらせた。イズモには食料庫の場所を教えない方がいいかもしれない。
「それで、お前の家はまだ先なのか？」道の先を見ながら、イズモが尋ねる。「結

構歩いたと思うんだが」
「この坂を登りきったところです。もう少しご辛抱ください」カリムがイズモを励ますように言う。
　ふたりが向かっていたのは、カリムの家、すなわち祈祷師が代々住んでいる家だった。村に入ってきたのとは別の、緩い傾斜のついた道を登っていく。
　空に浮かぶ月は、触ったらけがをしそうなほど細い。月明かりは心もとないが、道は丁寧に舗装されていて不安はなかった。
「村から離れているのは、何か理由があるのか？」
「祈祷師は人ならざるものと関わります。村の中ですと、男たちを不安にさせてしまいますから」
　人ならざるもの。彼らの宗教観に基づく霊的な存在だろうか。少なからず興味を惹かれたが、深入りはしないでおく。
「それにしても、何から何まで悪いな」話題を変えるように、イズモは声を明るくする。「食い物だけでもありがたいってのに、寝る場所まで用意してもらえるなんてな」
　イズモが食事に夢中になっている間に、カリムとアドルはイズモの今後について話し合っていたらしい。食事が終わる頃には、イズモがこの村に好きなだけ滞在で

きるよう取り計らうことで話がついていた。ただ、準備ができるまでの間はカリムの家に泊まってほしいとのことだった。
「英雄を外で眠らせるなど、我々の沽券(こけん)に関わります。イズモ様がこの村にいらっしゃる限り、できるだけのことはさせていただきます」
　カリムの張り切った様子に、イズモは思わず笑った。この青年は整った顔に似合わず、とても人懐っこい。
「便宜を図ってくれるのはありがたいが、アドルはよく許可したな」
「どういうことですか？」
「祈祷師は村でも特別な存在だろうし、それでなくても血の繋がった弟だ。命を救ったとはいえ、突然やってきた、どこの馬の骨とも分からない男の世話をさせるなんて不用心だろうが」
　言葉が分かるのがカリムしかいない、という事情があるにしても、薬草探しに護衛を何人もつけておきながら、初対面の人間の世話を丸投げする感覚はよく分からなかった。
　イズモが何かするとは考えないのだろうか。
「それなら大丈夫です」カリムは屈託のない笑みを向ける。「アドルには人の心を見抜く力があります。アドルが許したということは、イズモ様は信頼するに足る人

物ということです」
「他人の心が読めるってことか？」
「そうではありません。その人の心の有り様を読み取ると言いましょうか。とにかく、アドルが大丈夫だと言えば、大丈夫です」
曖昧模糊とした言い方だったが、カリムの声は確信に満ちていた。
アドルと握手をしたとき、目を覗き込まれたことを思い出す。心の奥底まで見透かすような金色の瞳。何かを感じさせる眼だった。
——魔術、なわけはないよな。
魔術は祈りの性質次第で、どのような現象でも起こりうる。しかし、他人の内面に干渉する魔術など聞いたことがなかった。
加えて、曲がりなりにも高位の魔術師であるイズモに、術式機構もなしに行使したのだとしたら、アドルは天才型の超弩級の魔術師ということになってしまう。そんな化け物じみた魔術師がこんな森にいるわけがない。
見た目と雰囲気に気圧されただけだと自分に言い聞かせる。
——だが、警戒はすべきだな。
彼らには不可解な点が多い。
魔狼との戦闘における男たち動きや村に着く直前のカリムの雰囲気。格好や生活

様式だけを見て、彼らを未開人と断ずるべきでないと直感が告げていた。
アドルが問題ないと言ったのも、なんらかの思惑によるものではないか。
彼らの厚意を無駄にするのは忍びないが、真意が分からない以上、長居するのは得策ではない。
――できるだけ早く、できれば明日にでも出ていくか。
カリムの話に笑顔で相槌を打ちながら、イズモは心に決めた。

坂を登り始めて五分ほどしたところに、カリムの家はあった。
村にあった家よりひと回りもふた周りも大きく、作りも目に見えてしっかりしている。村人が祈祷師をどう思っているのか、ひと目で分かる立派さだった。
「大きいな。こんなところにひとりで住んでいるのか」
「半分以上は倉庫で、調薬に使う道具や薬の材料などが入っています。人が住む空間はそう大きくはありません。手狭ですが、ご容赦ください」
カリムに促され、中に入る。
室内はイズモが想像していたよりも広かった。床は地面からイズモの膝下ほどの深さに掘り下げられ、平らにならされている。天井はカリムが手を伸ばしても届かないほどで、ほとんど圧迫感がない。

家は大きく手前と奥に分かれ、手前が生活をする場所、奥が倉庫になっていた。
入り口から見て左の壁際には粘土でできたかまどがあり、その近くには薪や水瓶、野菜の入った籠、石でできた道具、木製の食器が置いてある。反対側の壁には、積み重ねた干し草に毛皮を敷いたベッドがあり、イズモが三人くらい余裕で寝られる大きさだった。
生活空間の中心には炉があり、緩く燃える火が室内を暖かく照らしていた。
奥の倉庫には、日干しレンガと木の板でできた棚がずらりと並んでいた。液体の入った壺や植物の入った鞄、用途の分からない道具が詰め込まれている。
「思ったよりすごいな」思わず本音が出る。
原始的なのに垢抜けているという矛盾した空間。高い技術で太古の生活を再現したような、洗練された古臭さだ。
街での生活と比べてしまうと不便さが目立つが、居心地は悪くなさそうだった。
「どうぞ、おかけください」
カリムが棚から小さな敷物を出し、炉のそばに敷く。新鮮な植物の香りがふわりと鼻をくすぐった。
礼を言って、腰を下ろす。念のため、背嚢と銃は手の届くところに置いておく。
「イズモ様は、お酒は飲めますか？」

奥の方で何かを探していたカリムが尋ねてくる。
「飲めるが、あるのか？　宴の席になかったから、諦めていたんだが」
「作れる量が少ないため、ああいった場には出せないのです」カリムがいたずらっぽく笑い、小さな杯をふたつと細長い壺を持ってくる。「よろしければ、お休みになる前に少し飲みませんか？」
「じゃあ、いただこうか」
カリムから杯を受け取る。親指と人差し指で持てるほどの大きさで、木をくり抜いて作ったものらしい。
カリムがゆっくりと壺を傾ける。注ぎ口から、とろりとした黄金色の液体が流れ出し、杯を満たしていく。
鼻を近づけると、柔らかな甘い芳香と香草のような植物の匂いがした。
「変わった香りだな」
「祈祷師に代々伝わる、蜂蜜に薬草を漬けて作った酒です。お口に合えばいいのですが」
カリムは自分の杯に少し注ぎ、飲み干す。毒はない、ということだろう。
イズモもおそるおそる口をつける。最初に感じたのは濃厚な甘み。続いて鼻に抜けるような爽やかさが訪れる。

蜂蜜の甘さが香辛料のような刺激を和らげ、独特の風味を生んでいた。シロップを彷彿とさせる味だが、飲み終わった後のかすかな苦味が、これが酒であることを示していた。

唇を舐めながら、空になった杯を見つめる。経験したことのない複雑な味わいに、驚きを隠せなかった。

水代わりに飲める品ではないが、何度も確かめたくなる奥深さがあった。小さく感じた杯も、一度に飲める量を考えるとちょうどいい。

「初めての味だが悪くない。体に染み込んでいくみたいだ。もう少しもらえるか？」

「もちろんです」カリムが嬉しそうに注ぐ。「ただ、これを美味しいと感じるのは疲れている証拠でもあります」

カリムは自分の杯にも少し注ぎ、飲み干す。

「魔狼との戦いは、大変なものだったのだと聞いています」

「まったくだ。あんな心臓に悪い戦闘は二度としたくない」

イズモは吐き捨てるように言い、杯をあおる。臓腑に広がっていく温かさが、こみ上げてきた恐怖を和らげてくれた。

「我々はずっとこの森に住んでいますが、あのような魔獣は見たことがありませんでした。バーリでも相手にならなかったとか」

「魔狼は熟練の魔術師でも撤退を最優先に考える相手だ。魔術を使えない人間が戦うなんて自殺行為でしかない」おかわりを注いでもらいながら、苦い思いを吐き出す。「オレが勝てたのも冗談じゃなく奇跡だ」

魔狼がおそらく本調子ではなかったこと、人間に対して執着していたこと、その他様々な要素が複雑に作用し、なんとか勝利を得たにすぎない。

「森の外には、魔狼のような魔獣がたくさんいるのですか？」

「うじゃうじゃいる。幸い、遭遇することはあんまりないけどな」

杯を傾けながら、これまでに戦った魔獣のことをいくつか話す。酒で気分が良くなっていたことに加え、カリムが食い入るように聞いてくれるのが嬉しかった。

「イズモ様はそんな恐ろしい魔獣たちと渡り合ってこられたのですか。まさに英雄ですね」

「ひとりでじゃないけどな」苦笑しつつ補足する。「どんな魔獣相手でも集団で戦うのが基本だ。今回は事情が事情でやむを得なかったが、オレの実力だけで勝ったとは言い難い」

現実の戦闘は物語のようにうまくはいかない。

装備、仲間、体調、精神状態、地形、気候、敵の能力、その他諸々。様々な不確定要素が入り混じり、戦況は刻々と変化する。作戦を立てても、思い描いていたよ

うに戦える方が少ない。
　今回は運良く、いくつかの要素がイズモに有利に働いた。状況が少しでも違っていたら、死んでいたのはイズモだっただろう。
「あの戦闘で、最大の功労者はラティフだな」追加を注いでもらっていると、ふと少年の姿を思い出した。「ラティフに助けてもらわなかったら、オレは間違いなく死んでいた」
「ラティフですか？」カリムは不思議そうな顔をする。「あの子がイズモ様を助けたのですか？」
「お前たちが持っていた石槍があるだろ？　あれを魔狼に投げつけたんだ。身震いするような一撃だった」
　イズモは手振りを交えて説明するが、カリムは首を捻る。
「恐れながら、他の誰かとお間違えではありませんか？　あの子は以前に負った傷が原因で、槍を持っているのも辛いはずです」
「そうなのか？　だとしたら誰がやりふぉ」
　急に呂律が回らなくなる。まぶたがやけに重く、体も妙に火照っている。酔いが回ってきたらしい。
　杯の大きさを考えると、そう飲んではいないはずだが。

「イズモ様。そろそろお休みになられてはいかがですか？　明日、村をご案内しますので、ラティフのことはそのときに聞いてみましょう。今日は疲れを癒やしてください」
「そうだ、明日のことなんだが」
眠気を振り払い、居住まいを正す。これだけは伝えておかなければならない。
「村の案内はいいから、森の外まで送ってもらえないか？　街に戻って、魔石を補充したいんだ。魔狼との戦闘でかなりの量を使ってしまった。予備だけじゃ心もとない」できるだけ穏やかな声で伝える。
正直なところ、一刻も早く森を出たかった。
契約の日数は過ぎており、ユピトガの痕跡も見つけられなかった。この森にはいないと結論付け、引き上げたとしても文句は言われないだろう。
ただ、それを正直に言うと、村が嫌で出ていきたいと受け取られる可能性があった。相手の機嫌を損ねないよう、やむを得ない事情があることを全面に出して説明する。
しかし、カリムは目に悲痛な色を浮かべ、黙ったままだった。伝えにくいことを、どう伝えればいいか迷っているような顔だ。
「都合でも悪いのか？」

「申し訳ないことに、我々もこの森から出る方法を知らないのです」
カリムの言っていることを、すぐには理解できなかった。
「森から出ることを禁じられているってことか？　それなら仕方ないな。代わりといっちゃなんだが、食料を分けてくれ。自分で探してみる」
「そうではありません。出ようとしても出られないのです」
カリムが苦しそうに言う。
「イズモ様が森から出られないとおっしゃっていたのと同じです。方角を確かめ、歩いても歩いても、いつの間にか同じ場所に戻ってきてしまうのです。これまでにも多くの者が脱出を試みましたが、成功した者はいません」
カリムの声は真剣だった。冗談を言っているようにも、騙そうとしているようにも見えなかった。
イズモは回らない頭で必死に考える。
「お前らが出られなくても、外の人間は来るんだろ？　こんな森でも、行商人なり商隊なり、物を売りに来る人間がいるはずだ。そいつらに道を聞くなり、一緒に出ていくなりすればいい。次に来るのはいつごろだ？」
「この森には、人は来ません」
イズモの希望を、カリムの言葉が打ち砕く。

「我々が森から出られないように、森の外から人が来ることもありません。私の知る限り、この森に入ってこられた方はイズモ様が初めてです」
「いやいやいやいや、それはおかしいだろ。じゃあ、なんで、お前は外の言葉を話せるんだ？　森から出られなくて、森に来る人間もいないなら、どうやって覚えたんだ？」
「ラシド様——先代の祈祷師に教えていただきました」
「じゃあ、そいつが何か知っているかもしれない。そいつはどこにいる？　今すぐ会わせてくれ」
「亡くなりました。三年前に、崖から落ちて」
その時のことを思い出したように、カリムは目を伏せた。
「じゃ、じゃあ、そいつは何か残してないか？　手帳とかメモとか」
「遺品はすべて燃やしました。村の習わしで」
足元が崩れていくような気がした。ここ数日で味わった無力感がまざまざと蘇り、イズモを包み込んだ。腹一杯に食い、酒を飲み、満たされた気分だっただけに、その落差は果てしなかった。
「冗談、だよな？」
「冗談ではありません。我々は、私が生まれるはるか昔から、この森に囚われてい

るのです」
　カリムは重々しく、そしてどこまでも静かに告げた。
　信じられない。信じられるわけがない。しかし、それが事実であることを、なかば受け入れている自分がいた。
　ガラントの通信機が繋がらないこと。自分が一週間も森をさまよったこと。虎人たちの存在を近隣の街でも聞かなかったこと。
　まるでこの森が、世界から切り離されているかのように。
『イズモ様は、神に魅入られたのですね』
　カリムの言葉が蘇る。
　自分は神隠しに遭ったとでもいうのか。だから森から出られないのか。
　――馬鹿馬鹿しい。そんなわけあるか。
　イズモは銃と荷物を掴むと、席を立った。帽子のつばを下げ、視線を隠す。
「すまない。少し時間をくれ。頭を冷やしたい」
　カリムの返事を待たず、戸口に向かう。
　そのまま村を出るつもりだった。
　こんな場所には一秒たりともいられない。
　しかし、数歩も歩かないうちに足がもつれる。足を前に出したつもりで実際には

動いていなかった。上半身だけが前のめりに傾いていく。
何が起きているのか分からないまま、イズモは迫ってくる地面をぼんやりと眺めていた。
地面にぶつかる寸前、目の前が白く染まる。続いて、柔らかな感触。
顔を上げると、目の前に白い虎の美貌があった。カリムが受け止めてくれたのだと、遅れて理解する。
「信じがたい話だとは承知しております。私が嘘をついているとお考えかもしれません。もっともだと思います。村を出ていくとおっしゃるなら止めません。ですが」
カリムの目に涙が浮かぶ。
「ですが、せめて今夜だけは、ここにいてくださいませんか？」
祈るような言葉とともに抱きしめられる。
温もりがイズモの体を包み込む。布越しに伝わってくる人間の温かさ。それを認識した途端、先ほどまで感じていた焦燥が嘘のように解けていった。
――いまさら慌てて、どうなるって話だよな。
考えもなく村を飛び出そうとした自分が滑稽に思えた。
この森の異常性は当初から感じていたことだ。カリムの言葉はそれを裏付けたにすぎない。

今から森に戻ったとしても、この一週間、延々と試したことを繰り返すだけだろう。それで何かが変わるなら苦労はない。

――とにかく、今は休むしかないか。

カリムにもたれかかる体には、もう指一本動かす力も残っていなかった。空腹と疲労が積み重なったところに、魔狼との戦闘までしたのだ。心身ともに限界を迎えていた。この状態で何かしようという方が無理だ。

――こいつも、悪いやつじゃなさそうだしな。

顔を動かし、カリムを見上げる。青年は澄んだ目でイズモを見ていた。自分を見つめる青い瞳。イズモはこの目を、どこかで見たことがある気がした。

「どうやら、オレは自分が思う以上に疲れていたみたいだ」イズモはゆっくりと息を吐いた。「もう体が動かない。今夜はここに泊めてくれないか？」

「もちろんです」カリムは朗らかに微笑んだ。

これが最後に見る光景になったとしても悪くはない。心からそう思える、春の陽気のような、どこまでも優しい笑顔だった。

――まぶたが重い。このまま寝させてもらうか。

イズモが意識を手放そうとした、そのとき。

体に変化が起きた。

腹の底で膨れ上がり、頭をもたげる何か。抑えようもない下腹部の疼き。
それは性欲だった。それもかなり激しい。
――なんで⁉
一気に目が覚める。
覚悟を決めたことで、緊張が解けたのだろうか。それまで意識の奥深くにしまい込んでいた欲望が湧き上がってきた。森に入ってから問題続きで、今の今まで自分にそんな欲求があることすら忘れていた。
下腹部に血が集まり、下着とズボンを押し上げる。
――まずい。
膨らみがカリムの腹に当たる感触。カリムもイズモの変化に気づいているはずだが、そんな素振りは微塵も見せない。
「あの、カリム。横にならせてもらえないか？」
「承知しました」
カリムはイズモを抱き上げると、ベッドに寝かせた。干し草と毛皮のベッドは意外なほど寝心地がよく、温和な大きな獣のようにイズモを受け止めた。
だが、仰向けになったせいで股間が余計に強調される。そこはもはや、言い逃れができないほどに膨れ上がっていた。

「気になさることはありません。それは当然の反応です」
「な、なんのことだ？」
あくまで白を切るイズモに、カリムはバレバレの嘘をつく子どもを見るような目をする。
「イズモ様にお出ししたお酒は、本来、病気やけがをした者の体力回復に使う薬酒です。優れた滋養強壮作用ともに、強い性欲亢進作用があります」
「で、でも、そんなに飲んでないぞ。それも、あんな小さな杯で」
覚えているだけで七杯ほど。量で言えば、ワイングラス一杯程度のはずだ。
「我々の体格でも、一杯で十分な効果を発揮します。イズモ様ですと、今夜は眠るのも難しいかもしれません」
「そういうことは先に説明しろ!!　次々におかわりを注いだのはお前だよな!?」
跳ね起きて、すぐに倒れる。本格的に酔いが回ってきたらしく、体の自由も利かなくなってきた。重だるさに考えるのも億劫になる一方、熱は激しさを増す。
わずかに残る思考も性で埋め尽くされ、いきり立った下腹部が服の下で悲鳴を上げる。爆発するのも時間の問題だった。
しかし、原因を作ったカリムは妙に落ち着いた目で、性欲に苛（さいな）まれるイズモを見ていた。

「イズモ様。繰り返しになりますが、この村には男しかおらず、女を呼ぶこともできません。大変心苦しいのですが、ご理解ください」
そんなことはどうでもよかった。
性欲が理性を侵食し、常識的な判断力が奪われていく。恥も外聞もかなぐり捨て、カリムの目の前で自慰を始めるつもりだった。
そんなイズモにとって、カリムが続けた言葉は理解を超えていた。
「代わりに私がお相手いたします」
「…………………………は？」
意味が分からず、カリムを見る。カリムの目は真剣だった。薄青の瞳の奥に覚悟の火が揺らいでいる。炎は高温になると青く見えるのだと、どうでもいいことを思い出す。
「失礼いたします」
カリムがベルトの留め具に手をかける。
「いや、ちょ、待っ、じ、自分で、で、できるから」
イズモの抗議も虚しく、無情にもベルトが外され、続いてズボンと下着が脱がされる。
下着の下から、赤みを帯びた肉色の屹立が飛び出した。

薄茶色の毛の中にそびえるそれは、かつてないほどに膨れ上がっていた。欲望のはけ口を求めてヒクヒクと脈打ち、先端には堪えきれずにあふれ出した涙が浮かんでいる。

ここまで来たら仕方がない。イズモは腹を括った。

男とはいえ、この誠実そうな青年なら任せても大丈夫だろう。仮にも英雄と呼んだ相手に、非常識なことをするはずがない。手で優しく扱いてくれるだろう。

そう思っていただけに、突然の湿った感触にイズモは悲鳴を上げた。

「おまっ、なっ、なっ、なっ」

カリムは自らの桃色の舌を、イズモの怒張に這わせていた。

イズモ自身に熱が絡みつく。根本から先に向けて、唾液をなすりつけるように舐める。ザラザラとした舌の感触が伝わってくる。

カリムは愛しそうに、ゆっくりと味わうようにイズモを濡らしていく。

先端にたどり着くと、カリムはおもむろにイズモを咥え込んだ。温もりに包まれ、腰が抜けそうな快楽に襲われる。カリムの完璧な造形の口元が、イズモのみすぼらしい肉棒を何度も往復する。そのたびに湿った音が卑猥に響いた。

イズモは耐えるように目を閉じ、背を反らせる。イズモが動いても、カリムは決して逃がさず、刺激を与え続ける。すぐに果ててしまうほどに強くはないが、他の

ことを考える余裕ができるほど弱くもない。
足の指をもじもじと動かしたくなるような、むず痒い波がとめどなく押し寄せてくる。
もっとも、イズモはすでに心身ともに限界であり、それはすぐにやってきた。
「ぐっ……で、出る……」
快楽が途絶え、目前まで来ていた波濤が引き潮のように引いていく。
イズモが呻き、興奮が絶頂に達しようとした瞬間、カリムが口を離した。
最後の一押しをお預けにされ、イズモは困惑するようにカリムを見る。
「え、あ……、あの、その、最後まで、してくれない、のか？」
「もちろんします。ですが、イズモ様との初めては、ここに欲しいと思いまして」
カリムは恥ずかしさと嬉しさが混じり合った顔で、見事に割れた腹のやや下を撫でる。それが何を意味するのか、イズモの脳は理解を拒否した。
カリムは腰布を外すと、それを自身の股間に押し当てながらベッドに上がった。
イズモはほうけた顔で、自分に跨るカリムを見上げた。
純白の体は焚き火の光を受け、夕焼けに染まる雪山のような淡い橙色をしていた。
浮かび上がる筋肉の輪郭は、遠く眺める山々の稜線そのものだった。
下腹部を隠しているのは、せめてもの配慮だろう。しかし、そこにあるものの尋

常でない大きさは、布越しでも容易に想像がついた。
「お前、何やって」
「ご奉仕です。いわゆる『本番』ですね」
カリムは右手でイズモ自身を垂直に立てると、ゆっくりと腰を下ろす。
先端が柔らかく温かいものに触れる。カリムがため息のような吐息を漏らすと、少しの抵抗とともに、それが口を開く。
イズモが柔肉の中に沈んでいく。ぬるま湯のような温かさ。まとわりつく襞を押しのけ、湿った肉の奥底へと入っていく。
イズモはようやく自分の身に起こっていることを認識した。
「や、やめ……オレは、そんな……うあっ」
イズモの苦情はカリムが動き出すと同時に消し飛んだ。
包み込むように締めつけ、扱くように腰を振る。せり上がってくる興奮にイズモが体を反らせると、撫でるような柔らかさで一線は超えさせない。溜め込んだ欲望は肉の刺激に敏感に反応し、主人であるはずのイズモを振り回した。
カリムが動くたびに、逞しい体は筋肉を隆起させる。腰を深く落とすと、子種の詰まった柔らかで重々しい塊がイズモの腹にのしかかる。
目を閉じていても、自分に跨る相手の剛健さが伝わってくる。



男との性交渉。それはイズモにとって忌まわしい行為のはずだった。しかし、頭では分かっていても、押し寄せる快楽の前には意味をなさなかった。
少しずつ、絶頂の崖の縁へと追いやられていく。
「我慢なさることはありません」イズモの限界を悟り、カリムが動きを止めることなく声をかける。「思うまま、私の中に出してください」
「が、我慢なんて、して、してない」思わず見栄を張り、声を絞り出す。
「なら、手加減はいりませんね」カリムは微笑み、動きを早める。
柔らかく包み込むだけだった肉壁が狭まり、吸いつくように密着する。襞をこする感触が強まり、カリムの肉を抉っているという実感が湧く。体の奥底でくすぶるだけだったものが、急激に膨れ上がっていく。
「ぐ、あ、やめ……あああああっ！」
それはあっけなく訪れた。波を押し留めていた堰が決壊、脈動が駆け上がる。熱の波濤が放たれ、濁流となってほとばしる。圧倒的な解放感に思考が停止。体が反応するままに、溜め込んでいた欲望を吐き出していく。
カリムは蕩けるような表情で、己に注ぎ込まれる熱を受け止めていた。
甘い痙攣を繰り返すこと十数回。徐々に理性が戻ってくる。
頭を起こすと、イズモに跨ったままの白虎の青年の姿が見えた。あれだけ激しく

動きながら、息ひとつ乱していない。
「ご満足いただけましたか？」青年が艶然と微笑む。
イズモは声を出す気力もなく、ゆるゆると頷いた。
終始主導権を握られた上、相手の思惑通りに達してしまったことに、言いようのない敗北感を感じていた。その一方で、人肌でしか得られない満足感、誰かとひとつになったという確かな充足感があった。
心地よい疲労に包まれ、イズモはベッドに身を沈めた。
これはきっと夢だ。
森をさまよったことも、魔狼と戦ったことも、虎人たちの村で歓待を受けたことも、美貌の青年に夜伽をしてもらったことも。そんなことが凡庸な自分に起きるわけがない。明日になれば、いつものベッドで目覚めるはずだ。
イズモがまぶたを閉じようとしたとき、カリムが再び腰を揺すり始めた。カリムに収まったままだったそれが、ビクビクと震える。
再び眠気が吹き飛ぶ。
「えっ、あ、ちょ、お前、何を!?」
「まさか、一度で終わりではないでしょう？」
カリムはいたずらっぽく笑うと、動きを早めた。

むず痒いくすぐったさが心地よさに変わり、イズモはすぐに力を取り戻した。快感が脳を支配し、なすすべもなく、体を仰け反らせる。
結局、カリムの接待はイズモが六回目の射精で気を失うまで続いた。

二章　閉ざされた楽園

「兄弟は父親と旅をした。見知らぬ土地のものを食べ、慣れぬ寝床で眠った。幾度となく恐ろしい目に遭い、その度に父親が彼らを守った」

「弟は自分も戦うと息巻いたが、父親は優しく諭した。誰も傷つけずに済むなら、それが一番いいのだ、と」

「あるとき父親が言った。片付けなければならない用事ができた。この先の森で待っていなさい。必ず迎えに行くから、と」

「父親は兄弟を抱きしめると、どこかへ行ってしまった」

1

がやがやとした騒がしさでイズモは目を覚ました。まぶたを通した明るさから、朝になったことを知る。
どうせガラントが騒いでいるのだろう。政治家のスキャンダルを掴んだとか、贔屓のブランドから新作下着が出ただとか。素晴らしくどうでもいいことに違いない。起きる気にもならず、目を閉じたまま耳だけ澄ませる。
しかし、聞こえてきたのは複数人の声だった。どれも聞き覚えがなく、何を話しているのかも聞き取れない。
違和感を覚え、重いまぶたを上げる。
目に映ったのは質素な茅葺きの天井だった。太い枝を格子状に組んで骨とし、その上に束にした茅が積まれている。屋根は先端部分が二重になっており、焚き火の煙が屋根と屋根の隙間から逃げていくのが見えた。
――ここ、どこだ?

天井に見覚えがない。自分が今どこにいるのか、なぜそんなことになっているのか、すぐには思い出せなかった。
眠気の抜けきらない頭で記憶をたどっていく。
一仕事終えて戻ったら、妙に上機嫌なガラントが〈赤べこ亭〉の新作を奢ってくれた。嫌な予感がしつつも食べていたら、案の定、新たな仕事を打診された。一度は断ったが、報酬額を提示され、気づいたら契約書にサインをしていた。
――そこまでは覚えている。
汽車を乗り継いで最寄りの街に向かい、準備を整えた。一日歩いて森に到着し、ガラントに連絡した。数日探したが、手がかりは見つからなかった。帰ろうとしたら、道に迷ったことに気づき、さらに数日さまよった。
――そうだ、森に入ったんだった。
水も食料も尽きて途方に暮れていたら、虎人たちが魔狼に襲われているところに遭遇した。なんとか倒して、彼らの村に招かれた。長と会って、食事をして、祈祷師の家に泊まることになった。酒を振る舞われ、いろいろ話をして寝ようとしたら、森から出られないと告げられた。
――それで……。
脳裏に、昨夜の光景が鮮やかに蘇った。

自分に跨り、腰を振る白い虎人の姿。焚き火に照らされた美貌。腰に当たる柔らかな毛と、イズモ自身を包み込む濡れた肉の感触。

「イズモ様、おはようございます」

「うわあああぁぁぁ!?」

突然声をかけられ、飛び上がるように跳ね起きる。

声のした方を見ると、例の白い虎人が驚いたように目を見開いていた。

「カリムか」一拍遅れて名前を思い出す。

「申し訳ありません。目を開けてらっしゃったので、起きているものとばかり」

「あ、ああ。少し考え事をしていただけだ」

お前との情事を思い出していた、などと言えるわけがない。

カリムは不思議そうな顔をしていたが、すぐに微笑んだ。

「お食事のご用意ができております。冷めないうちにいかがですか?」

「ありがたく頂戴する」

ベッドから出て、大きく伸びをする。血が全身を駆け巡り、残っていた眠気があくびとともに抜けていく。腹の底から気力が湧き上がり、空を飛べるんじゃないかと思うくらい体が軽い。

昨日の酒の効能だとしたら、驚くべき効果だった。

ふと、体を見下ろし、自分が服を着ていることに気づいた。ちゃんと下着を履いており、ズボンのベルトも締めてある。体の臭いを嗅いでみても、昨夜の残滓は感じられなかった。

――こいつと寝たんだよな？

穏やかな顔で鍋をかき混ぜるカリムを見ていると、自分の記憶に自信がなくなってきた。

実は夢だったのではないか。いくら命を助けたとはいえ、美貌の青年が自ら夜伽を申し出るなど不自然極まりない。しかし、体に残る生々しい感覚は、あれが事実だったと告げていた。

「どうされました？」

突っ立ったまま動こうとしないイズモを見て、カリムが首を傾げる。

イズモは「なんでもない」とごまかし、火のそばに座った。本人が言わないなら黙っておくのが礼儀だろう。

「熱いのでお気をつけください」

差し出された木の椀を、礼を言って受け取る。

中身は肉や野菜、雑穀などが雑多に入ったスープだった。薄味だが、しっかりとしたコクと旨味を感じる。臭みや雑味もなく、素朴ながら洗練された味だった。

昨日の宴会料理も間違いなく美味かったが、これは意外なほど口に合った。イズモは黙々とさじを動かし、あっという間に平らげる。
「おかわりもありますが、いかがですか？」
「お、じゃあさっそく」
空になった器を差し出すと、カリムが嬉しそうによそう。黙っていても、縁ギリギリまで盛ってくれる。
「さっき、表の方が騒がしかったが、何かあったのか？」
「イズモ様を一目見ようと、子どもたちが押しかけて来たのです。彼らは遠慮を知らないものですから」
器を差し出しつつ、カリムが申し訳なさそうな顔をする。
「なんでまた。オレなんか見る価値があるとも思えないが」
「この村の者は森の外の方と会ったことがありません。どうしても気になるのです」
「そうか。森から出られないってことは、他の種族を見たことがないのか」
村が単一の種族で構成され、外部との接触の機会もないとなると、自分たち以外の人間を奇異に思うのは当然だろう。
昨夜の男たちの反応がまさにそれだった。好奇心と違和感を抑えられない目。珍獣を見る目だ。

しかし、そうなると気になることが出てくる。見た目も服装も違うし、言葉も通じなかったのに
「オレが人間だって、よく分かったな。」

最初に会ったのはラティフという少年だが、戸惑いつつも、イズモを人間として認識していた。虎人しか知らないのなら、もっと警戒していいはずだ。
「話には聞いていたのです」カリムは言葉を探すように、視線をさまよわせる。
「森の外には、我々と異なる姿をした人々がたくさんいる、と。もっとも、ここまで違うとは思っていませんでしたが」

カリムは外の言葉をラシドという前任の祈祷師から学んだという。その話もその人物から聞いたのだろうか。
「話に聞くのと、見たり触ったりするのとじゃ全然違うからな。中には、オレが魔獣じゃないかって疑っているやつもいるだろうな」
「ま、まさか、そんなことは……」

カリムはそう答えたが、どうにも歯切れが悪く、視線を合わせようとしない。
「お前、嘘をつくのが下手だって言われないか？」
「えっ、そ、それは、その、決して……」

言葉の上では否定していても、語気の弱さがすべてを物語っていた。

不思議な青年だ、とイズモは思った。
近寄りがたいほどの美貌でありながら、違和感を覚えるくらい人懐っこい。そばにいて心地がいいと感じる人間に出会ったのは久しぶりだった。
「まあ、森の外でも鼠人は少数派だからな。ああいう反応には慣れている」
「ねずみ、じん」カリムがポツリと呟く。知識にないことは明らかだった。そうなると、いろいろ誤解している可能性がある。
「オレは鼠人だ。背が低いのは種族柄で、鼠人としては大きくも小さくもない。よく間違えられるが、これでもれっきとした大人だ。今年で二十六になった」
カリムが絶句する。笑顔を凍りつかせ、額に脂汗を浮かべている。
「それは十代前半くらいに思っていた顔だな」
「まさか、そんなことは……」カリムの声は明らかに震えていた。
「気にするな。いつものことだ。オレは勘違いされやすい顔らしい」イズモは笑いながら自分の頬に触れる。
異種族の年齢を正確に見分けるのは難しい。
種族によって基準となる体格や成長速度が異なる上、同じ種でも細かな分類で変わるからだ。鼠人や兎人のような小柄な種族は幼く見られがちだが、イズモはさらにその傾向が強かった。

「知り合いいわく、『背伸びして大人ぶっている子どもにしか見えない』らしい。その上、『態度が生意気で無性に分からせたくなる』んだと」
自分の何がそう感じさせるのか、イズモには分からない。しかし、似たようなことは何度も言われたことがあり、そういうものだと思うことにしていた。
「あ、あの！」カリムが慌てたように口を挟む。「手や尻尾に毛がないのも普通のことなのですか？」
「ああ、鼠人は基本そうだ。気になるなら触ってみるか？」
「よろしいのですか!?」
冗談のつもりだったが、カリムは意外なほど食いついてきた。
イズモは自分の尻尾を掴み、差し出す。カリムは「失礼します」と断り、おそるおそる触れる。まるで高価な美術品を扱う学芸員のような手つきだった。
「本当に肌が剥き出しなのですね」
「傷つきやすいし、冬は寒いから尻尾袋を着けたりする。オレも小さい頃は、お袋が作ってくれた手袋と尻尾袋が欠かせなかった」
不意に昔のことを思い出し、胸が苦しくなる。幸い、カリムはイズモの尻尾を撫でるのに夢中で、気づかなかったようだ。
「話を戻すんだが、結局、子どもたちは納得したのか？」

「イズモ様に村を案内するのでそのときに、と伝えておきました」
カリムは意地でも村を案内したいらしい。
イズモとしては、本当に森を出られないのか確かめたかったが、昨晩のやりとりを考えると強くも言えない。それに、しばらく滞在するなら、この村について知っておくのも悪くはなかった。
「せっかくだし、お願いするか」
イズモがそう言うと、カリムはとても嬉しそうに頷いた。
村への道を歩きながら、カリムが説明する。
「この村の人口は五十人ほど。ひとつの家に成人した青年がふたりで、あるいは大人と子どもの組が四人から五人で住んでいます。食事は個々の家で取りますが、昨日のような祝い事や行事の際は皆で火を囲みます」
高台にあるカリムの家からは、村と森が一望できた。村自体が森の小高くなった場所にあり、周囲には深緑の海がどこまでも続いている。
村は昨日見た通りの規模だった。村の中心に大きな火をおこす場所があり、それを取り囲むように同じような家が並んでいる。村というより共同体と呼ぶ方が正しいかもしれない。

輪を構成する家のひとつが目を引いた。
「あの大きな家は集会場か？」
「あれはアドル――長の家です」
「さすが長だな。お前の家より大きいんじゃないか？」
「長の家は会合の場にもなるので、あの広さが必要なのです。生活で使う部分は私の家とそう変わりません」
村に近づくにつれ、生活臭が強くなる。家々から流れてくる食べ物と煙の匂い、トイレ代わりの穴から漂ってくる排泄物の臭い。
間違いなく、ここに人が住んでいるという臭いだった。
「普段はどんなことをしているんだ？」
「主に狩りと畑です。雨で外に出られないときは、武器や食器などを作ります。自分で使うものは自分で作るのが基本ですね」
「皆が使うんだから、得意なやつがまとめて作ればいいだろうに」
常々、工業化や効率化とは無縁な世界だった。そんなことをする必要がないくらい時間があるのだろう。
「ってことは、昨夜の酒の杯はお前が作ったのか」
「えっと、あれは、その、アドルに作ってもらって……」

カリムが言葉を濁し、視線を逸らす。どうやら器用な方ではないらしい。微妙な空気になり、イズモは助けを求めるように村に目を向けた。
家々の屋根からは白い煙が立ち昇り、広場には人影が見える。聞こえるものと言えば、木々のざわめきと鳥や動物たちの声だけ。喧騒とは無縁の、のどかで平和な光景だった。
——なんか、懐かしいな。
牧歌的な空気が記憶を刺激したが、イズモは首を振り、湧き上がってくる感情を追い出した。
村に着くと、広場に男たちが集まっているのが見えた。
いずれも若く、それぞれ石槍を持っている。昨日は逞しい体に気を取られていたが、皆、驚くほど端正な顔つきをしていた。街の雑踏でも確実に目を引く造形だ。それが十数人も集まっているのだから、なかなか壮観だった。冴えないイズモには近寄りがたい光景だ。
「せっかくですので、挨拶をしていきましょう」
イズモの気も知らず、カリムが近づいていく。仕方なく後を追う。
最後列にいた男が気づき、親しげに声をかけてきた。
ひときわ大きな体には覚えがあった。たしかバーリという名前だ。イズモも手を

振って応じ、「おはよう」と返しておく。
イズモの声に、他の男たちが一斉に振り向く。昨日ほど露骨ではないが、イズモを見る目には興味の色が浮かんでいた。カリムの言う通り、本当に自分たち以外の種族を見たことがないらしい。
カリムが何か言うと、男たちが道を開け、前方を見る。
男たちの視線の先には漆黒の虎がいた。彫刻のような体に眉目秀麗な顔立ち。鋭い金色の目。思わず緊張する。
アドルはイズモの姿を認めると、軽く目礼をしてきた。相変わらず慇懃無礼な態度だ。カリムの双子の兄だというが、似ていない双子を決める大会があったら間違いなく優勝できるくらい似ていない。
「ずいぶんな人数だが、何かあったのか？」
「イズモ様が魔狼と戦われた花畑に行くそうです」アドルと話していたカリムが答える。「何があったのか自分の目で確かめたい、と言っています」
「長が直々に現場視察か」
大げさに感じたが、カリムの言っていた予言の話もある。立場的に見に行かずにはいられないのだろう。
「それなら、オレも同行した方がいいんじゃないか。実況見分が目的なら当事者が

いた方がいいと思うが」
アドルの金色の目がイズモに向けられる。心もち、視線が柔らかい。
「イズモ様に負担をかけたくないそうです。まずは自分たちで確認して、どうしても気になることがあったら、声をかけさしてほしい、と」
「だが、あれをお前たちが見ても――」言いかけて、やめる。
魔術を知らない人間があの状況を見ても、何が起きたのか想像もつかないはずだ。後で呼び出されるのは間違いない。
かといって、今それを指摘しても口答えしたとしか受け取らないだろう。
「そうか。まあ、頑張ってくれ」イズモとしては、そう言うしかなかった。
アドルが号令をかけると、男たちは列をなして森へと向かった。
男たちの広い背中が見えなくなると、バーリが嬉々として話しかけてきた。槍を持っていたので、てっきり一緒に行くものとばかり思っていた。
「こいつは行かないのか?」
「バーリは留守番です。彼はアドルの前の長ですので、アドルが村を空けるときは長の代理として村を守ります」
「そういうことはしっかりしているんだな」
バーリは言葉が通じないことを気にした様子もなく、旧知の間柄のようにしゃ

べっている。他の男たちがイズモに興味を持ちつつも距離を置いているのに対し、壁がないも同然だった。こうも親しげに話されると、言葉が分からないのが申し訳なくなってくる。
「なんて言っているんだ？」
「バーリも村の案内に同行したいそうです。ただ残念なことに、引っ越しの準備が残っているので難しいと」
「引っ越し？　村の中でか？」
「家を引き渡すための準備です。イズモ様にはバーリの家で寝泊まりしていただこうと考えています」
一瞬、意味を考える。
「いやいやいやいや、オレのために自分の家を出ていくっていうのか!?　寝る場所を用意するってそういう意味か!?　空き家くらいあるだろ!?」
「住む者がいなくなった家は取り壊すため、空き家はありません。それに、これはバーリのたっての希望です。命を救われた恩を少しでも返したい、と。彼はひとりで住んでいるため、他の者が動くより都合がいいという事情もあります」
「じゃあ、バーリはどこで寝るんだ？」
「アドルの家を間借りするので、ご心配には及びません」

アドルの家は集会場に使える広さだと言っていた。バーリが引っ越してきても余裕なのだろう。
「オレのためにそこまでするのか」呆れるイズモに、カリムが悲しげな顔をする。
「我々には他に差し出せるものがありません。家が駄目なら、あとは命だけです」
イズモはため息を吐いた。ここまで気合の入ったもてなしをされるとは思っていなかった。彼らは思った以上に義理堅いらしい。
「それでお前の気が済むんなら、ありがたく住まわせてもらう。感謝する」
イズモが頭を下げるとバーリは豪快に笑い、イズモの肩をバンバン叩く。叩かれるたびに体が揺れ、肩が外れそうになる。昨日、鬼気迫る顔で魔狼と対峙していた人物とは思えなかった。
ひとしきり話した後、バーリは自分の家に戻っていった。
「広場で話を聞くだけなのに槍を持ち出したのか。家に置いとけよ」
「私もそう思うのですが、以前、アドルにそう尋ねたら怒られてしまいました」
カリムが苦笑する。
「槍は狩りをする者の象徴であり、常に手にしていることに意味があるのだ、と」
「魔術師の術式機構みたいなものか」
イズモは背中の銃に軽く触れた。

術式機構は魔術師の証だ。敵襲への備えという以上に、魔術師としての誇りのために、常に携帯する。寝るときや風呂に入るとき、女を抱くときでさえ、手の届く場所に置く。そういうものだと教えられた。
　イズモの場合、師匠の弱みを握って脅し取った手前、粗末に扱えないという事情もあるが。
「お前たちにとって、狩りはそれだけ大切ってことか。だが、狩りなら弓の方が適しているだろうに。槍にこだわる理由があるのか？」
　先ほどの男たちも何人かは弓と矢筒を背負っていた。しかし、彼らも長槍を手にしており、弓が補助的な役割なのは明らかだった。
　イズモの疑問に対し、カリムは「これもアドルから聞いた話なのですが」と前置きして語りだした。
「我々にとって、狩りは肉や毛皮を得る手段である以上に、強さを示す象徴的な行為です。己に向かってくる獣を正面から迎え討つ、その勇猛さを美徳とします。狩れればいい、というものではないのです」
　カリムの言わんとすることは、なんとなく分かった。
　彼らが求めているのは命を懸けた真剣勝負だ。狩りは獲物と戦うための方便にすぎず、肉や毛皮は戦闘の副産物でしかない。当然、効率など二の次となる。

「強さを求めるのは男の性みたいなもんだしな。だが、魔獣相手に弓も罠も使わないなんて難易度を上げすぎだろ。一歩間違えば死ぬぞ」
「困難だからこそ価値があるのでしょう。いわゆる『縛りプレイ』ですね」
「お前、どこでそんな言葉を覚えたんだ」
簡便と効率を重視するイズモには理解しがたい価値観だった。もっとも、戦いを尊ぶこと自体は珍しいものではない。
「我々にとって傷は勲章であり、命を散らすことは誉れです。森の外の方には愚かしく映るかもしれませんが」
「そうでもない。オレの仕事仲間にも、そういう命知らずなやつがいる」
魔術師の中にも戦闘を手段ではなく目的とする人間がいる。
彼らは強敵との死闘を生き甲斐とし、仕事という名目で戦場を探し求める。絶望的な状況や力量差にも決して怯まず、命が燃え尽きる最後の瞬間まで戦い続ける。
狂っているとしか思えない一方で、その行為が結果的に多くの命を救い、英雄や勇者と讃えられることも少なくない。
「そう考えると、オレは到底、英雄なんて呼ばれるタマじゃないな」イズモの口元に苦い笑みが浮かぶ。「オレは勝つためならどんな手でも使う。自分の命が一番大切で、勝てない戦いなんてしない」

お前はどうして魔術師をしているんだ、と一緒に仕事をした人間は決まって尋ねる。師匠もお前は魔術師には向いていないと言っていた。
「イズモ様、それは誤解です」カリムが優しい目で言う。「我々の求める強さとは、己の怯懦を乗り越え、なすべきと信じたことをなす、その心の気高さです。イズモ様は我々のために、あの恐るべき魔狼に立ち向かってくださいました。イズモ様は英雄と呼ぶに相応しい方です」
「それこそ誤解だ」イズモは目を逸らす。「オレがどんな気持ちで魔狼と戦ったかなんで分かる？　お前は見てすらいないのに」
「それを言われると辛いのですが」イズモの指摘にカリムがシュンとする。「ですが、イズモ様なら、きっと誰もが惚れ惚れする気高い姿だったに違いありません」
「いや、だから、それは見ていない人間の妄想だろ」
「ならば、イズモ様の魔術を見せてください。そうすれば分かるはずです」
見れば分かるとでも言いたげにカリムが息巻く。
まるで駄々をこねる子どもだ。しかし、カリムの美貌だと、恋人との逢瀬を待ち焦がれる深窓の令嬢のようだった。腹筋の割れた令嬢なんて嫌だな、とイズモはどうでもいいことを思った。
「魔術が見たいなら見せてやる。今は魔石が……事情があって難しいが、機会が

あったら見せると約束する」
「本当ですか？　楽しみにしています！」
言った途端、カリムの表情がぱっと明るくなる。
もしや、はめられたのか。そう思ったが、屈託なく笑うカリムを見ていると、何もかも許せる気がした。

2

村の中を一巡した後、カリムはイズモを畑に案内した。
畑は村から少し離れた林の中にあり、村と同程度の広さの土地に畝（うね）が並んでいた。青々とした作物の奥には麦畑まであり、イズモは驚きを隠せなかった。明らかに知識のある人間の手によるものだ。
「畑の耕し方は、誰かに教えてもらったのか？」
「どうしてですか？」
「外のやり方と同じなんだ。お前は外の言葉をラシドから学んだって言っていたよな。もしかすると、ラシドは外の人間で、村に知識を持ち込んだのかもしれない」
「私には分かりかねますので、彼らに聞いてみましょう」

カリムが指差す方に目を向けると、作物の間で十五、六人ほどの男たちが雑草を抜いたり、水やりをしたりしているのが見えた。
魔狼を見に行った男たちよりも、少し年上のようだ。いずれも整った顔立ちで体格もよく、顔や体を土で汚しているのが何かの間違いだとすら感じた。
男たちはイズモに気づくと、手を挙げて挨拶をしてきた。先ほどの男たちに比べると全体的に温和な印象を受ける。イズモに興味を抱きつつも、それを露骨に示さないだけの分別があった。
よく見ると、彼らも短いながら槍を背負っていた。どう考えても邪魔だと思うが、畑仕事をしていても戦士としての自覚があるのだろう。
カリムが彼らのひとりに話しかける。男は首を捻り、他の男を呼ぶ。そうするうちに、他の男たちも集まってきた。どうやら、イズモの疑問をみんなに聞いているらしい。
「彼らも年上の男たちから教わった方法を続けているだけで、誰が始めたのかは分からないそうです」
「昔からの技法ってことか。たしかに知識だけ持ち込んでも、種がなかったら意味がないしな」
では、この作物と農法はどこから来たのか。

考えられるのは、この村も昔は外部と交流があり、ある時期から隔離された可能性。しかし、誰がどうやって、という根本的な謎が残る。これなら、自分が騙されていることを疑う方が合理的だ。

思考に耽っていると、近くにあった野菜が目に入った。うねるような太い茎に、みずみずしい赤い実が鈴なりになっている。

「それ、もしかしてトマトか？」

見た目は近いが、街で見かけるものよりも大きく、鮮やかな色をしていた。季節的にはまだ早い気がするが、気候が違うのかもしれない。

カリムが近くにいた男に尋ねる。男が笑って実をもぎ、差し出してきた。食ってみろ、ということだろう。

「このままでか？」

いくら食に貪欲といえども、見境がないわけではない。さすがに生で食べるのは気が進まなかった。固くて酸っぱいに決まっている。

イズモが躊躇っていると、カリムが「大丈夫ですよ」と言って、自分の分をかじって見せる。そこまでされては食べるしかない。おそるおそる歯を立てる。

歯が触れた途端、皮が爆ぜるように破れ、汁が滴る。

「うわっ、甘っ」思わず声が出る。

味はまさにトマトのそれだった。しかし、濃厚さの割に青臭さがなく、果物かと疑うほどの甘みと爽やかな酸味が見事に調和していた。生で食べられるというだけで驚きなのに、想像をはるかに超える旨味だった。勢いのまま食べきってしまう。

「いや、すごいな。こんな美味いもの、生まれて初めてだ」

イズモが尊敬の眼差しを向けると、訳さずとも伝わったのだろう、男たちが嬉しそうに笑う。自分が作ったものに誇りを持つ人間の笑顔だった。

イズモの食べっぷりを気に入ったのか、男たちはこれも試してみろと言わんばかりに次々と持ってくる。カリムが呆れた顔をしているが、無視して片っ端から頬張る。どれも味が濃く、それでいて癖がなく、文句なしに美味だった。

「いったい、何をどうしたらこんなに美味くなるんだ？　何か秘訣とかあるのか？」

頬袋に木の実を詰め込んだリスのようになりながら尋ねる。

「雑草を抜いたり、水やったりするくらいだそうです」

「それはないだろ。肥料とか、蔓の剪定とか、余計な花を摘むとか」

しかし、男たちは頭を振るだけだった。

呆気にとられ、しばし口が止まる。

イズモの知っている農業は恐ろしく手間がかかるものだった。土作りや追肥、天候、水量の調整、間引き、害虫や病気の対策など、気にすべきことは山ほどある。

それでも、この程度の広さでは一家族がやっと食べていける量しかできない。彼らのようなやり方でここまで良質なものが、村を支えられるほど採れるとは信じられなかった。

――よっぽど土がいいんだろうな。食うものに困らないのはいいことだ。

腑に落ちない点はあったが、食べ物の心配がないことが判明したのは大きな収穫だった。それだけで、心は夏の空のように晴れ渡ってくる。

男たちに礼を言い、畑を後にする。

「イズモ様、今度は川へ行ってみましょう。今なら子どもたちが川遊びをしている頃だと思います」

カリムはそう言って、森の中の小道を進んでいく。顔は生き生きとして、足取りは軽い。イズモが早足になって、ようやく追いつける速さだった。

「野菜に夢中で忘れていたんだが、子どもたちは畑を手伝わないのか？」

歩きながら、気になっていたことを尋ねる。

子どもは大人の仕事を手伝うもの、というのがイズモの常識だった。イズモ自身、幼い頃は田植えや稲刈りなど、母親の作業を手伝った。

しかし、カリムは首を横に振る。

「我々にはそのような習慣はありません。そもそも子どもたちが手伝うほどの仕事

がないのです。その日に熟したものを収穫し、余った分を干すくらいなら、先ほど畑にいた男たちで手が足ります」

「なんでそんなチマチマやるんだ。大勢で一度に大量に作れば手間も省けるし、消費しきれない分を売れば金に」言いかけて気づく。「そうか、お前たちは金を稼ぐがなくていいのか」

当たり前のことに、いまさら思い至る。

外界から隔絶していることの真偽は置いておくにしても、税金を取り立てに来る人間がいないのは確実だ。日々食べる物のことだけ考えていれば、人生は事足りてしまう。

飢えの不安も、襲われる心配もないのなら、まさに楽園だった。より良い生活を望むなど罰が当たりそうだ。

「お金とは価値を数値化して交換可能にした概念ですね？　森の外ではお金を巡って争いが起きたり、人が殺されたりすると聞きましたが、本当ですか？」

その言い方がまさに、カリムが金を見たことも使ったこともない証左だった。

「ああ、本当だ」イズモは森に目を向ける。「森の外ではただ生きるだけで金がいる。そのせいで、オレを含むほとんどの人間は、人生の大半を金を稼ぐことに費やしている。当然、楽に大金を得ようと犯罪に走るやつも少なくない」

朝から晩まで働き、たまの休日を寝て過ごす。中には体や心の調子を崩して自殺する人間もいる。自然の恵みを消費するだけで十分な生活をする彼らには、外の世界はどう映るのだろうか。
「外の世界は大変なのですね」カリムは考えるように目を伏せる。「イズモ様もこのまま村に住まれてはいかがですか？　皆、歓迎します」
「生活の不便さは慣れるにしても、お前らみたいな顔も体もいいやつらと一緒にいられるわけないだろ」
「外見など、我々は気にしません」
「オレが気にするんだよ」
顔も体も性格も残念なイズモにとって、この村の男たちは眩しすぎた。遅かれ早かれ自分が嫌になってしまうだろう。
「顔で思い出したんだが、やっぱり女も皆、美人なのか？」話題を変えつつ、少しの下心とともに尋ねる。男でこれほどの顔なら、女は想像を絶するのではないか。
「私が最後に見たのは四年前になりますが、この世のものとは思えないくらいに美しかったと記憶しています」カリムが記憶を探るように視線をさまよわせる。
やはり美女ぞろいらしい。しかし、それより引っ掛かる言葉があった。
「最後に見たのが四年前って、どういうことだ。交流はあるんだろ？」

「いえ、ありません」カリムはあっさり否定した。「緊急時を除くと、定期的にそれぞれの村で作ったものを交換する程度です。それも長とごく一部の者で行うため、交流と呼べるものはありません」

「それじゃ、どうやって子どもを……あー、えっと」

「〈命脈の儀〉のことですね」

言いよどむイズモに、カリムが微笑む。

「我々は決まった年齢になると、年に一度、満月の夜に聖域へ赴き、異性と夜が明けるまで性交渉を行います。この儀式を我々は〈命脈の儀〉と呼んでいます」

今年の〈命脈の儀〉は次の満月の夜だという。とんでもない時期に来たものだ。

「それなら、一年前になるんじゃないか？」

「儀式に参加できるのは、〈成人の儀〉を終えた十二歳から十四歳と定められています。私は今年で十八です。女と交わることはもうありません」

「はあ⁉」さすがに声が出る。

年に一度ですら少ないのに、女を抱く機会が人生でたった三回しかないというのは禁欲的にも程がある。

「こう言っちゃなんだが、我慢できるのか？」余計なお世話だと分かっていても疑念は拭えない。「男なんて年中発情しているようなもんだろ。こっそり逢うとか、

誘拐して集団で犯すとか、そういう問題は起きないのか？」
　イズモの疑問は想定内だったのだろう。カリムは首を振る。
「我々には相方がいますので、性欲の処理に異性を必要としません」
「相方？」
「性行為を行う同性の相手のことです」
沈黙。理解に時間がかかる。
「ええと、それはつまり、男同士で、そういうことを……？」
　カリムはさも当然というように頷く。
「主な目的は性欲の解消、および性交の練習ですが、精神的な結びつきを深める意味合いもあります。よほどの理由がない限り、相手が変わることはなく、生涯の伴侶となります」
「ど、どうりで」
　平然と跨ってきたわけだ。続けそうになった言葉を寸前で飲み込む。
　カリムにとって、男と寝ることは特別なことではない。うすうす感じていたことではあったが、残念に思う気持ちがどこかにあった。
　――ってことは、こいつにも？
　当然、カリムにも相方がいるのだろう。それは誰なのか。その人物はカリムがイ

ズモと寝たことを知っているのだろうか。知っていたとして、どう思っているのか。カリムは相方を差し置いてイズモと寝たことに罪悪感はないのか。
次々に疑問が湧いてくるが、尋ねる勇気はイズモにはなかった。
「人口抑制や治安維持のためだろうが、思い切った発想だな」内心を悟られないよう、会話を続ける。
耳を疑うような話ではあるが、合理的なのは確かだった。性別で村を分け、異性との性交を儀式化すれば色恋沙汰は起きず、人口が増え過ぎることもない。相方という存在は性欲を満たす相手であると同時に、相互監視により勝手な行動を防ぐ意味もあるのだろう。
「お前たちには当たり前なんだろうが、オレには耐え難いな。何十年って人生で、たった数回しか女を抱けないとか――」
言いかけて、違和感に気づく。記憶をたどり、思い違いではないことを確かめる。
「カリム。子どもたちは何人くらいいるんだ？」
「二十人くらいでしょうか」
やはり計算が合う。
「この村に住んでいるのは五十人くらいって言っていたよな？　魔狼を見に行ったやつら、畑にいたやつら、それに子どもの数を合わせると、それくらいにならない

か？」
「それで全員ですが、何かおかしいですか？」
「年寄りがいない」薄ら寒いものを感じ、早口になる。「年寄りだけじゃない。四十とか五十とか、そこそこ歳を取ったやつがひとりもいない」
いくら異種族の年齢が分かりにくいと言っても、若者と年寄りの区別くらいはつく。これまでに見た虎人の中に、高齢と呼べる人間はいなかった。
老人を山に捨てる話はあるが、働き盛りと呼ばれる年代が丸ごといないのは異常としか言いようがなかった。
「当然です。我々はそこまで長く生きられません」
返ってきた答えはイズモの想像をはるかに超えていた。
「我々の多くは二十五までに死を迎えます。例外はありますが、普通は長くとも三十までです」
「それは、けがや病気で命を落とすという意味か？」
「いえ、寿命です。ある日の晩、いつも通り床に就いたと思ったら、翌朝、息を引き取っている。いわゆる『大往生』ですね」
寿命。たった二十五年で。
カリムの声に悲愴感はない。昇った日が沈むように、自然の摂理として受け入れ

ているようだった。
「今の最高齢はバーリです。今年で二十八だったと記憶しています。元気に見えますが、今年か来年には……」
カリムが寂しそうに微笑む。先ほど別れた男の笑顔が蘇る。とてもではないが、近いうちに死ぬようには見えなかった。
「短命にも程がある。森の外なら、その倍から三倍は生きられる」
「承知しています。ですが、不幸だとは思いません。よく生き、よく死ぬ。それが我々のすべてです」
イズモは黙って頷いた。
彼らが強さに固執する理由が、少しだけ分かった気がした。彼らは短い人生の中で、命を燃やし尽くそうとしているのだ。そうしなければ、何者にもなれないまま、一瞬で終わってしまうから。
森の内と外。どちらが幸せなのか、イズモには分からなかった。

3

しばらく森の中を歩いていると、唐突に視界が開けた。

目の前に広がった光景に、イズモは思わず声を漏らした。紺碧の水を湛えた川が深緑の森を切り裂いていた。
山から流れ込む清冽な水は川底が見えるほどに透き通り、白い石を敷き詰めた河原が水の青さを引き立てる。幅広の流れは穏やかで、太陽の光を受けて、川面がきらきらと輝いている。
風光明媚を絵に描いたような、清らかな景色だった。
「あそこに、子どもたちがいます」
カリムが指差す方を見ると、川の浅瀬の辺りに五、六人の少年たちの姿が見えた。立ったまま微動だにせず、川面を睨んでいる。
「あれは何をやっているんだ?」
「狩りの練習です。音を立てないように近づいてみましょう」
カリムがいたずらっぽい笑みを浮かべ、イズモも足音を殺しながら進む。
河原には大小の石が転がっていて歩きにくい。気をつけないと足を滑らしそうだった。しかし、カリムはどんどん進んでいく。危なっかしい足運びに不安を覚えながら追いかける。
半分ほど近づいたところで、少年たちが槍を手にしていることに気づく。見ているのも水面ではなく、泳いでいる魚だ。浅瀬は積み上げた石で囲われており、即席

の生け簀になっていた。
——魚を狙っているのか。
ひとりの少年が膝の半分ほどを水に浸し、槍を構えている。顔立ちは幼いながら、目の鋭さは猛獣の片鱗を示していた。他の少年たちは河原でその様子を静かに見つめている。
少年たちの中に、見覚えのある姿があった。ラティフだ。胸の大きな傷は忘れようもない。他の少年たちから少し離れた場所で、彼らを見守っている。
川のそばまで来たとき、カリムが小さな声を上げ、上体が揺れた。踏んだ石が滑ったらしい。巨体がイズモの方へと倒れてくる。
とっさに両腕を突き出すが、体重がかかった途端、イズモの足も滑る。そのままもつれ合うように転倒、押し倒される。
あまりの重さにイズモの口からカエルが潰れたような声が漏れた。
少年たちが振り向くのと、驚いた魚が水しぶきを上げて逃げるのが同時。
浅瀬の少年が慌てて槍を突き出すが、穂先は川底を穿つだけ。少年が残念そうに肩を落とす。見事に邪魔をしてしまった。
少年たちが集まってきて、心配そうに声をかけてくる。
「カリム、いいかげん起きろ。苦しい」

「も、申し訳ありません」
カリムは心底申し訳なさそうな声を出すが、一向に退く気配がない。顔に当たる妙に柔らかい棒状のものに関しては極力考えないようにする。
少年たちが総出でカリムを移動させ、ようやく解放される。連日、男の下敷きになるのは勘弁してほしい。
服についた汚れを払っていると、カリムが座り込んだまま足首を押さえているのが目に入った。転んだ際に足を捻ったらしい。
少年たちは血の気の引いた顔を見合わせ、小声で話し合っている。ラティフもイズモに助けを求めるような目を向けていた。
「まったく、世話の焼けるやつだな」
イズモは懐から魔術符を取り出すと、カリムの足首に貼った。表面に描かれた文様が淡い光を放つ。カリムが表情を和らげ、ほっと息を吐く。
「立てるか？」
イズモが手を差し出すと、カリムは少し迷う素振りをしてからその手を掴み、こわごわと立ち上がった。
少年たちが目を丸くする。
「すごいですね。痛みが消えました。これも魔術なのですか？」

「魔術の一種だな。それはそうと気をつけろよ。子どもたちが心配するだろ」
「……申し訳ありません」
　カリムの顔に苦渋の色が浮かぶ。
「おいおい、そんなに落ち込むな。誰にだって失敗はあるだろ。別に高いものでもないし、気にしなくていい」
　しかし、カリムの表情は晴れない。何か気に障ることでも言ってしまったのだろうか。
　イズモが慌てていると、甲高い声が川に響いた。
　声の主を探すと、川上にある川に向かって突き出した岩の上に、小さな黄色い人影が見えた。遠目にもイズモより小さいことが分かる。狩りの練習をしていた少年たちよりも、さらに年少の子どもだ。
　岩の高さは十メートルほど。高飛込に使われる、飛び込み台くらいの高さだった。
「おい、あんなところにいたら危な――」
　イズモが言い終わる前に、少年は崖に向け走り出した。勢いのままに踏み切り、体が宙に舞う。落下が始まったところで両足を抱え、そのまま回転しながら落ちていく。まるで尻尾の付いたボールのようだった。
　水面に衝突する寸前で体を伸ばし、頭から着水。水しぶきをほとんど立てない、

見事な飛び込みだった。
近くを泳いでいた少年たちや、同じく崖の上で様子を見守っていた少年たちが歓声を上げ、浮き上がってきた少年がそれに応えるように両手を上げる。
さらに、イズモの周りにいた少年たちも歓声と拍手を送る。
年少の子どもたちの目が川下に向けられ、カリムとイズモの姿を認める。
次の瞬間、少年たちが一斉に動き出した。我先にと川から上がり、突進してくる。体は小さいが、躊躇いのなさは大猪口に勝るとも劣らない。
「イズモ！　イズモ！」
取り囲まれ、大合唱を浴びる。子猫のような顔に満面の喜色を浮かべ、遠慮のかけらもなく体を触ってくる。
「やめろ！　耳に触るな！　服を引っ張るな！　尻尾は丁寧に扱え！　というか、なんで全裸なんだ⁉　腰布はどうした⁉」
「腰布は成人の証であり、〈成人の儀〉を終えた者に与えられます。この子たちは未成年ですので、そもそも腰布を持っていません。腰布の素材となる布は女の村の特産で、虫の吐く糸から作るそうです。柔らかで手触りがよく、それでいて非常に丈夫で燃えることもありません。とても貴重で、腰布一枚分につき猪の魔獣二頭の肉と毛皮が交換の相場です。男は腰布にするのがやっとですが、女は全身を覆う服

を作り、その美しさや技術を競い合う文化があるといいます」
「今、その解説いるか!?　とにかくこいつらをなんとかしろ!!」
　イズモより背が低いといっても、骨の太さや体の頑強さが根本的に違う。ひとりふたりならともかく、十人を超えるとなると手に負えなかった。
　カリムがなだめるようなことを言っているようだが、興奮した少年たちは誰ひとりとして聞く耳を持たない。祈祷師の威厳も子どもたちには通じないらしい。
　イズモの我慢が限界に達したころ、鋭い声が響いた。決して大きくはないが、よく通る声だった。
　騒いでいた子どもたちが水を打ったように静かになり、声のした方を向く。視線の先にはラティフの姿があった。
　ラティフが何事か告げると、子どもたちはシュンとして、イズモから一歩離れる。
　カリムの言うことは聞かなくても、ラティフの発言は絶対らしい。
「祈祷師って、実はそこまですごくないのか？　ラティフの方がよっぽど尊敬されているようだが」
「そういうわけではないのですが、子どもたちは私の言うことをあまり聞いてくれなくて……」カリムは恥じ入るように俯（うつむ）いた。
　穏やかな表情や物腰の柔らかさに加え、バーリやアドルのような分かりやすい迫

力を持たないのが原因だろう。イズモも人のことは言えない。
「で、オチビサンたちは朝も来ていたらしいが、オレになんの用だったんだ」
イズモは屈んで子どもたちと目の高さを合わせ、できる限りの笑みを浮かべる。
子どもたちは誰が言うべきかと互いに視線を交わしていたが、ややあって、一番体の大きい子が緊張した面持ちで何か言った。
「魔狼を倒した魔術を見せてほしいと言っています」
「魔術か……」
イズモのような小柄な人間がどうやって魔狼を倒したのか。それが彼らの関心事らしい。子どもたちの目は期待に輝いていた。
「見せてやりたいのは山々なんだが」イズモが困ったように頭を掻く。「今は手持ちの魔石が少なくて、無駄遣いできない。諦めてくれ」
不満そうな顔をするかと思ったが、子どもたちは揃って首を傾げている。イズモの言っていることが理解できていない顔だ。
「イズモ様、魔石とはなんでしょうか？　それがないと魔術が使えないのですか？」
「何を当たり前な」言いかけて気づく。「そうか、お前たちは魔術を知らないのか」
ラティフが魔術符を見た時の反応を思い出す。未知の現象を目の当たりにし、信じられないという様子だった。

「でも、魔術の存在は知っているんだよな？」
「言葉だけは。魔術師と呼ばれる人々が使う驚異の技術だと。しかし、魔術がどういうものか、なぜ魔石が必要なのかは存じません」
村に魔術を使う人間がおらず、外部との交流もないとなると当然だろう。
魔石の説明自体は簡単だが、芋づる式に質問が飛んでくるのは目に見えていた。
一問一答をしていては日が暮れてしまう。
「魔術の解説をしといた方が良さそうだな。長くなるが、訳を頼めるか？」
「はい、お任せください」
カリムは嬉しそうに胸を張る。実のところ、一番知りたがっていたのはカリムらしい。
まさか自分が教える立場になるとは。イズモはため息をついた。伝わる気が微塵もしなかった。
「魔術っていうのは、祈りによって引き起こされる奇跡のことだ」
河原に座る二十人ほどの子どもたちを前に、イズモは口火を切った。
師匠から教わったことを思い出しながら、できるだけ簡単に、それでいて誤解のない表現を選ぶ。

「祈りとは『祈りを捧げる』の祈りですか？」
「いや、似て非なるものだ。魔術における祈りとは『感覚的、主観的な経験に基づく独特の質感』を意味する。例えば、肉を食べたときの美味いという感じ、けがをしたとき傷口がズキズキとする感じ。それを魔術師は祈りと呼んでいる」
カリムが分かったような、分からないような顔をしながら訳す。それを聞く子どもたちも同じような顔をしている。
気持ちは分かる。祈りは魔術の本質であると同時に、とても理解しにくい概念だ。
「その祈りが世界の法則を書き換えて、なんらかの現象を発生させる。銃弾を作ったり、傷を治したり。もちろん、すべての祈りが魔術になるわけじゃないが、どんな祈りが魔術になるかもよく分かっていない」
「ということは、誰にでも魔術が使えるのですか？」
「可能性の上ではな」イズモは慎重に言葉を選ぶ。「実際には魔術が使える人間は限られている。祈りが個人の性質に強く依存するからだ。同じ物を見たり、聞いたり、触ったり、嗅いだり、味わったとしても、感じ方は人によって違う。それと同じだ」
要するに才能や素質の問題だ。ただ、それは一歩間違えると選民思想に繋がる。言い方には気をつけなければならない。

「イズモ様は魔術になる祈りをどうやって呼び起こしているのですか？」
「オレの場合は合言葉だな。決まった言葉を心の中で思い浮かべることで、祈りを心の底から引き出す。いわゆる『呪文』だ」
子どもたちの目が輝く。イズモ自身、師匠から魔術の講義を受けたときは心が踊った。
「顔のない獣を撃つ始まりの鳥の矢羽。腕は弓、願いは矢。貫け、駒鳥」
子どもたちがポカンと口を開く。当時のイズモと同じ反応だった。
「それは……どういう意味ですか？」
「意味なんてない。その言葉を思い浮かべると、オレの中で祈りが生まれるってだけだ。オレの場合、鳥を連想するものが魔術になりやすい。だから、オレは自分の魔術を『鳥打ち』と呼んでいる。さっきの言葉だと〈駒鳥〉という銃弾を撃ち出す魔術が発動する」
鳥と銃で鳥打ち。安直だが、不思議としっくりくる。
なぜ、鳥なのか。当のイズモにも分からない。イズモを構成する、ありとあらゆる要素が魔術の方向性を決めた結果だ。本人に制御できるものではなく、魔術師の数だけ魔術が存在するとも言われる。
「以上が魔術の基本だ。ここまではいいか？」

子どもたちが神妙な顔で頷く。言葉は分かるが、意味は分からないという顔だ。
残念ながら、魔術はとても感覚的なもので、説明して分かるものではない。魔術が普遍的な技術にならなかった最大の理由でもある。
「次は魔術の要である術式機構についてだ。実のところ、祈りだけで魔術が使えるのは、天才と呼ばれるごく一部の人間だけだ。オレを含めた多くの魔術師は、術式機構と呼ばれる道具に頼っている」
イズモは背負っていた銃を子どもたちに見せる。
「この銃の場合、薬室と握把の部分に術式機構と呼ばれる装置が組み込まれていて、魔術師の祈りを安定させたり増幅したりする。オレは銃を使っているが、術式機構さえあれば武器はなんでもいい。一般的には剣だな。他には槍とか斧とか、接近戦もできる武器が好まれる」
銃を使う魔術師は少ない。超長距離から長距離なら絶対的な優位があるが、それ以下の間合いでは、むしろ不利となるからだ。加えて、魔術師の戦闘において高精度の銃撃が必要とされる状況がほとんどないことも、使い手の少なさに拍車をかけている。
しかし、小柄で手足が短く、体重も軽いイズモには、接近戦は絶望的だった。最低限の訓練は受けたものの、ほとんど身につかなかった。

そこでイズモは近距離戦を完全に捨て、銃による遠距離戦に特化した。その結果、唯一性を得て、居場所を確立するに至った。
「もうひとつ重要なのが魔石だ。魔石は魔力が詰まった石、魔力は魔術の燃料だと思えばいい。術式機構に魔石を入れて祈ると、祈りと魔石に封じられた魔力が結びつき、魔力が物理法則を一時的に書き換え、祈りに応じた魔術が発動する」
魔力は『世界の法則を維持する力』や『世界がそうあろうとする力』と説明されるが、長くなるのでやめておく。
「魔石は使い捨てで、一回の戦闘で大量に消費する。今は手持ちが心もとなくて、一発たりとも無駄にはできない。申し訳ないが分かってくれ」
子どもたちも少しは納得したようだったが、やはり不満は拭えないらしい。
そのとき、ひとりの少年が何か言い、それに同意するように声が広がっていく。
「魔石があれば見せてもらえるのか、と言っています。もしそうなら、皆で探すと」
「気持ちは嬉しいが……」魔術師でもない人間に見つけられるものではない。しかし、万が一ということもあると思い直す。「そうだな。それなりの量を見つけてくれたら、魔術を見せてやろう」
カリムが訳した途端、大歓声が上がる。
「魔石を見分ける方法はありますか？」

「見た目は黒く透き通っていて、よく見ると石の中で何かが光っている。それと、魔術の才能があると素手で触ったときに心がざわつくような感じがする。ひとつ本物を回すから参考にしてくれ」

カリムが訳すのを待ち、弾倉から取り出した魔石を近くの少年に渡す。

少年は魔石をしげしげと眺めていたが、隣の少年に急かされ、しぶしぶ渡す。一通り子どもたちが触った後、ラティフに渡される。

ラティフは首を傾げながら手の中で転がし、カリムに渡す。カリムは触れた瞬間、耳をピクリと動かし、じっと魔石を見つめていた。

しばらくして、カリムが魔石を返してくる。

「じゃあ、魔石探しは任せたぞ。魔術が見られるかどうかは、お前たちにかかっているからな」

カリムが言い終わるやいなや、子どもたちは一目散に駆け出した。瞬く間に森へと消え、残ったのはイズモとカリム、そしてラティフだけだった。

「あいつら、狩りの練習をしてたんじゃないのか」

「今日のところは終わりにするしかなさそうですね」

少年たちが見えなくなったところで、ラティフがイズモに話しかけてくる。やや深刻そうな声色だった。カリムが表情を曇らせ、ラティフに尋ね返す。

「どうした？」
「イズモ様の体はもう大丈夫なのか、と聞いています。魔狼を倒された直後、ひどく具合を悪くされていたそうですが、本当ですか？」
カリムも気遣う様子を見せる。
「あー、あれは……」言いながら、言い訳を探す。
あのことをラティフが覚えていたのは予想外だった。嘘をつくと後々面倒だが、正直に話すこともできない。
「あれは、過負荷による一時的な体調不良だ」
なんとか言葉をひねり出し、笑みを作る。
「魔術を短時間に連続して使ったり、実力を超える魔術を使ったりすると体、特に脳に負担がかかる。魔狼は強敵だったからな。無理をしてしまった」
祈りと魔力の関係は、機械と燃料に例えられる。祈りは魔術を出力する機械であり、そこに魔力という燃料を注ぐのだ。
大量の燃料で機械をフル稼働させれば、それを支える肉体に負担がかかる。数日寝込むくらいならマシで、最悪の場合、脳に障害が残る。
「今は十分な食事と睡眠で回復した。ほら、この通り」
右腕を曲げ、小さな力こぶを作って見せる。わざとらしいとは思ったが、カリム

とラティフはホッとした顔を見せた。
「オレはもう大丈夫だから、魔石探しを頑張ってくれ」
ラティフは頷くと、川を指さし何か言う。そしてイズモとカリムに頭を下げ、子どもたちの後を追った。
「ラティフに聞くことがあったのでは？」ラティフが河原の半分ほどまで進んだとき、カリムが思い出したように言う。
「槍を投げたのは本当かって話だったな。おーい、ラティフ！」
イズモの呼びかけにラティフが振り返る。
その拍子にラティフの手から槍が転がり落ちた。わざとでも不注意でもなく、抜け落ちるように。ラティフは恥ずかしさと悔しさの混じった顔で槍を拾う。
続けようとした言葉は喉の奥に引っ込んでしまった。ラティフは何も言わないイズモを不思議そうな顔で見ている。
「……魔石を頼んだぞ」なんとかそれだけ言う。
ラティフは笑顔で頷き、走っていった。
わずかに右足を庇いながら走る後ろ姿を、イズモはずっと見つめていた。
「イズモ様」

ラティフの後ろ姿が見えなくなってから、カリムが声をかけてきた。
「ラティフからの伝言で、練習に使っていた魚を食べてほしいそうです。よければここで焼きませんか？」
見ると、川の近くに小枝の山があった。もともと、練習が終わったら食べるつもりだったのだろう。準備のいいことだ。
「遠慮なくいただくとするか」
気持ちを切り替え、浅瀬に近づく。日光に輝く川面の間に、優雅に泳ぐ四つの魚影があった。イズモの腕ほどの大きさで、ときおり鱗が光る。
「一匹も捕まえられてなかったのか。魔石探しより頑張るべきことがあるだろ」
練習が嫌で、逃げ出す口実が欲しかったのだろうか。子猫のように見えて、なかなか侮れない子どもたちだ。
「釣りには準備がかかるな。となると……」
「私が捕ります。いわゆる『汚名返上』です」
イズモが思案していると、カリムが鼻息を荒くして川に入っていく。素手で掴み取りするつもりらしい。
一匹に狙いを定め、ゆっくりと近づく。魚は狙われていることに気づいておらず、呑気に同じ位置で泳いでいる。

十分に近づいたところで、掴みかかる。が、どう見ても遅い。手が水面に入る前に、魚は体をくねらせて逃げる。
カリムは悔しそうに魚を見ていたが、気を取り直し、別の魚に近づく。間合いに捉え、再び腕を伸ばすも、やはり逃げられる。
それが三回、四回と繰り返される。
「もしかして、体を動かすのが苦手か？」
「そ、そんなことはありません！」
カリムは気丈に反論するが、目を合わせようとしなかった。白い体は水中から見ると日光の反射に紛れて分かりにくいと聞いたことがある。それでも駄目ということは、そういうことなのだろう。
「……カリム。頑張っているところで悪いんだが、ちょっといいか」
十回目の挑戦に失敗し、泣きそうになっていたカリムが顔を上げる。イズモが手招きすると、しぶしぶ川から上がった。
「気晴らしに、ちょっとした手品をしてやろう」近くの石を拾いながら、イズモが不敵な笑みを浮かべる。
「手品とは『種も仕掛けもありません』の手品ですか？」
「そうだ。めったに人に見せないんだが、お前は特別だ」

イズモは川に近づき、魚を選ぶ。石で囲われていても水の流れがあり、魚はそれに逆らって一定の速度で泳いでいる。
「これは今拾ったばかりの、種も仕掛けもない石ころだ。だがオレの手にかかると」
イズモが石を振りかぶる。
次の瞬間、イズモの腕が残像を伴って弧を描く。投げられた石が唸りを上げて直進。水面を突き破り、魚の頭部を直撃。水しぶきとともに、赤い靄が広がる。頭を失った魚が腹を見せて浮かび上がり、血とともに清流に流されていく。
「この通り、立派な武器になる」
唖然とするカリムを無視して、イズモは淡々と残りの三匹も仕留めていった。
「イズモ様は魔術を使わずともお強いのでは？」
頭のない魚を集めながらカリムが呟く。
「魔術に習熟すると体の中に術式機構に似た仕組みが作られる。その結果、自己治癒力や身体能力が向上する。オレは元が非力だからこの程度だ。実践には使えない」
カリムから魚を受け取り、枝を刺しながら説明する。
「イズモ様でこの程度とおっしゃいますと、もっとすごい方々がいらっしゃるのですか？」
「高位の前衛魔術師は化物だ。馬鹿みたいに重い武器を片手で振り回したり、火薬

式拳銃の銃弾を見切って防いだりする。オレなんて相手にもならない」
イズモが魚の処理をしている間に、カリムは枝を組み立て、焚き火の準備を進めていた。
どうやって火をつけるのかと見ていたら、カリムは腰の道具入れから木の板と棒を取り出した。錐揉み式発火法という言葉が脳裏をよぎる。熟練者なら十秒ほどで火種を作れるそうだが、カリムの持つ道具の真新しさを考えると期待できない。
「火をおこすなら、いい道具がある」
イズモは懐を探ると、手のひらに乗るほどの黒い棒を取り出した。棒の先端を捻ると、ぽっと軽い音がして先端に火が現れる。もう一度捻ると消える。
「これは発火の魔術具だ。これを使えば、誰にでも簡単に火をおこせる」
「私にも、ですか？」カリムが疑うような目を向ける。
カリムの疑念が「魔術師でなくとも」なのか「不器用でも」なのかイズモは判断しかねたが、笑顔で頷いておく。
「魔術具は祈りそれ自体を封じた魔石と、燃料となる魔石で構成され、それらを接触させて魔術を発動する。使用者の魔術的才能や状況にかかわらず、任意のタイミングで発動できる。さっき、お前の捻挫の治療に使った魔術符も魔術具の一種だ」
イズモが差し出すと、カリムは恭しく受け取り、興味深そうに眺める。

「そんな便利な道具があるのですか」
「万能とは言えないが、ものによっては代えが利かない。とはいえ、普通の道具の方が機能性や利便性で勝ることも少なくない。ペンとか気付け薬とか」
衝撃を思い出したのか、カリムが青ざめる。
実用的な魔術具は決して多くない。昔ならいざ知らず、今は魔術より便利な道具があふれている。
着火具にしても、マッチやライターの方が便利なのは火を見るより明らかだ。イズモも友人の形見でなければ持ち歩いていなかった。
「案ずるより産むが易しだ。とりあえず試してみろよ」
イズモが促すと、カリムは慎重な手つきで魔術具の上部を回す。カチリ、と噛み合う音がした瞬間、先端から盛大に火が吹き出し、カリムの鼻先を掠める。
「ニャーッ!?」
慌てたカリムがとっさに魔術具を放り投げる。
それは見事な放物線を描き――。
ぽちゃん、と軽い音とともに川の中程に落ちた。
沈黙。
「もももも申し訳ありません！」

カリムは飛び上がるように立ち上がると、イズモが止める間もなく川に飛び込んだ。カリムが消えていった川面を見つめ、不安に駆られる。

――あいつ、泳げるのか……？

常識的に考えれば、泳げもしないのに飛び込んだりはしないだろう。しかし、カリムにその常識があるのか、一抹の不安が残る。

助けを呼びに行くべきか心配になりかけたころ、白い影が水面を割って現れた。

「イズモ様！　ありました！」

カリムが意気揚々と魔術具を掲げる。しかし、カリムが持っているのは火が出る部分だった。

「火はまだ消えてないから気をつけ――」

「ゴャーッ!?」

悲鳴とともに火のついた魔術具が再び宙を舞い、川の中に落ちる。白い虎は再び水中へと潜っていった。

「何やってんだか」

呆れながら魔術符を用意するイズモの口元には、自然と笑みが浮かんでいた。

「お前には魔術の才能があるのかもな」

焚き火の前で、串に刺した魚の位置を調整しながらイズモが言う。
「私に、ですか？」毛を乾かしていたカリムが胡乱な目を向けてくる。
カリムは当然のように全裸であり、イズモの位置からはふてぶてしい股ぐらが嫌でも目に入った。目のやり場に困ってカリムの顔を見るが、ひげの先端が縮れており、笑いそうになって、手元に視線を落とす。
「魔術具を使うときに、火が燃え上がるところを考えなかったか？　お前の祈りが魔術具に干渉した可能性がある」
祈りは不安定なものであり、魔術具に込められた祈りは外部からの影響を受けやすい。一般に流通している魔術具には対策が施されているが、あれは個人制作のものので、そこまで行き届いていない。
「そうだとしたら、自分の魔術で火傷をしたことになりますね。お恥ずかしい限りです」
炎の向こうでカリムが笑う。言葉の割には嬉しそうな笑い方だった。
この村の人間には、先天的に魔術の才能があるのではないか。ふと、そんな考えが頭をよぎる。
カリムが魔術具の祈りに干渉したのは分かりやすい例だが、バーリたちが魔狼との戦いで見せた並外れた身体能力も、魔術による肉体強化なら説明がつく。

魔術の才能には少なからず血筋が影響する。閉ざされた環境で交配を重ねた結果、血が異常に濃くなり、寿命と引き換えに魔術の素質を得たのではないか。
「カリム。ラティフについて少し教えてくれないか」
「何か、気になることがありましたか？」
「魔狼との戦闘を思い出していたんだが、状況的に槍を投げたのはラティフとしか考えられない。魔術には自身の身体能力を強化するものがあって、ラティフは槍を投げる一瞬だけ、その力を発揮したのかもしれない。過去にラティフが信じられない力を使った事例はないか？」
カリムが記憶を探るように火に目を向ける。カリムの青い目に、焚き火が映り、ちらちらと揺れていた。
「それでしたら、村で語り草になっている話があります。三年前、ラティフの〈成人の儀〉で起きた事件です」
カリムは言葉を選ぶように、静かに語りだした。
「この村では、十二歳になった子どもたちだけで、森で一夜を明かす習わしがあります。日が昇るまでは、水も食べ物も寝る場所も自分たちだけで確保しなければなりません。その試練を乗り越えて初めて、大人として認められます」
日々の食べ物や安全が大人たちの努力によるものだと知り、今度は自分たちがそ

の立場になるのだと自覚する。それが、この村で大人になるということだった。
だが、その年は大人たちの思惑通りにはいかなかった。
「儀式にはラティフを含め、三人が参加していました。夜になり、彼らが野営をしているると、猪の魔獣が襲ってきたのです」
大猪口は昼行性であり、図体の割には臆病で、自ら人間を襲うことはない。しかし、何かのはずみで怒らせてしまったらしい。
「ラティフは他の子を逃がすために、魔獣に立ち向かいました。たったひとりで」
十二歳ならイズモと同じくらいの背丈だ。自分よりはるかに巨大な魔獣に正面から挑むなど、正気の沙汰ではない。
「ひとりが村に逃げ込んで、すぐに大人たちが駆けつけました。いくら通過儀礼とはいえ、子どもたちは村の財産です。死なせるわけにはいきません」
とは言っても、ラティフは子どもで相手は魔獣だ。皆、最悪の事態を覚悟した。
「しかし、到着した大人たちが見たものは、頭が粉砕された魔獣の死骸と、それを見下ろす血まみれのラティフでした」
「ラティフが大猪口を倒した、と？」驚くイズモに、カリムが頷く。
「すぐに村に運ばれ、なんとか一命を取り留めましたが、砕けていた右手と、牙の刺さった左足に障害が残りました」

当時のことを思い出したように、カリムの目には憂いが浮かんでいた。
魔獣の頭蓋骨を素手で砕く。高位の魔術師の所業を十二歳の子どもがやってのけた。ラティフが一目置かれているのも頷ける話だった。魔狼の一件もラティフで間違いないだろう。
もし、そのまま大人になっていたら、超級の戦士になれたかもしれない。しかし、その才能は潰えてしまった。
「なんで、逃げなかったんだろうな」
思わず呟いたイズモに、カリムが悲しい笑みを浮かべる。
「逃げるなど考えもしなかったのでしょう。誰かのために、後先考えずに行動してしまう。あの子はそういう子です。生まれながらの勇者、というのでしょうか」
それ故に、二度と戦えない体になった。
「今も槍を持っているのは、戦うことを諦めたわけじゃないってことか」
「体が思うように動かなくなったからといって、生き方を変える子ではありません。だからこそ、我々は彼を尊敬し、私の護衛や狩りの教師を任されているのです」
ラティフの顔を思い出す。年の割に落ち着きのある、穏やかな少年。
希望を失ってなお、誇りを失わずに生きることの難しさをイズモは知っている。
イズモが早々に捨てたものを、ラティフは手放さなかった。どうすれば、そんな気

高い生き方ができるのだろうか。

「そろそろ焼けたのではないですか？」

カリムの声でイズモは我に返った。食べ物を目の前にして考え事などらしくもない。一番よく焼けているものを選び、カリムに差し出す。

「英雄の焼いた魚を食べられるなんて、私は果報者ですね」カリムは嬉しそうに受け取る。

歯の浮くようなお世辞。普段なら勘ぐるところだが、カリムなら素直に受け取ってもいいと思えた。

「いっただっきま――」

「カリム！」魚にかぶりつこうとしたとき、河原に声が響いた。見ると、森の近くにふたりの虎人が立っている。

「バーリと、あいつはたしか……」

「ガビトですね。昨日の護衛のひとりです」

イズモにも覚えがあった。魔狼の目の前で転んだ男であり、魔狼に投げられてイズモとぶつかった男だ。本人に責任はないが、あまりいい思い出はない。

カリムが手を振ると、バーリとガビトはホッとした顔で駆け寄ってきた。

バーリはイズモを気にしつつ、カリムに早口で何かを伝える。

「イズモ様、申し訳ありません。アドルがお話を聞きたいそうです」
「魔術の件だな。ま、予想はしていた」
夕飯までに終わればいいな。イズモは魚をかじりながら思った。

4

ガビトの案内で森を進む。
日はちょうど真上にあり、湿気と気温が増してくる。爽やかな陽気は蒸し暑い熱気に変わり、上着を脱いでも涼しくならない。背中と背嚢の間に汗が滲み、シャツを湿らせていく。
上着と荷物はカリムの家に置いてきても良かったかもしれない。そう思ったが、盗られる不安は拭えなかった。
「ガビト、昨日の傷はもう平気か？」
イズモが声をかけると、青年はにっこりと笑い、腕を回してみせた。
「イズモ様のおかげで、すっかり良くなったそうです」
ガビトはカリムより少し背が低く、他の男たちに比べて体つきが丸い。太めの眉に愛嬌のあるタレ目と、カリムとは別の意味で優しい顔をしていた。印象としては、

虎というより凛々しい猫に近い。
　ふと、ガビトが表情を引き締め、話しかけてくる。
「どうすればイズモ様のように勇敢になれるのか、と聞いています。あのとき、ガビトは魔狼が怖くて怖くて仕方なかったそうです」
　ガビトの顔は真剣だった。彼なりに昨日のことを気にしていたらしい。
「オレは勇敢じゃないぞ。あのときはただ、『今逃げたら死ぬより後悔する』って思っただけだ。そうなったら、どんなに怖くても立ち向かうしかない。そう思えないんだったら、迷わず逃げるべきだ」
　イズモは少し悩み、当たり障りない言葉を口にする。軽はずみなことを言って、ガビトがその通りに行動してしまったら責任問題になりかねない。
「とはいえ、場数を踏んで慣れるのが一番だな。平常心を失わないだけで生存率は上がる。それと、お前は少し痩せた方がいい。防具がない以上、相手の攻撃は避けるしかないが、その腹は邪魔だろ」
　途中まで訳していたカリムが、困ったように言葉を止める。伝えるべきかどうか迷っているようだった。カビトが催促し、カリムがしぶしぶ訳す。
　ピシッ、と空気が軋む音がした気がした。ガビトの笑顔が硬直し、顔から汗が滝のように吹き出す。ふたりの反応から察するに、指摘したのはイズモが初めてでは

ないらしい。

「自覚があるなら努力しろよ」

イズモが冷たい目を向けると、ガビトは目を背けるように前を向いた。

――同じ虎人でも、個性があるんだな。

同じ虎人でも、こうして接してみると、ひとりひとり見た目も性格も違うのだと分かる。そのうち全員を見分けられるようになるだろうが、この村以外で役に立つとは思えない技能だ。

「イズモ様。魔術について、もう少しお聞かせください」

ガビトの丸々とした後ろ姿を眺めていると、カリムが声をかけてきた。

「イズモ様はラティフが魔術を使ったとお考えですか？」

河原での話の続きらしい。

「可能性は高いと思っている。そうでもないと、説明がつかないからな」

「魔術を知らない人間が、それと知らないまま魔術を使うことがあるのですか？」

「もちろんだ。魔術を最初に使った人間の逸話がまさにそれだな」

記憶を探り、話の概要を思い出す。

「昔々あるところに仲のいい親子が住んでいた。ある日、親子が山で薪を集めていると魔獣に襲われ、子どもを庇った親が大けがをした。助けを呼ぶ余裕はなく、子

どもはすがる思いで神に祈った。すると見る間に親の傷が癒えた。子どもが無自覚に魔術を使ったんだ」
　カリムの青い目の奥で、感情が揺らめく。
「だが、話はそれで終わらなかった。別の日、親子はまた魔獣に襲われ、親が大けがをした。子どもは祈った。しかし、魔術は起きず、親は死んでしまった」
「なぜ、二回目は失敗したのですか？」
「祈りが違ったんだ。一回目は間違いなく必死だったはずだ。だが、二回目は一回目のことが頭にあって、同じ必死さになれなかった。心のどこかに助かるに違いないという思いがあったんだ。同じことが二回目以降できなくなる事例は魔術ではよくある。魔術における祈りという呼称も、この話が元になっている」
「いわゆる『ビギナーズラック』ですね」
「お前、そういう妙な言葉には詳しいよな」
　魔術の再現性のなさは、奇跡としての側面を強調する。危機に瀕し、魔術が発動して人を救ったり、敵を打ち破ったりという逸話は各所にある。
　そして同じくらい、二回目に失敗する話もある。
「しかし、ラティフは過去に少なくとも二回、魔術を使ったことになります。だとすれば、三回目や四回目があっても不思議ではありません。練習すれば、元のよう

に動けるようになりませんか？」
　カリムの声には、祈るような響きがあった。ラティフをずっと見てきた人間の、切なる願いだった。
　イズモは少し迷い、「難しいだろうな」と、突き放す言葉を選んだ。
「ラティフに魔術の才能があるのは確かだろう。だが、それを伸ばせるかは別問題だ。自身の祈りを認識し、性質を理解し、自由に引き出し、さらに応用する。そこにたどり着けるのは優秀な教育者と環境があっても一握りの人間だけだ。確率的にも環境的にも時間的にも望みは薄い」
　頑張ればきっとできる、と安易な希望を与えるのは簡単だ。しかし、カリムに無責任なことを言いたくなかった。他人の人生を背負えるほど、自分は強くない。
「そう、ですか」カリムは悲しそうに視線を落とす。
　ラティフはイズモを助けてくれた。イズモとしても、なんとかしてやりたいと思う。しかし、魔術はおとぎ話に出てくる魔法ではない。困っている人間の願いを都合よく叶えてくれたりはしない。
　魔術とは、そういうものだ。

　そうこうするうちに、三人は花畑に到着した。

現場には魔狼の体や魔術の痕跡が、昨日見たままの形で残っていた。
魔狼の肉は誰も食べない。獣も魔獣も、死してなお残る不吉さを忌避して、近寄ろうともしないのだ。掃除は蛆や微生物に任せるしかない。
ガビトがイズモの到着を告げると、現場を調べていた男たちの視線が一斉に向けられた。朝とは空気感が違う。ただの好奇心から困惑に近いものに変わっている。本当にイズモが魔狼を倒したのか。そう思っているのが伝わってくる。
アドルがやってきて、イズモに会釈をする。
「ご足労いただき感謝する。私もこれほどの状況とは想像していなかった。ここで何があったのか、貴殿がどのようにして仲間を救い出したのか、教えを請いたい」
カリムの訳を聞いて最初に思ったのは、「謙虚だな」だった。
イズモがこれまでに会った権力者は、己の至らなさを認めたり、格下の相手に頭を下げたりすることを極端に嫌った。アドルは大物の雰囲気をまといながらも決して尊大な態度は取らない。器が大きいとはこういうことだろうか。
「寝食の恩があるから協力は惜しまないつもりだ。それで何が聞きたいんだ？」
「イズモ様が魔狼と戦い始めたところから、どんな動きをして、どんな魔術を使ったのかを伺いたいと」
「本当に実況見分だな」

魔術師は自分の魔術を他人に教えない。

どこからか敵に漏れ、対策を取られれば命に関わるからだ。連携のために情報共有することはあっても、切り札は最後まで隠し持つ。

――まあ、ここで話しても外には漏れないか。

彼らが何をするわけでもない。協力すると言った以上、妥協できるところは妥協すべきだろう。

「承知した。ただ、魔術師の立場上、どうしても言えないこともある。そこは勘弁してくれ」

アドルは耳をピクリと動かしたが、鷹揚に頷いた。

イズモはふたりを、魔狼を銃撃した地点に案内する。

「オレが騒ぎを聞きつけて駆けつけたとき、魔狼がラティフに飛びかかろうとしていた。オレはとっさに銃撃の魔術を使った。あの穴はそのときのものだ」

自分と魔狼の位置を示す。実際はそのずっと前から覗き見し、直前まで彼らを見捨てるつもりだったのだが、当然言わない。

森の中を移動しつつ、話を進める。

「オレが煙を出す魔術で魔狼の視界を塞いだとき、魔狼が炎を凝縮した光線のような魔術を放った。森が焼けているのは魔狼の魔術によるものだ」

「魔獣も魔術が使えるのですか？」カリムが驚く。
「魔術とは本来、魔獣の使う力を指す言葉だ。魔獣が使う術だから魔術。多くの魔獣はその力を肉体強化に使うだけだが、魔狼のような高位の魔獣は様々な形で行使する。火を吐いたり、空を飛んだり」
この森には低位の魔獣しかいないらしい。平和なことだ。
「魔獣の体には魔術を起こす仕組みが先天的に備わっている。人間はそれを術式機構として用いることで魔術を使えるようになった。凡庸な魔術師は魔獣の力を借りているだけってことだ。本物の魔術と区別するために疑似魔術と呼ぶこともある」
イズモとカリムが話している間、アドルには眉間にしわを寄せ、焼け焦げた森を睨んでいた。顔には深い憂慮が浮かんでいる。
「オレは罠を仕掛け、魔狼を追い詰めたが、魔狼は負傷覚悟で脱出して花畑に引き返した。そして追いかけてきたオレにガビトを投げつけ、とどめを刺そうとした。だが、ラティフが槍を投げて注意を逸らし、その隙に魔狼の首を撃って倒した」
言えない部分は曖昧な表現に留める。あのときはラティフも必死だったはずで、そこまでは覚えていないだろう。
「ラティフが槍を投げたとはどういうことか、と聞いています」
「その通りの意味だ。お前たちが持っている石槍を魔狼に投げたんだ。帰ったら魔

狼の首を調べてみるといい。口吻の辺りに槍が刺さった痕があるはずだ」
イズモは身振り手振りであのシーンを再現する。アドルは眉をひそめていたが、
「確かめてみよう」と言って、引き下がった。
一通り説明を終えると、アドルは少し考える時間が欲しいと言って、ひとりで破壊された森を調べ始めた。いくつもの木が倒れ、幹に穴が空き、焼けている。自分の目で見て、説明を受けても、信じられるものではないだろう。
「イズモ様」アドルを待っていると、カリムが不安な顔で話しかけてきた。「先ほど、魔術師の魔術は魔獣の力を借りているだけだとおっしゃいましたが、これほどの威力があっても本物には及ばないのですか？」
「実際のところ、オレ程度の魔術師は珍しくない」イズモは肩をすくめる。「魔術師の実力は魔術師協会という組織によって特級から七級までの八段階で評価されるんだが、オレは一級、上から二番目だ。高位ではあるが常識の範囲内だ」
同じ階級でも実力には格差があり、イズモは一級の中でも下の方だった。
「本当の魔術師と呼べるのは特級だけだ。王の近衛兵や軍の特殊部隊、強大な魔獣を狩る猟師、最重要指名手配犯を捕まえる国際警察。まさに人外の領域だ」
彼らの力は現代技術でも再現不能とされる。イズモは一度だけ、特級魔術師同士の戦闘を見たことがあったが、山が消え、谷が埋まり、平地に湖ができるような超

破壊の応酬だった。もはや自然災害だ。思い出しただけで身震いする。
「これが、魔術……」
カリムは痛ましいものを見るように、森を見つめていた。

しばらくして、アドルがカリムを呼び、何やら話しだした。よほど聞かれたくないのか、イズモや男たちから離れたところで声を潜めている。カリムの表情を見るに、あまり明るい話題ではないようだった。
話が終わると、アドルは男たちを集め、魔狼を解体して村に運ぶよう命じた。男たちは驚いたようだったが、不満を漏らす者はなく、手早く作業に取り掛かった。
魔狼の体に男たちが群がる。腹を割いて内臓を取り出し、毛皮を剥ぐ。関節を外し、肉を一定の大きさに切る。
男たちの体は見る間にどす黒い赤に染まり、猟奇映画さながらの光景だった。
「魔狼の肉なんてどうする気だ。いくらオレでも蛆が湧いた肉なんて食わないぞ」
「アドルに何か考えがあるようです」
イズモの軽口にも、カリムは言葉少なに答えるだけだった。
カリムが知らないはずがない。イズモは疑わしげな目を向けるが、カリムは詮索を拒むように、解体されていく様を沈痛な面持ちで見つめていた。

小一時間で、魔狼の体は肉と骨の山に変わった。

男たちはその辺にある木の枝と蔓で即席の背負子を作り、積み上げる。荷造りが終わると、すぐに帰路についた。

肉を運ぶ男たちを中心に、数人の男たちが警備にあたる。先頭はラティフと同じ年頃の、顔に大きな傷のある少年で、最後尾はアドルだった。

血臭を漂わせ、黙々と歩く男たち。血まみれの集団に囲まれていると、亡者の仲間入りをした気分になった。地獄があるとしたら、こんな光景なのだろうか。

「魔狼を弔う件はどうなったんだ？」魔狼の肉で思い出し、尋ねてみる。

「今夜にも、魔狼の首を広場の火で荼毘に付します」

ということは、体は別の用途ということだ。まったく想像できない。

「火葬、か」イズモがポツリと呟く。

「魔獣を弔うなど、やはりおかしいでしょうか」イズモの発言を誤解したカリムが悲しげな顔を向けてくる。

「お前たちの倫理観に、部外者であるオレがどうこう言うのは筋違いだろ。生贄で誰か殺すって言い出したら、さすがに話は違ってくるが」

カリムの目に何か感情が浮かんだが、結局、何も言わなかった。

「そうだ。ひとつ頼みがある」さも、今思い出したかのように、さり気なく話題を

持ち出す。「首を燃やす前に犬歯を一本くれないか？」
　魔狼討伐は予定外の行為だが、依頼を遂行する上で必要だったことには手当が出る。魔狼の犬歯はその証拠となり、後で売ることもできる。一石二鳥だ。
「承知しました」
　意外にも、カリムはあっさり頷いた。
「我々も倒した相手を忘れないために、体の一部を持ち帰ることがあります。自分の誇りや相手への敬意と理由は様々ですが。いわゆる『戦利品』ですね」
「助かる」イズモはそれだけ言って、視線を逸らした。
　しばらくして村が見えてくる。しかし、隊列はそのまま村を通り過ぎてしまった。
「村に戻るんじゃないのか？」
「魔狼の肉はこの先にある倉庫で保管します」
「倉庫？」
　男たちの向かう先をよく見ると、木々の間に大きな家のようなものが見えた。
「倉庫は加工した肉や魚、野菜、道具を作るための石や枝などの各種素材をまとめて入れておく場所です」
「食料と魔狼の肉を一緒にするのは感心しないな。臭いが移るぞ」
「一時的な措置です。ご容赦ください」

肉はすぐに使うわけでもないらしい。ますます分からない。
不思議に思っていると、前を歩いていた男にぶつかり、尻餅をつく。男が慌てて謝り、起き上がるのを手伝ってくれる。
「どうしたんだ?」
「列全体が止まっているようです」
前を見ると、先頭を歩いていた少年が後続を制するように、左手を上げている。緊張で尻尾の毛が逆だっている。
——何かあったのか?
男たちの間を抜けて前に出ると、先頭にいた少年がイズモを横目で睨んだ。部外者が出てくるな、と顔に書いてあるが、知ったことではない。
前方には、村の家と同じ形をした倉庫があった。
カリムの家と同程度の大きさがあり、周りは獣避けと思しき柵で囲われている。
それが半壊していた。柵がなぎ倒され、倉庫の壁の一角が崩れている。周りには倉庫を構成していた木や藁が散らばり、無惨な状況だった。
だが、問題はそこではなかった。
——何か、いる。
倉庫に頭を突っ込むように、何かが動いていた。

真っ黒な毛皮と、ずんぐりむっくりした体。一見、熊に見えるが、体の大きさが段違いだった。四足で立っていても体高は男たちと同じくらいあり、腕や足の太さは男たちの胴回りほどもある。

ミオスタチン関連筋肉肥大病という全身の筋肉が異常発達する病気があるが、それをさらにひどくしたような異形。毛皮で作った巨大なぬいぐるみに、綿を限界以上に詰め込んだような、醜悪な姿だった。

イズモの後方でドスンと何かが落ちる音がした。誰かが荷物を落としたか、転んだか。どちらにせよ、確認する余裕はない。

音に気づいたのか、それの動きが止まり、振り向く。

奇怪な顔だった。半分に割った白い球に穴を三つ空け、首の断面に貼り付けたような、雑に作った仮面のような、無機質で無表情な顔だった。

深淵を思わせる感情のない目が、男たちを見下ろす。

肉熊（にくぐま）。熊の魔獣。

白い顔が痙攣したように震え、カタカタと音を立てた。

威嚇音。

イズモの脳内で警報が鳴り響く。

男たちが荷物を放り出し、槍を構える。それに応じるように、肉熊が立ち上がり、

吠えた。
　およそ生き物が発する声とは思えない声。地獄の底から吹き上げてくるような、不気味な風音だった。
　肉熊が突進を開始。四足で猛然と向かってくる。太すぎる脚が倉庫の残骸が踏み潰し、残っていた柵を蹴散らす。
　イズモは反射的に銃を構え、肉熊の顔に狙いをつける。引き金を引こうとした直後、イズモの前に男たちが立ち塞がる。
「おい!?　何やってんだ!?」
　イズモが男たちを押しのけようとすると、後ろから抱き上げるようにして引き剥がされる。
　振り向くと、ガビトの緊張した顔があった。首を激しく横に振り、イズモを羽交い締めにして隊列の後ろの方に引きずっていく。腕を振り払おうにも、男の腕はあまりに太く、力強い。
　彼らはイズモの魔術を知らない。前に立つと邪魔になることが分からないのだ。彼らはただ、イズモを守ろうと前に出ただけだ。
「そんなんでなんとかなる相手じゃないだろ！」
　肉熊の膂力（りょりょく）は木を安々となぎ倒す。人間の体など障害にもならない。彼らが知

らないとも思えないが、彼らは魔獣に槍を向けたまま動こうとしなかった。
そうしている間にも、肉熊は目の前に迫る。
「逃げろ！」
イズモが叫んだとき、男たちの前に黒い影が歩み出た。
闇のような被毛。雷のような縞模様。驀進する魔獣を目の前にしても、端正な顔は揺るがない。
――アドル⁉
イズモが認識するのと、黒虎が槍を投げるのが同時。
右目を正確に狙う一投を、肉熊は右腕で払い除ける。
槍が砕け、木片が飛ぶ。だが、それは囮。相手の意識が逸れた隙に、アドルは振られた腕の下をくぐり、魔獣の懐に飛び込んでいた。
アドルの腕が霞み、超高速の掌底が魔獣の顎を打ち抜く。
岩が砕けるような音とともに、肉熊の白い顔にひびが走り、巨体がのけ反る。頭蓋骨が頸椎から外れたのか、首が異様に伸びている。そのまま後方へと傾き、倒れる。
地面を揺るがす振動と音。
魔獣は断末魔の痙攣をするだけで、起き上がる気配はなかった。やがて、動きが完全に止まる。

男たちがほっと息を吐き、緊張を解く。
ガビトもイズモを解放するが、イズモはその場に立ち尽くした。
様々なことが一度に起こり、脳の処理が追いつかない。
「肉熊を素手で、しかも一撃で倒した、だと？」
ようやく驚愕の言葉が出てくる。
肉熊の体は鋼の鎧だ。高密度の筋肉を破壊するには、〈駒鳥〉を何発も撃ち込まなくてはならない。だが、アドルは一撃で首の骨を折り、屠った。人間業ではない。
――本当に、特級の魔術師なのか？
しかし、そんな常識外れの人間が、たかが辺境の村の長をしているなど、あり得るのだろうか。
アドルが振り返り、呆れた表情を浮かべる。金色の目はイズモの後方に向けられていた。視線を追うと、カリムが地面に座り込んでいるのが目に入った。
「おい、大丈夫か？」
逃げようとして、また足を捻ったのだろうか。駆け寄ると、カリムが顔を赤くして俯く。
「申し訳ありません。腰が抜けてしまいました」蚊の鳴くような声。
「本当に似てない双子だな」

イズモは手を差し伸べた。
アドルの指示の下、片付けが始まった。
畑にいた男たちも駆り出され、魔獣を解体するグループと、倉庫を整理するグループに分かれて作業を行う。
イズモも手伝おうとしたが、アドルに「客人の手を煩わせるわけにはいかない。村のことは村の者で処理する」と、断られてしまった。
かといって帰るのも申し訳なく、カリムとともに、男たちが忙しく動き回るのを所在なく眺めていた。
「ひどいな」惨状に思わず顔をしかめる。
倉庫の壁に当たる部分が潰され、荒らされた室内を晒していた。棚や壺が破壊され、収められていた肉や野菜、尖った石や動物の毛皮などが、倉庫の外にまで散乱している。
まるで肉食獣に食い漁られた草食獣の死骸のようだった。
「こういうことは、よくあるのか？」
「いえ、私が知る限り初めてです。倉庫の周りには柵もありますし、今の季節なら食べるものはいくらでもあります」

「オレは餓死しかけたんだが」と言おうとして、自分の無能を晒すだけだと思いとどまった。

解体班の方は、おおよその作業を終えていた。

魔獣も結局は生き物だ。筋肉はタンパク質で構成され、骨はカルシウムとリンを主成分とする。おぞましい見た目でも、毛皮を剥ぎ、切り分けてしまえば、ただの肉だ。好き好んで食べる人間は少ないが、緊急時には大切な食料となる。

肉熊は肉質がかなり固めで臭いも酷いが、以前、魔獣料理の研究家に振る舞われた肉熊の竜田揚げは、なかなかの美味だった。

そこで、重大な事実に思い至る。

「倉庫が襲われたってことは、飯はどうなるんだ？」

「それぞれの家でも備蓄しているので数日は平気です」

当面、飢える心配はないらしい。

イズモが安心していると、倉庫を調べていたひとりが慌てた様子でアドルに走り寄り、耳打ちする。アドルは怪訝な顔をして、肉熊を捌いていた男たちに何かを指示する。

男たちも不思議そうな顔で魔獣の腹を漁り、内臓をひとつ取り出す。どうやら胃のようだ。それを切り開き、中身を地面に広げる。

にわかに男たちがざわつき始める。
「何かあったのか？」
見ると、カリムも険しい顔をしていた。
「倉庫に保管していた魔狼の首がなくなっているそうです」
「肉熊が食べたと思ったってことか。それはないな。普通の魔獣は魔狼の臭いがしただけで飛んで逃げる」
言っていて、違和感に気づく。だとすると、肉熊は魔狼の臭いがする倉庫に自分から来たことになる。
「もうひとつ奇妙なことがあります」男たちの会話を聞いていたカリムが告げる。
「肉熊の胃の中は野菜や果物ばかりでした。しかし、倉庫には肉も魚もほとんど残っていません」
魔狼の首があるはずの倉庫に魔獣が来て、しかも胃には消えた食料がなかった。
ここから導き出されることは――。
「先客がいたってことか」
その何者かは倉庫から肉や魚、魔狼の首を持ち出した。
話し合っていた男たちの目がイズモに向けられる。疑うような目つきだった。
「オレじゃないからな⁉　いくら腹が減ったって勝手に食べるわけがないだろ⁉」

「イズモ様は昨夜から私と一緒でした。そんな時間はありません」
カリムの弁明に男たちが不承不承頷く。若干納得がいかないが、疑いが晴れたのでよしとする。
では何者の仕業なのか。ひとつ言えるのは、魔獣が魔狼の首を持ち出すことはないということだ。魔獣でないなら人間しかいない。それはつまり、イズモ以外の誰かが、この森にいることを意味する。
イズモは心当たりがあることを思い出した。
「もしかしたら、犯人は森の外の人間かもしれない」
「どういうことですか？」
「昨日言っただろ。オレはもともと子連れの魔術師を探しに来たんだよ。そいつもこの森に迷い込んで、食い物に困って倉庫を襲った。人間なら魔狼の首があろうが関係ない」
「食べ物が欲しいなら、そう言えばいいのでは？」
「相手は追われる身だ。顔を覚えられたくなかったんだろうな」
ユピトガはまだ、この森が外部と隔絶していることを知らないに違いにない。通報されたり、証言されたりするのを恐れ、奪う方が安全だと考えたのだろう。相手はビルを爆破するような人間だ。いまさら盗みに抵抗を覚えるとも思えない。

「どうして魔狼の首まで持っていったのでしょう？」
「金策と魔獣避けだろうな。高位の魔獣の牙や骨は術式機構の素材として高値で売れる。逃げ続けるには金がいるから、逃走費用の足しにしようと思ったんだろうな。それに魔獣が寄ってこなければ魔石を節約できる」
カリムの目に悲しみの色が混じる。弔うべき相手が奪われた挙げ句、売られてしまうかもしれない。やりきれないだろう。
「アドルに伝えても構いませんか？」
「もちろんだ。元はと言えばオレの仕事だからな。手伝えることがあれば協力する」
イズモが胸を叩くと、カリムは礼を言い、アドルの方へと走った。
カリムとアドルが険しい顔で話し合うのを、イズモは遠目に眺めていた。
――天はオレを見放したわけじゃなかったらしいな。
彼らには気の毒だが、この森に標的がいることが分かったのは大きな収穫だった。
ユピトガはこの森を出られない上、頼る相手もいない。食料を手に入れても、少しずつ疲弊していくだろう。
こちらは慌てることなく、準備を整えながら追い詰めればいい。
――オレが捕まえるまで、くたばってくれるなよ。
イズモはひとり笑みを浮かべた。

獲物を狙う、狩人の笑みだった。

5

日が暮れようとしていた。
赤々とした太陽が沈み、空が濃紺に染まっていく。森の中はすでに薄暗く、一足先に夜が始まっていた。
深まる闇から逃げるように、ラティフは村へと走っていた。
背負った槍が激しく揺れ、何度も足がもつれそうになる。そのたびに鞄を押さえ、中身の無事を確かめる。
――村はまだか。
慣れた道がやけに遠く感じた。急げば急ぐほど、村が遠のいていく気がする。そんなことはない、と自分に言い聞かせる。帰り道が分からなくなるなんて迷信に決まっている。
ラティフは前を睨み、ひたすらに足を動かした。
日が完全に沈んだころ、ようやく村が見えてきた。家々からは光が漏れ、団らんの声が聞こえてくる。屋根からは煙が昇り、村は夕食の匂いに包まれていた。

見慣れた光景にホッと息をつく。安心すると、急に日常のことが気になった。
――ムグニはもうご飯を食べたかな。
相方の気難しい顔を思い浮かべる。
アドルに同行して魔狼を見に行くと言うので、夕食の用意を引き受けたのだが、ものの見事にすっぽかしてしまった。
献立はちゃんと考えていた。狩りの練習に使う魚を多めに用意して、何匹かを夕食にしようと思っていた。マスはムグニの好物だから、串焼きにしたら喜ぶに違いなかった。
そんな計画も、イズモから魔術の話を聞いた途端、消し飛んだ。頭の中は魔術のことでいっぱいで、夕食のことなど今の今まで忘れていた。
それくらいでムグニは怒ったりしないが、理由は聞かれるのは覚悟しなければならない。
――面倒なことにならなければいいけど。
一抹の不安を覚えつつ、家に向かおうとしたとき、後ろから何かが近づいてくるのを感じた。
槍を構え、振り向く。森の方から大男が猛然と走ってくるのが見えた。魔獣が突進してくるような緊張感に、思わず身をすくめる。

「バーリ、ど――」
「こんな遅くまで、どこに行っていた⁉」
ラティフが何か言う前に、バーリが叫んでいた。ビリビリと空気が震え、声が壁となってぶつかってくる。
「日が落ちる前に帰ってこいと、いつも言っているだろう！」
鼻先が触れそうな距離で、村中に響くような声量で怒鳴る。
バーリの大声はいつものことだが、今日はいつになく語気が荒い。とても冗談でごまかせる雰囲気ではなかった。
「ごめんなさい。ちょっと、探し物をしていて」
「何を探していたんだ」
「魔石。イズモに頼まれたんだ。魔術を使うのに、たくさん必要だって」
「イズモ殿が？」イズモの名前が出た途端、バーリの圧が弱まる。
「あちこち探したんだけど全然見つからなくて、気がついたら日が暮れていたんだ」
ラティフが申し訳なさそうな顔を作ると、バーリは重々しく息を吐いた。
「イズモ殿の力になるのは素晴らしいことだ。だが、当面は控えた方がいい」
「何かあったの？」
「倉庫が襲われて、食料と魔狼の首が盗まれた。何者の仕業なのかは、まだ分かっ

ていない」

全身から血の気が引く。足元が崩れそうになるのを、なんとか踏みとどまる。

「何者かって、魔獣じゃないの？」声が震えるのが自分でも分かった。

「俺から言えることは何もない」

当然の質問にも、バーリは首を横に振るだけだった。口数が少ないのはアドルに口止めされているからだろう。

意味が分からない。魔獣でなければ、誰がそんなことをするのか。

浮かんだのはイズモの顔だった。昨夜の食べっぷりを考えると、可能性は否定できない。しかし、イズモがそんなことをするとは思えなかった。

――まさか、僕のせいで……？

左手でそっと鞄に触れる。覚悟していたつもりでも、実際に何か起こると心がざわついた。

ラティフの表情の意味を勘違いしたのだろう。バーリは笑顔を作る。

「そんな顔をするな」青ざめるラティフを励ますように、バーリが優しく肩を叩いた。「問題が解決するまで、俺たちが交代で見回りをする」

バーリの言う「俺たち」の中に、自分が含まれていないのは言われなくても分かっていた。本当に危険なことは任せてもらえないのだ。

「それに、アドルはカリムに〈風寄せ〉を要請した。近いうちに何か分かるはずだ」
「アドルは祈祷師の力に頼りたくないんじゃ……」
「〈命脈の儀〉が近い。そんなことは言っていられないのだろう」
〈風寄せ〉。供物と引き換えに、〈風〉に過去と未来を尋ねる術。
祈祷師の力の中でもアドルは特に嫌悪していたはずだった。それを要請するということは、状況はラティフが思う以上に切迫しているらしい。手に嫌な汗が滲む。
「そういう訳だ。何か分かるまで、おとなしくしていろ」
「分かった。でも、魔石がないとイズモが困る」
「何も村から出るなと言っているわけじゃない。アドルの許可を取って、日が高いうちに複数人で行動すればいい。最低でも四人だ。何か作業をするときは必ず歩哨を立てろ」
最低四人。そうでなくとも、イズモのそばには常にカリムがいる。イズモとふたりだけで行動するには、何か方法を考えなければならない。
「それと、今話したことはイズモ殿には内密にしてくれ。アドルからの指示だ」
家に戻ろうとしたラティフに、バーリが思い出したように付け足す。
「どうして？」
「ひとつはイズモ殿があくまで客人だということ。俺たちの問題は俺たちで解決す

べきだ」
　何かあったらイズモが助けてくれるに違いない。そう思っていた自分に気づき、ラティフはハッとした。
　実際、川でカリムが足を挫いたとき、真っ先にイズモに頼ってしまった。
「でも、話すのも駄目だなんて。イズモは僕たちの恩人なのに」
「そこでもうひとつの理由だ。残念なことだが、イズモ殿を快く思わない者たちがいる」食い下がるラティフに、バーリが声を潜める。「昨日と今日で、前例のないことが立て続けに起きているからな。突然現れたイズモ殿に理由を求めてしまうのも無理はない」
　イズモのせいで魔狼が現れ、倉庫が襲われたというのだろうか。言いがかりにも程がある。
「そんなの、アドルがくだらないって言えば済むのに」
「黙らせることと納得させることは違う。押さえ込んだ不満はいつか爆発する。今回の判断にはその辺りの調整も含まれている」
　政治だ、とラティフは思った。
　アドルが心配しているのは倉庫を襲った何者かではなく、それによって村が混乱することだ。敵は力で排除できても、人の心は変えられない。〈風寄せ〉に頼るの

も、問題を早く解決して村の分断を防ぐためなのかもしれない。
バーリは屈んで目の高さを合わせると、ラティフの両肩に手を載せた。琥珀色の瞳が真っすぐにラティフを捉える。
「村は今、微妙な状態にある。イズモ殿の力になりたい気持ちは分かるが、くれぐれも迂闊な行動はするな」
バーリの手に力が込められる。その声には、どこか懇願するような響きがあった。
今、すべて告白すれば間に合うかもしれない。怒られ、罰を受けるにしても、事態をこれ以上悪化させずに済むかもしれない。そうすべきだ。
しかし、ラティフは黙ったまま頷いた。
「分かったら家に戻れ。ムグニが心配している」
バーリは大きく節くれだった手でラティフの頭を撫でると、「よっ、と」と声を出して立ち上がった。
——ごめんなさい。
背中に感じる視線に後ろめたさを覚えながら、ラティフは家へと向かった。
「こんな遅くまで、どこ行っていたんだ!?」
戸口をくぐった途端、ムグニが目を三角にして吠えた。

「お前がいない間に、大変なことになっていたんだぞ！」
騒ぐムグニに、ラティフは「ごめんごめん」と謝る。
「さっきバーリから聞いた。倉庫が襲われて、食料と魔狼の首が盗まれたって」
言いながら槍を戸口の近くに立て掛ける。水瓶から水をすくい、浴びるように飲む。火照った体に冷たい水が心地よかった。
「なんだ、知っていたのか」
つまんねえの、とムグニが鼻白んだように顔をしかめた。それに合わせ、顔の傷もくしゃりと歪む。
ムグニはラティフより体格がよく、顔を走る斜め十字の傷のせいで凄味がある。実際、その見た目と荒っぽい言動からムグニを怖がっている者も少なくなかった。
火のそばに座ると、炉に肉の刺さった串と蒸した芋が置いてあった。
「飯、まだなんだろ？　俺の残りだけど食えよ」
「ごめん。僕が作る約束だったのに」
「別に」
ラティフは「いただきます」と言って、串を手に取る。一口かじり、慣れない味がすることに気づく。
「これ、なんの肉？　鹿でも猪でもないよね」

「肉熊。俺たちが帰ってきたら、そいつが倉庫を漁ってたんだ」
ムグニはラティフの近くに座り、事のあらましを話した。どうやら、バーリは説明をかなり省いていたらしい。
「どうやって倒したの？　この臭いと硬さだと雄だと思うんだけど」
「アドルがひとりでやった。一発だった」
こうやって、とムグニは自分の顎を手の付け根で押す仕草をする。
肉熊は戦い慣れた大人たちが、万全の準備をして狩る相手だ。それをひとりで、しかも素手で倒した。やはり、あの双子は人間とは違う何かだ。
「それで、村総出で後片付けをしていたってのに、お前はどこ行っていたんだ？」
ムグニは責めるような目でラティフを見る。あまりのタイミングの悪さに目眩（めまい）がしそうだった。
「……イズモに探しものを頼まれて、ちょっと遠くまで行ってた」
聞いた途端、ムグニは不愉快そうに眉をひそめた。
しかし、珍しいことに、すぐには言い返してこなかった。いつもなら一言あっても不思議ではないのに。
「悪いことは言わない。あいつに関わるな」
しばらくして吐き出された言葉は、とても硬かった。

「どうして？」バーリが言っていたことを思い出し、慎重に尋ねる。
「あいつ、魔術が誰でも使えるって言いふらしてるらしいな」
ムグニは唸るように言う。子どもたちが話しているのを聞いたらしい。
「イズモはそんなこと言っていない。可能性がゼロではないって言ったのを、子どもたちが勘違いしているだけだよ」
「たいして違わないだろ。そんなことを言われたら誰だって期待する。お前もそうじゃないのか？」
ラティフはとっさに言い返せなかった。それが良くなかった。ムグニは確信を得たように、ラティフの目を覗き込む。
「お前、自分にも魔術が使えるって思ってないか？　もう一度、狩りができるって期待してないか？　あいつが困っているってだけで、こんな遅くまで探すか？」
問いかけるような言葉だったが、心を覗き込まれた気がして背筋が凍る。
「僕はイズモに命を助けられたんだ。命の恩人が困っているなら、力になりたいって思うのは当然だよ。ムグニだって、そうでしょ」
「一緒にするな。あいつはよそ者だ。本当のことを言っているかも分からないのに、時間を忘れて探すなんて、お前らしくない。もう一度聞く。お前、自分にも魔術が使えるって思ってないか？」

言葉の辛辣さとは裏腹に、ムグニの声は落ち着いていた。ムグニが真剣に何か伝えようとするときの声だった。

「……思ってる。でも僕だって、あのことがなかったら信じなかったと思う」

「なんだよ、あのことって」

「槍を投げたんだ」声を絞り出す。「イズモが魔狼に追い詰められて、殺されそうになったとき、僕の投げた槍が魔狼の顔に刺さったんだ」

あのときの、心の底から何かが浮かび上がってくる感覚は、今も生々しく残っている。

イズモの話を聞いて、あれが魔術なのだと思った。自分には才能があるのかもしれない。ちゃんと教われば、自由に使えるようになるかもしれない。そうしたら、また狩りができるかもしれない。

ムグニの言ったことは図星だった。自分はもう魔術に囚われている。

「魔狼が怯んでいる隙に、イズモは魔術を使って、魔狼の首を刎ねたんだ。こんな風に」

ラティフは右手で銃の形を作り、ムグニに向ける。

撃つ真似をして、ふと思い出すことがあった。あのとき、イズモは右手を魔狼に向け、左手は右の手首を掴んでいた。

イズモは術式機構と魔石がなければ魔術が使えないと言っていたはずだ。ラティフの見間違いか、カリムが訳し間違えたか。あるいは――。
――イズモは本当のことを言ってない……？
ラティフの意識がムグニから一瞬、逸れる。
「それなら、今ここで見せてくれよ」
ムグニの低い声に、異変を察知。振り向く間もなく衝撃。床に押し倒される。ムグニが飛びかかってきたのだと遅れて理解する。
顎を狙って掌底を放つ。が、手首を掴まれ不発。ムグニはラティフの両手を挙げさせると、左手だけでラティフの両手首を押さえつけた。
それだけで、一切の抵抗を封じられてしまう。
「なんだ、使えないのか？」
「嘘じゃない。あのときは本当に槍を投げられたんだ。イズモが証言してくれる」
「それが本当だったとして、イチかバチかで使える力なんて意味ないんだよ」
手首を掴む手に力が込められ、ラティフは苦鳴を漏らす。
「お前が何をしようが自由だ。けどな、お前が希望をちらつかされて、あいつにいいように使われるのは気に食わないんだよ」
反論しようと開いた口に、ムグニが噛みつくように口を合わせる。ムグニの舌が

滑り込み、ラティフの舌に巻きつく。ムグニが動くたびに、唾液がラティフの中へと落ちてくる。逃げようとして、顎を掴まれる。なすすべもないまま、蹂躙される。
「お前、俺がどれだけ心配しているか分かってないだろ」
しばらくして、ムグニが言う。
「労力を差し出すだけで済むなら、まだマシだ。おだてられて、突っ走って、危険なことにまで手を出さないか、それが心配なんだ」
息がかかる距離にムグニの顔がある。顔つきはここ数年で様変わりしたが、目だけは昔から変わらない。ラティフが無茶をしないかと心を砕く目だった。
「ムグニが心配するのはもっともだし、魔術が使えるかもしれないって思ったのは確かだ。だけど」
ムグニの目を見つめ、慎重に言葉を選ぶ。
「僕は本当に、イズモに恩を返したいだけなんだ。イズモには言葉が通じないから、感謝を伝えるには態度で示すしかない。今日は遅くなってしまったけど、明日からは気をつける。ムグニが心配するようなことは何もない」
ムグニは黙って聞いていた。琥珀色の瞳は、その間、ずっとラティフに注がれていた。
「それならいい」

ムグニはそれだけ言うと、ラティフの首元に鼻先を押し当てた。臭いを確かめるように、ゆっくりと息を吸う。続いて首筋から鎖骨、腋下へと、鼻先で毛をかき分けるようにラティフの体をなぞっていく。

「ちょっと恥ずかしいんだけど」

「取っ組み合いで勝った方は相手を好きにしていい、だろ？」

ラティフが抵抗をやめると、ムグニは手首を離した。両腕で抱きしめるようにして、貪るように体臭を嗅ぐ。胸骨から鳩尾、腹直筋から臍、さらに下へと。

鼻先が下腹部の柔らかな茂みに達したとき、ムグニが意地悪そうな目を向けてきた。ラティフの腰布には明らかな膨らみができていた。

「これはそういうこと、でいいよな？」

ラティフは顔を赤くして目を逸らす。

ムグニはそれを合意と受け取り、ラティフの腰布を剥ぎ取った。少年の体にしては大振りな、高々と反り返った男の象徴が露わとなる。

体臭を嗅がれて興奮したという事実に、余計に恥ずかしくなる。

しかし、ムグニはそれに触れようとはせず、ラティフの足を持ち上げる。ラティフの引き締まった尻が天を向き、ムグニは迷うことなくその谷間へと顔を埋めた。

尻の、毛に覆われていない部分に温かく濡れた感触があり、ラティフは思わず声

を漏らした。くすぐったさとともに、腹の底から鈍い興奮が湧いてくる。
ムグニはわざと音を立てるように、ラティフの肉の蕾を舌で襞を伸ばすように舐める。しばらくそうやっていると、蕾が花弁を開くように緩んだ。
ムグニは待ちきれないかのように自身の腰布を外す。猛々しい肉欲が、劣情をぶつける先を求め、涙を流していた。
肉の雄しべが開きかけた蕾へとあてがわれ、力がかかる。
ラティフが軽く息を吐くと、ムグニは少しの抵抗とともにラティフの内側に入り込んできた。肉の壁をかき分けるように、ゆっくりと進んでいく。
最奥に届く前に、ムグニは腰を引く。張り出した先端に肉が絡まり、引きずり出されるような感覚を覚える。抜ける手前で、また押し入れる。
ムグニは呼吸を荒げ、それでもゆっくりと腰を動かす。息を吸うたびに胸が盛り上がり、腰を突き出すたびに腹筋が浮き出る。
出し入れを繰り返すごとに動きは早くなっていく。
最初の数往復こそ、気遣うような動きだったが、それから先は遠慮のかけらもなかった。両手でラティフの腰を掴み、飢えた獣が獲物を貪るように、肉の洞窟を食い荒らしていく。
腰が打ちつけられるたびに全身が揺れる。頭がグラグラと揺れ、思考も蕩けてい

く。感覚だけは鋭いままで、ムグニの肉棺が体の中をかき回すたびに、全身に甘い痺れが走り、ため息のような熱い息がこぼれる。
「なあ、出していいか？」
ムグニが耳元で囁く。
ラティフが頷くと、ムグニは腰を動かしながら、右手でラティフ自身を掴み、扱く。体を内側から責められるのとは違う、直接的な刺激に全身が強張る。ラティフの中で、ムグニが膨れ上がる。
体内で熱が弾けるのを感じ、ラティフの理性も限界を迎えた。
いきり立った先端から白い液体が勢いよく吹き出す。青臭いそれは水しぶきのように宙を舞い、ラティフの胸元どころか顔にまで飛沫を飛ばした。一滴残らず吐き出そうとするように睾丸は収縮を繰り返し、快楽の残滓を押し出していく。
波が終わり、体を起こそうとしたとき、ムグニが覆いかぶさってきた。毛に精液が染み込んでいくのも構わず、しがみつくように抱きしめてくる。激しい鼓動が、体温とともに伝わってくる。
ラティフもそっとムグニの背中に手を回す。子どもをあやすように、肩甲骨から尻尾の付け根へと毛並みを解きほぐすように撫でる。
「生きているだけじゃ駄目なのか」

ムグニが消え入りそうな声で呟く。
ラティフは黙ったまま、撫で続けた。

——ラティフ。
誰かに呼ばれた気がして、ラティフは薄っすらと目を開けた。
目の前にムグニの寝顔があった。いつもの険のある表情は影を潜め、年相応の幼さが表れていた。
よく見ると、口元が少し動いている。耳を近づけると、「ラティフ、ごめん」と泣きそうな声が聞こえた。
——謝ることなんてないのに。
ラティフは家の隅にある棚を見やった。中段のよく見える場所に、大猪口の大きな牙が置かれていた。ラティフには特に思い入れのない品だったのに、ムグニは捨てることを決して許さなかった。
いたたまれなくなり、そっとベッドを抜け出す。
水を飲もうとして、戸口の脇に立て掛けた槍が目に入る。しばらく見つめた後、手に取る。柄のざらついた感触。手にかかる重み。実戦で使うことはないと諦めていたのに、まったく予期しない形でその機会が訪れた。

魔狼に狙いを定め、柄を握りしめ、全身の筋肉を使い、投げる。
あの瞬間、押し込めていたものが吹き出した。
――僕は戦いたい。
過去の自分とともに葬ったはずの願望。仲間とともに森を駆け、獲物と対峙したいという思い。狩りに向かう年下の少年たちを見送るときの、言いようのない感情。消し去ることができないまま膨れ上がったそれは、仄めかされた可能性にすべてを賭けた。
――ムグニ、ごめん。君が望む人間にはなれそうもない。
槍を戻し、水を飲む。
ベッドに戻ろうとしたとき、床に置かれた物入れに気づいた。わずかな明かりを頼りに中を探る。それを掴み、音を立てないよう、そっと取り出す。
出てきたのは手のひらに乗るほどの石だった。透明感のある黒い石で、よく見ると石の奥に何かが揺らめいている。
触れた瞬間、心に直接語りかけてくるような、心が何かに繋がったような、経験したことのない感覚があった。
イズモに渡された魔石と同じか、それ以上の強さの。
――僕はイズモを信じたい。

ムグニの懸念は分かる。それでも、イズモは命の恩人であり、新たな道を示してくれた英雄だった。
――僕は戦いたい。もう一度だけでいいから。
我知らず、手に力がこもる。
――僕が持っているものなら何を差し出してもいい。だから、どうか。
嘘かもしれない。無理かもしれない。それでも、祈らずにはいられなかった。
石を戻し、寝床に入る。すぐに眠気が訪れ、ラティフの意識は夢の中に溶けていった。
夢の中で、ラティフはイズモとともに魔獣を追いかけていた。

三章　魔石の鉱脈

「兄弟は父親に教えられた森にたどり着いた」
「怖い、と弟は言った。誰かに見られている気がする、と」
「兄は弟に微笑み、励ました。どこか落ち着ける場所を探そう。父さんは必ず迎えに来るから、それまで、ふたりで頑張ろう、と」
「兄弟は森の奥へと入っていった」

1

金色の稲穂が揺れる。
秋の乾いた風に吹かれて、たわわに実った頭を重そうに揺らしている。澄み渡る空はどこまでも高く、刷毛で描いたような雲がのんびりと流れる。日差しだけは夏の面影を残し、終わりゆく季節を名残惜しんでいるようだった。
また、この夢か。
穂波のさざめきを耳に響かせながら、イズモは思った。
すべては終わってしまった。取り戻すことは決してない。なのに、今でも夢に見る。自分にできることなど何もなかったのに、心のどこかで諦めきれずにいる。
『イズモ。遊んでないで、こっちを手伝ってちょうだい』
懐かしい声に振り向く。
黄金色の海原には、たくさんの人影があった。皆、頭に手ぬぐいをかぶり、稲を収穫している。

その中のひとりが、イズモに手を振っていた。
鼠人の女性。農家の娘としては少し頼りない、ほっそりとした体つき。イズモと同じ緑色の瞳が、優しげな顔の中で生き生きと輝いていた。
母さん……。
母親は腰に手を当て、背中を伸ばすように空を見上げる。
『早く終わらせないと、夜になっちゃうわよ』
駄目だ。すぐに逃げるんだ。
叫びは、稲穂のざわめきに掻き消された。母親は微笑んだまま、手招きしている。
イズモは堪らず走り出した。さざめく稲をかき分け、母親の元へと向かう。
『今日はイズモの誕生日でしょう。帰ったら、ごちそうを作ってあげるからね』
母親はいつもの笑みを浮かべる。
あのとき、自分はなんて答えただろうか。覚えていないのだから、きっとつまらないことだ。もっと喜ばせることを言えば良かった。もっと大切にすれば良かった。いつまでも後悔すると知っていたら。
母さん、ごめん。
イズモが手を伸ばしたとき、にわかに空が曇り始めた。鉛のような雲が押し寄せ、見る間に空を覆っていく。平穏な風景が闇に包まれていく。金色に輝いていた稲が

腐るように灰色に染まっていく。
悲鳴。
振り向くと、あちこちで火の手が上がっていた。稲の穂が爆ぜるように火を吹き、音を立てて燃えていく。飛び散った火の粉が周囲の稲を燃え上がらせ、それがまた他の稲を焼く。火は嵐の海原さながらに、逃げ惑う人々を飲み込んでいく。
火が服や毛に燃え移り、瞬く間に全身を包む。炎に覆われた影が、断末魔の叫びを上げながら狂ったように踊る。
熱風が吹き寄せ、肉の焼ける臭いが鼻を突く。やがて声が途絶え、糸が切れたように倒れる。ひとり、またひとりと静かになっていく。
イズモは母親の手を掴むと、走り出した。大切に育てた稲をなぎ倒し、蹴散らしながら走る。戸惑う母親を急き立て、前に進む。
『私のことはいいから、あなただけでも逃げなさい！』
母親の声を無視する。振りほどこうとする手をしっかりと握る。
イズモは母親の手が好きだった。夏の水田に生えた雑草を抜き、冬の凍てつく水で米を研ぐ手が。温かなスープの入った器を差し出し、イズモの頭を優しく撫でるその手が。
畦道に出て、火の気の少ない方へと向かう。

イズモは知っている。この夢の終わりを。何をしようと、結末は変わらないことを。それでも足を止めなかった。止められなかった。運命に抗うために、自分は魔術師になったのだから。

イズモを嘲笑うように、目の前に炎の壁が立ちはだかる。熱が顔を焼き、ひげの先が焦げる。飛び散る火の粉を振り払い、残された道を探す。

次々と炎が立ち塞がり、そのたびに別の道へ走る。だんだんと冷たい闇へと追い立てられる。

気づくと、辺りは静寂に包まれていた。

村に流れる川の、土手沿いの道だった。等間隔に植えられた桜の木が、どこまでも続いている。葉は赤く、樹皮は黒々としていた。それが火と焼けただれた肌に見え、イズモは目を逸らすように、振り返る。

母さん、大丈夫？

母親の疲れた顔の後ろ、闇の中に何かが蠢いているのが見えた。

とっさに母親を抱きしめ、地面に転がる。何かが背後を走り抜け、服と背中を裂かれる。痛みを無視して跳ね起き、母親を抱え起こす。

母親の顔が凍りつく。

『イズモ！』

突き飛ばされ、倒れる。地面にぶつかった右肩が痛み、手のひらに砂利が食い込む。急いで体を起こすと、目の前に何か赤いものが落ちていた。

母親の手だった。

ほっそりとした手首の断面から白い骨が飛び出していた。あふれた血が地面に広がっていく。

また失敗した。

おぼつかない足取りで母親の手へと向かう。拾おうと触れた瞬間、手が燃え上がり、一瞬で灰となる。炎はイズモの手と顔を焼いたが、イズモは痛みを感じることすら忘れていた。

どこからか、クスクスと笑う声がする。

道の先に赤い双眸が浮かんでいた。

胸に衝撃。体の中で何かが砕ける感覚。

見下ろすと、左肩から右脇腹に向かって、三本の大きな赤い線が走っていた。直後、傷口から鮮血と内臓が滝のように流れ出した。

体が後ろに傾き、倒れる。

口の中に生温かい金属の味が溜まっていき、口の端からあふれた。咳き込むが、空気の代わりにゴポゴポとあぶくのような音が出るだけだった。

朦朧としていく意識の中、視界の端から何かが現れる。
巨大な狐。
顔は化粧をしたように青白く、裂けた口と大きすぎる赤い目が鎮座する。体は金色の毛で覆われ、揺れる九本の尻尾は優雅な扇を思わせた。
〈火葬屋ダルキニ〉。
イズモの故郷を奪った魔獣。終わりなき悪夢の始まり。
白面の狐はイズモの死を面白がるように、口の端を吊り上げる。
視界が暗さを増し、やがて闇に閉ざされる。
意識が薄れかけたとき、世界が揺れるような銃声。
耳障りな笑い声。
近づいてくる足音。
『すまない。ワシのせいだ』
誰かの声。
胸に熱が発生。全身へと広がっていく。
『ワシが愚かだった。あれはあまりに邪悪だ』
『自己満足なのは分かっている。君に業を背負わせるのも分かっている。それでも、君を助けたい。たとえ君に恨まれるとしても。魂を喰われることになったとしても』

誰かの祈り。
『だから、生きてくれ』
世界に光が満ちる。

2

イズモが目を覚ますと、目の前に真っ白な顔があった。
「うわあああぁぁぁ!?」
反射的に飛び起き、ゴツッ、と鈍い音が響く。
視界が白く染まり、ベッドに逆戻りする。一拍遅れて、頭が物理的に痛み始める。
横を見ると、うずくまる白虎の青年の姿があった。
「大丈夫か？」
「はい、なんとか……」
カリムが顔を上げる。いつものように微笑んでいるが、よほど痛かったのか目に涙が滲んでいた。
「お見苦しいところをお見せしました。イズモ様は大丈夫ですか？」
「これくらいどうってことない。蹴られるのも殴られるのも日常茶飯事だからな」

額を撫でつつ笑ってみせる。
「ただ、顔を覗き込むのは遠慮してくれ。さすがに驚く」
「申し訳ありません」カリムがしょげたように顔を伏せる。「ひどくうなされていらっしゃったので、つい」
一瞬、返事に詰まるが、すぐに笑顔を作る。
「ちょっと嫌な夢を見ただけだ。それはそうと、なんでお前がここにいるんだ？　お前の家じゃない、よな？」
言いながら、辺りを見回す。奥行きのないこぢんまりとした空間は、ここがバーリから提供された家であることを示していた。
カリムの家に比べれば小さいが、ひとりで寝泊まりするには十分な広さがあった。ベッドや水瓶など生活に必要なものはすべて新調され、炉やかまどに使い込まれた形跡がなければ、建て直したのかと見紛うほどだ。
「ご朝食を用意しようと思いまして、勝手にお邪魔しました」
カリムはいたずらがバレた子どものように舌を出す。
かまどには鍋が火にかかっており、くつくつと何かが煮える音を立てていた。鼻先を美味そうな匂いが掠める。
「お前は通い妻か」

思わず出た言葉に、カリムが微笑む。
「イズモ様は私のことを、そう思ってくださるのですね」
「えっ」遅れて失言に気づく。「そ、そういうつもりじゃ」
「何はともあれ、ご飯にしましょう」
慌てるイズモを尻目に、カリムは嬉しそうに鍋に向かった。
煮ていたものを器によそい、差し出す。器はカリムの家にあったものより、ふた回りほど大きくなっていた。
中身は昨日と同じスープのようだったが、香草が強く香った。ごろごろと入っている肉の塊は昨日の肉態だろう。
「意外と食えるな」
肉質は固く、臭みも強いが、食べ物の味がした。
夢中で食べていると、カリムがこちらを見ていることに気づいた。何が楽しいのか、ニコニコと相好を崩している。優しい顔に、今朝の夢が重なる。
「それはそうと、お前はこんなことをしていていいのか？」想像を打ち消すように、疑問を投げる。「祈祷師っていうからには、いろいろ仕事がありそうなもんだが」
具体的なことは想像もつかないが、少なくともよそ者の朝食を作る以外にもすることはあるはずだ。しかし、カリムは頭を振る。

「それが特にないのです。祈祷師の主な仕事は治療と占いですが、この村の者たちはめったにけがや病気をしませんし、占いも長に頼まれたときだけです」
「なら、普段は何をしているんだ？」
「特に何も」カリムの表情が陰る。「私は特段の理由がない限り、外に出てはならないとされています。家を空けるときは事前に長の許可が必要で、村を離れるなら護衛をつけることになっています」
「軟禁かよ。そんなこと誰が決めたんだ？」
「ラシド様です。私は神の使いだから、過剰なくらいでいい、と」
「神の使い？」聞き慣れない言葉に首を傾げる。
「私のような、白い毛を持つ者のことです。神の使いは十八になると、〈命脈の儀〉の夜、神と子をなすという使命を帯びています」
「それって子作りだろ。そのためだけに、そこまでやるのか」
「村の存亡がかかっていますから」
　カリムの声は淡々としている。不条理を、そういうものだと諦めている声だった。憤りを覚えるが、イズモが口を出せることでもなかった。
「でもまあ、逆に言えば許可があればいいんだよな？　野菜の収穫とか食器を作るとかなら、させてもらえるはずだ」

「私がやると、野菜を潰してしまったり、器の形にならなかったりでして……」
どうやら、カリムはイズモが思う以上に不器用らしい。
「それなら、草むしりとか下準備とか――」
「年長の者たちから、『神の使いに雑用など恐れ多い』と断られてしまいました」
カリムは悲しそうに自身の手を見つめる。手を覆う毛は一点の汚れもない白で、指の腹や手のひらは薄い桃色をしていた。
力強さと繊細さが共存する芸術品のような手だ。泥臭い仕事をさせたくない気持ちが分からないでもなかった。
「護衛をつけて、散歩なり泳ぐなりも駄目か？」
「私の護衛をすると、本来すべき仕事ができなくなります。それに、私にもしものことがあれば、護衛の責任となるので、申し訳なくて」
昨日、カリムが河原で見せた、苦渋の表情の意味が分かった。自分が出歩いたことで迷惑をかけてしまったことへの自責の念だ。
「オレの相手をすることが、オレにとってもお前にとっても都合がいいってことか」
「いわゆる『ウィンウィンの関係』ですね」
また妙な言葉を、と思ったが、カリムの嬉しそうな顔を見ていると、どうでも良くなった。アドルもカリムの苦悩を理解していて、好きにさせているのだろう。

「それで、今日はどうなされますか」
「魔石を探そうと思っている。敵が森に潜んでいると分かった以上、備えが必要だ」
森からの脱出は再び延期にした。森を歩き回っている間に、ユピトガや魔獣と戦闘にならないとも限らない。予備の魔石があるにしても、少しでも補充しておきたかった。
子どもたちは当てできない。となると、自分で探す他なかった。
「私にも手伝わせてください。アドルに頼めば、人手を借りられるかもしれません」
「いや、オレひとりで行く。お前は村に残ってくれ」
言った途端、カリムが露骨に残念そうな顔をする。機嫌よく振られていた尻尾が地面に垂れ、心なしか家の中が暗くなったように感じた。
「そんな顔するなって。魔石探しなんて、延々と石を調べるだけだぞ。つまらないどころの話じゃない」
「それでも、家で日が暮れるのを待つよりはいいのです。私は邪魔ですか？　私ではお力になれませんか？」
カリムはうなだれたまま、指先で地面にぐるぐると円を描いている。すねた子どものような態度に、イズモは途方に暮れる。
万が一のことを考えると、単独行動が最善だった。この森には逃亡中の魔術師だ

けでなく、凶暴な魔獣が多数生息している。いつ襲われるともしれず、逃げるにしろ戦うにしろ、戦闘能力のないカリムは足手まといにしかならない。
イズモは村の人間ではないが、カリムに何かあれば責められるに決まっている。ただでさえ肩身が狭いのに、村中から恨まれるのは避けたかった。
なだめすかし、とっととひとりで出かける。それが正しい態度だ。しかし、イズモにはその決断ができなかった。
——何もさせてもらえないのは、辛いよな。
大切であるがゆえに自由を奪われ、無為な日々を過ごす不毛さはイズモも知っていた。根が粗暴なイズモは師匠の心をへし折ることに躊躇いはなかったが、品行方正なカリムは黙って従うだけだろう。
イズモは深々とため息を吐いた。
「よく考えたら、オレはこの森に来たばっかりで不慣れなんだよな。案内してくれるやつがいると助かるんだがな」
カリムの耳がピクリと動く。
「この森に土地勘があって、言葉が通じて、一日中、手が空いているようなやつがいたらいいんだけどな。いるわけないよな」
「イズモ様！　適任がいます！　私です！」

「それはいいことを聞いた。魔石探しは地味で大変な作業だが、手伝ってもらえないか？」
「はい!!　喜んで!!」
カリムが過剰な意気込みで答える。子どものように目を輝かせ、無邪気な笑みを浮かべている。犬のように振られる尻尾で、風が巻き起こっていた。家の中も明るくなったようだ。
「お前、本当に分かりやすいな」ころころと変わる表情に、イズモの口元が緩む。
普段の落ち着いた言動は、祈祷師や神の使いといった立場がそうさせているだけで、本来の性格は明るく朗らかなものらしい。
——それだけ抑圧されているってことだよな。
ただでさえ寿命が短いのに、毛が白いというだけで行動が制限され、使命を課される。カリムが抱える不満は想像に余りある。少しでも気分転換になるなら悪い気はしなかった。
あとはアドルの許可が下りるかだったが、それはイズモの力の及ぶところではない。普通に考えれば許可するはずがなく、長の決定ならカリムも納得するだろう。
「そうと決まれば、いっぱい食っとかないとな」空になった器を差し出す。
「石を探すのであれば河原ですか？」おかわりを注ぎながらカリムが尋ねる。

「いや、山がいいな。特に地層が見えている場所が狙い目だ。通常、魔石は地中深くに埋まっているんだが、そういうところは例外的に露出している場合がある」
魔石も鉱物の一種であり、石炭や金属、宝石のように鉱脈が存在する。『魔石の鉱脈が自分の家の庭で見つかればいいのに』とは、酒場で聞く夢物語の定番だ。
もちろん、魔石の鉱脈を見つけるのは並大抵のことではない。
大規模な地質調査を必要とし、見つかったとしても、採掘には専用の機械と人手がいる。それができない以上、簡単な方法で探すしかなかった。
「それなら、ちょうどいい場所を知っています。いわゆる『採石場』ですね。少し歩かなければならないので、先に許可をもらってきます」
言うやいなや、カリムは家を飛び出していった。まるで時間と体力を持て余した子どもが、親に遊びに出かける許しを求めに行くようだった。
「オレも一生遊んで暮らせたらな」
イズモはひとりごちた。
意外なことに、アドルはすんなりと許可を出した。
それどころか、確認に来たイズモに「祈祷師の願いを聞いてくれて感謝する。安全は我々が確保するので安心してほしい」とまで言った。イズモはカリムの誤訳を

疑ったが、アドルが護衛を連れてきたことで、信じるしかなくなった。
　護衛はラティフとガビト、そしてラティフの相方であるムグニという少年だった。
　ムグニは昨日、隊列の先頭にいた子だ。顔には眉間を中心とした大きな斜め十字の傷があり、険のある表情や睨みつけるような目つきと相まって、年齢に不釣り合いな厳つい印象を受けた。おまけに不満そうな態度を隠そうともせず、ひどく気まずい。
　ガビトもムグニに苦手意識があるのか、少し距離を空け、ちらちらとムグニを見ては、睨まれて目を逸らすのを繰り返している。
　ラティフとムグニは腰に小さな鞄と手に石槍を持っているだけだったが、ガビトはそれに加え、大きな鞄を背負っていた。中身を尋ねると、昼食用のパンが入っているとのことだった。
「人選にどうこう言うつもりはないが、もっと年上のやつが付き添わなくて平気なのか？　バーリはもう手が空いているはずだよな？」
　遠回しに人を変えてくれと頼むが、カリムは「ご心配なく」と微笑む。
「ムグニは村で五指に入る槍の使い手ですし、ラティフはムグニを御せる唯一の存在です。ガビトも体力では誰にも負けません」
　そういう問題だろうか。不安は拭えなかったが、アドルが決めたことであり、カ

リムがそう言うなら信じるしかなかった。
「今日はよろしく頼む」
できるだけ親しげな顔を作り、手を差し出す。しかし、ムグニは不愉快そうに眉をひそめると、さっさと山の方へと歩きだした。ラティフの怒ったような声にも、振り返りもしない。ラティフは申し訳なさそうに頭を下げ、ムグニの後を追った。
後には、手を差し出したままのイズモが取り残された。
ガビトがムグニとイズモを交互に見た後、おずおずと手を握ってくれる。ガビトと握手をしながら、カリムを見る。
「オレは何か、気に障ることしたか？」
「気にしないでください。とても優しい子なのですが、少し気難しいところがあるもので」
優しい子は実質初対面の相手を、ゴミを見るような目で見たり、聞こえよがしに舌打ちしたりするだろうか。言葉を交わしたこともない相手にここまで嫌われるのは、イズモの経験でもなかなかない。
「何もかも投げ出して引きこもりたい気分になってきたな」
「そうおっしゃらずに。元気を出していきましょう」
カリムに励まされ、仕方なく歩き始める。カリムが出歩く口実にされているだけ

ではないか。そんな気もしたが、いまさら指摘しても遅かった。
　気を取り直し、ラティフたちが向かった方へ目を向ける。木々の樹冠の隙間から、大きな山の姿が覗いていた。
　その山は村の北側にそびえていた。
灰白色の岩を積み上げたような峻厳（しゅんげん）な山容。燦々と降り注ぐ日を反射し、澄み切った青空を切り裂くような鋭さを見せている。山里で生まれ育ったイズモにも、自然と畏怖の念を抱かせる厳粛さがあった。
　虎人たちはこの山を、敬意を込めて御山と呼んでいるらしい。
「まさか、頂上まで登るんじゃないだろうな」
「ご心配には及びません。山の中腹に、武器や道具を作るのに使う石を採る場所があります。そこで魔石に似た石を見た覚えがあるのです。そう遠くもないので、彼らに任せていれば、すぐに着くでしょう」
　カリムは前のふたりを見やる。
　ラティフとムグニは何か言い合いながら歩いていた。足取りは何気ないが、イズモとカリムが遅れることも追いつくこともない適度な速さを保っている。さらに死角ができないよう、ふたりで見張る方向を分担しており、隙がない。
　態度に難はあるものの、護衛としての責任と練度の高さ、ふたりが良き相棒であ

ることが、立ち振舞から伝わってきた。
——見た目と年齢で判断するなってことか。
ガビトもそうなのだろうか。イズモはそっと背後に目を向ける。
イズモとカリムの後方、少し離れたところを、やや丸みを帯びた体の青年が歩いていた。右手に槍を持ち、真剣な表情で辺りを見回している。
真面目にやっていると思いきや、よくよく見ると、左手にパンを隠し持っており、ときどき口に運んでいた。痩せないのも納得だ。
——あいつは見た目まんまだな……。
五人分の食料をひとりで背負っているのだから、力があるのは確かだろう。しかし、頼りにしていいのかは疑問が残った。
山に近づくにつれ、道の傾斜がきつくなってくる。それに伴って緑が減り、岩の灰色が目立つようになる。
緑の天蓋がまばらになると、日差しが強くなったように感じた。
夏本番にはまだ早いが、雲ひとつない空には太陽が眩いばかりに輝いている。この分では、昼頃にはかなり暑くなりそうだった。
「今日は絶好の登山日和ですね」
カリムが両腕を上げ、大きく伸びをする。光を受けた純白の毛がきらきらと輝く。

服装と毛色の関係で、ほとんど暑さを感じていないらしい。おまけに歩幅が大きいため、のんびり歩いているように見えた。
すでにシャツに汗を滲ませ、せわしなく足を動かすイズモとは大違いだ。
――こいつらのすぐそこが全然すぐそこじゃないのを忘れていたな。
帽子を目深にかぶり直し、水筒から一口飲む。予定通り着いたとして、魔石を探す力が残っているか不安になってきた。
沢にかけられた橋を渡ったところで、風景が一変した。
地面は土から白っぽい砂利に変わり、道の右側は荒々しい岩肌の壁、左側は切り立った崖となる。道幅も広くなり、人がふたり並んで歩いても十分な余裕があった。
路面は平らにならされ、歩くのに邪魔な石は端に寄せられていた。
明らかに人の手が入った道だった。手つかずの森とのギャップに違和感を禁じえない。
「不思議な感じがする場所だな」
「この山には神が住まうとされています。イズモ様がそう感じるということは、言い伝えは本当なのかも知れませんね」
「部外者であるオレが入って、神は怒らないのか？」
「イズモ様は村の英雄ですので大丈夫でしょう。もし駄目なら、〈風〉たちが騒い

でいるはずです」
カリムが空を仰ぎ見る。穏やかな風がカリムを撫で、毛を揺らしている。
「風？」イズモは疑問の目を向ける。
「〈風読み〉と呼ばれる力を持つ者だけに姿が見え、声が聞こえる存在です。彼らと話せることが、祈祷師の条件とされています」
カリムはときどき、何もない空間を目で追ったり、なんの音もしないのに耳を動かしたりする。村の男たちは決まってカリムから目を逸らしたり、動きがぎこちなくなったりしていたが、そういう事情があったらしい。
「〈風〉たちは私に世界中で見聞きしたことを話してくれます。私は彼らの言葉を覚え、外の世界のことを学びました。イズモ様とこうしてお話できるのも、その成果です」
カリムは屈託のない笑みを浮かべる。
カリムの流暢さは母語話者と区別がつかないレベルだ。笑顔の裏にどれほどの努力があったのか、イズモには想像もできなかった。
「疑うわけじゃないが、オレにも認識できない存在なんて信じがたいな。魔術師の中には動物の言葉が分かるやつもいるらしい。お前が聞いているのも、鳥の言葉だったりはしないか？」

「違うと思います。私には彼らの姿も見えていますし」
「もしかして、今も見えているとか？」
冗談半分で言うと、カリムが大真面目に頷く。
「はい。イズモ様の後ろに」
反射的に銃を構え、振り返る。
何もいない。灰色の道の後ろの方をガビトが歩いているだけだ。
いきなり銃口を向けられたガビトが驚き、隠し持っていたパンを取り落とす。慌てて拾うが、たまたま背後に目を向けたムグニがそれに気づく。
ムグニは低く唸ると、顔面蒼白になったガビトに詰め寄った。ラティフが慌てて仲裁する。
「ガビトに悪いことをしてしまいました」
「わざとじゃないだろうな」
「そんなことありません！　本当にそこにいるのです！」
イズモの胡散臭そうな視線に気づき、カリムが何もない空間を指差す。
「そいつはどんな見た目なんだ？」
一応、尋ねてみると、カリムは「そうですね」と腕を組み、難しい顔をする。
「何に似ているとも言い難いのですが、全体としては蛇のように細長く、口は猪の

ように大きくて、目がたくさんあり、表面は緑と赤の鱗に覆われています」

「おいおい、〈風〉って化け物なのか……？」

「円を描くように飛んでいて、今、イズモ様を見――」

突然、風が強く吹いた。

砂埃が舞い、イズモは腕で顔を庇う。騒いでいた三人も言い合いをやめ、身を寄せ合うようにして耐える。

しばらくして、風は収まった。突風だったのだろうか。カリムを見ると、空の一点を見つめたまま立ち尽くしていた。

「おい、どうした。何かあったのか」

「〈風〉が……」カリムが困ったようにイズモを見る。「〈風〉が突然、大声で叫んだのです。それも、ひどく取り乱した様子で」

「なんて言ったんだ？」

「死体が動いている、と」

「なっ」心臓が跳ねる。

あり得ない。カリムがそれを知っているはずがない。

「……どういう意味だ？」こみ上げる吐き気を堪え、尋ねる。

「分かりません。尋ねる前に行ってしまいました」

カリムが申し訳なさそうに視線を落とす。嘘をついているようには見えない。カリムには本当に何かが見え、聞こえているらしかった。

ならば、その存在はなぜ、それを知っていたのか。他にも何か知っているのか。

「さっきの〈風〉を呼び戻すことはできないのか？」

「できなくはないのですが」カリムが言いよどむ。「準備とアドルの許可が必要です。今すぐというわけには」

いつならできる。イズモが食い下がろうとしたとき、前方で声がした。

見ると、道の先でラティフが手を振っていた。

いつの間にか騒ぎは解決していたらしい。ラティフの隣には、ムグニが背嚢を背負って立っていた。ガビトには任せられないと判断したようだ。

「〈風〉は気まぐれです。きっとまた来ます。そのときに尋ねてみましょう」

カリムはイズモの手を取ると、有無を言わさず歩きだした。

しょんぼりとうなだれたガビトが、ふたりに続いた。

3

しばらく道なりに歩いていると、開けた場所に出た。

村の家十個分ほどの、広場と呼べるほどの広さがあった。垂直にそびえる崖面には濃淡の異なる地層の縞模様が現れ、路面には大小様々な石が山を作っている。崖を削った形跡がないところを見ると、自然に崩れた石を採るだけのようだ。
——道具がないんじゃ、掘ることもできないしな。
崖を見上げながら、イズモは腕を組む。
いくら条件が良くとも、落ちているものを拾うだけでは限度がある。しかし、タガネやツルハシもなしに岩を削れるわけがない。銃弾を叩き込むことも考えたが、大規模な落石が発生しかねず、魔石を取るのに魔石を使っては本末転倒だ。となると、地道に探す他ないだろう。
四人を集め、あらためて魔石の見分け方を説明する。
ムグニは興味ないだろう、と思っていたが、意外にもイズモの説明にじっと耳を傾けていた。根は真面目なのかもしれない。
「判断に迷うようなものがあったら教えてくれ」
説明を終えると、それぞれ持ち場を見つけて作業を始めた。イズモも目についたところにしゃがみ、積み重なった石に手を伸ばす。
「駄目、駄目、これも駄目、これも、これも」
ぶつぶつと呟きながら、石を選り分けていく。

多くの石は見た目からして違い、たとえそれっぽく見えても、触れると同時に駄目だと分かるものばかりだった。次々と手に取っては背後へ放り投げていく。

――こうしていると、修行時代を思い出すな……。

無心に手を動かしていると、ふと昔のことが頭に浮かんだ。

魔術師を志したイズモが、師匠から最初に教わったのが魔石探しだった。

『魔力は世界の意志であり、魔術とは世界との対話だ。魔術師になりたいなら、世界がどうあろうとしているのか感じられるようになれ』

魔石は店で買えるのになぜ自分で探すのかと訝しむイズモに、師匠はそう諭した。

三つ連続で及第点の魔石を持ってきたら合格。その言葉を信じ、イズモは魔石を探した。初日で見つけて驚かせてやろうと思っていた。

結局、合格できたのは三ヶ月後だった。自分には才能はないと思い知らされた。

「おっ」

掴んだ石に違和感を覚え、現実に引き戻される。見ると、黒っぽく透明感のある石。しばらく悩む。

「……駄目だな」

ため息とともに投げ捨てる。魔石の質は魔術の質に直結し、魔術の質は生存率に直結する。使えるかどうか一瞬でも悩むような石に、命を託すことはできない。

店で魔石を買うときも原則は同じだ。魔石加工大手の正規品を信頼できる筋から買う。高いからといって、安物や見知らぬ業者に手を出すと痛い目を見る。

威力や精度のばらつきならまだしも、暴発や不発は命に関わる。くだらない理由で無意味に散っていく同業者を、イズモは嫌というほど見てきた。

——とはいえ、本当に見つからないな。

目につく範囲から石がなくなり、一度、区切りをつけることにする。

立ち上がり、膝と腰を伸ばす。滞っていた血液が再び回り始め、足裏を針の束で突かれるような痛みが走る。

足を振ったり叩いたりしながら、周りの進捗を窺う。

イズモから少し離れた場所に、カリムが片膝を立てていた。石をひとつひとつ丁寧に拾い上げては、真贋を見極めるように注視し、静かに脇に寄せる。もどかしくなる動きだが、足元には見つけたらしい魔石が置かれており、効率はいいらしい。

その向こうにはガビトが地面に座りこんでいた。近くにある石を手に取っては元の位置に戻している。同じ石を何度も確認している上、一度は戻した石を今度は足元にできた山に追加する。イズモがすべて再確認しなければならないパターンだ。

視線を崖の縁の方に向けると、槍を手に周囲を見回すムグニの姿があった。あれだけ熱心に聞いていたのに、見張りに徹しているらしい。せっかくなら魔石を探し

てほしいが、彼はあくまでカリムの護衛をしに来たのだと思い直す。
——虎人って言ったって、いろんなやつがいるな。
人間の性格は種族差より個人差の方が大きいと言われているが、それが事実だと実感させられる光景だった。
自分の作業に戻ろうとして、ムグニの視線が一点に注がれていることに気づく。その先にはラティフの背中があった。
ラティフは一見すると、真面目に魔石を探しているようだった。手にした石を見つめては、後ろに投げている。しかし、尻尾は所在なげに揺れ、傍目にも集中力を欠いているのが分かった。
ふと、ラティフが振り返り、イズモと視線が合う。ラティフは慌てたように手元に目を向け、石をがちゃがちゃさせる。やはり、何かおかしい。
声をかけようとしたとき、カリムがやって来た。両手に山盛りの石を持っている。
「候補をお持ちしました。ご確認のほどよろしくお願いします」
「すごい量だな」
ラティフのことは気になったが、魔石が優先だ。すぐに判別に取り掛かる。
ひとつ手に取った瞬間、ゾクリと背筋が震える。
「お、これは使える。これも。ん、これも？」

次々と確かめていくが、ほとんどが合格だった。いくつかは不合格になったものの、イズモでも判断に迷う品質であり、初めてとは思えない精度だった。
「やっぱり、お前には才能があるみたいだな」イズモがため息を吐く。「オレなんか、ちゃんと見分けられるようになるまで三ヶ月もかかったんだぞ」
魔石の目利きには、魔力の量と質を正確に見抜く力が求められる。師匠の言葉を借りれば、『世界の声に耳を傾ける力』だ。カリムはそれを自然に身につけていた。
加えて、カリムには生来の勘の良さもあるらしい。イズモはカリムの倍以上の速度で選別していながら、ひとつも見つかっていない。訓練でどうこうできるものではないとはいえ、肩身が狭かった。
集まった石を背嚢にしまっていると、広場の奥に道が続いているのが見えた。来た道と同じように整備されている。
「せっかくだし、もう少し上の方まで行ってみないか？　お前なら魔石の鉱脈を探し当てそうだ」
イズモの提案に、カリムの表情が曇る。
「申し訳ないのですが、ここから先へはご案内できません」
「何かあるのか？」
「あそこに木の柱が立っているのが見えますか？」

カリムの指の先、道を少し進んだところに太い木の柱が二本、道の両端に立っていた。柱の間には縄が渡され、人の出入りを阻んでいる。
「あれは神域――神が住まう場所への入り口です。この世ならざる場所に繋がる門とされ、立ち入ることは固く禁じられています」
「入ると、どうなるんだ？」
「神罰が下ります」
一陣の風が、ごうと音を立てて通り過ぎた。まるでイズモの好奇心を警告するように。空を見上げてみるが、なんの姿も見えなかった。
カリムも同じように空を見ていたが、イズモの視線に気づくと表情を崩した。
「と、言いたいところなのですが、実際のところは分かりません。入ったと報告する者などいませんし、神もそれだけで罰するほど狭量ではないでしょう」
ただ、とカリムが声を低くする。
「神域に限らず、御山は計り知れない場所です。昔から、ひとりで登ってはならないとされ、掟を破ると村に災いが起こると伝えられています。三年前、ラシド様は〈命脈の儀〉の夜にひとりで登られ、そこから落ちて亡くなりました」
カリムがムグニの近くの崖を指差す。特に変わったところはないが、そう言われると気味が悪い。

「我々は神の庇護の元に生きています。どんな事情があろうと、神を試すようなことはすべきではありません」
「もっともな意見だな」イズモはため息を吐いた。
文化の形成の裏には、えてして合理的な理由があるものだ。事情が分からないのに軽んじるべきではない。
「例外として〈命脈の儀〉の昼間に限り、祈祷師と付き添いの者なら神域に入ることができます。もし、他の場所で見つからなければ、そのときに探してみましょう」
「そういう話なら仕方ないな」
触らぬ神に祟りなし、だ。
イズモが魔石探しを再開しようとしたとき、ガビトが体を地面に投げ出した。ムグニが呆れたように何か言うが、ガビトは手足をばたつかせて言い返す。
何を言っているのか、態度で分かるようになってしまった。
「仕方ないな。少し休憩するか」
「ご配慮、痛み入ります」
カリムが伝えた途端、ガビトがムグニの足元にある鞄へと突進する。猪のごとく突っ込んでいくガビトを、ムグニとラティフが押さえ込む。
「本当に子どもだな」

どこか懐かしい騒がしさに、イズモは笑みを浮かべた。

ガビトが背負っていた鞄の中には、想像を超える量のパンが入っていた。イズモのために、大量に用意したのだという。

パンは酵母で膨らませた本格的なもので、生地に乾燥させた果物や砕いた木の実が混ぜ込まれていた。かぶりつくと、口の中に香ばしい麦の香りと甘酸っぱい果物の風味があふれる。

街のパン屋に並んでいてもおかしくない完成度だった。

「初日から思っていたが、食い物のレベルは異様に高いよな」

子どもの頭ほどもあるパンをかじりながら、イズモが感慨深く言う。

「食事も大切な娯楽です。狩りと同じくらい探究に余念がありません」

隣に座っていたカリムが誇らしげに言い、前に目を向ける。

視線の先では、ラティフたちが奪い合うようにして食べていた。まるで獲物に群がる肉食獣のような光景だ。

「魔石は、どれくらい集めればいいのですか？」

皮革の水筒を傾けていたカリムが、ふと尋ねてくる。

「目標は百個だな。もちろん、あればあるほどいいが」

カリムが飲んでいた水を吹き出し、飛沫をもろに浴びる。
「そんなに必要なのですか⁉」
「探しているのはあくまで原石だからな。それだけあっても、加工したら弾倉ひとつ分にしかならない」袖で顔を拭きながら答える。
魔石の大きさは術式機構の規格で決まっており、天然の魔石を使うには形を調整しなければならない。
方法はふたつ。原石から削り出すか、砕いて成型するかだ。
市販の魔石はコストと扱いやすさから、主に後者の方法で作られる。前者が採用されるのは、超高純度の魔力が求められる場合だ。
「お前が集めた石なら、外側を少し削れば十分な品質が確保できる。全部使えば、魔石一個分にはなるだろ」
念のために魔石成型用の魔術具を持ち歩いていたのだが、まさか使う日が来るとは思わなかった。なんでも持ち歩く癖が功を奏した。
「たくさん集めたつもりでも、たった一回分ですか。魔石探しがこんなにも大変だとは知りませんでした」
「嫌になったのなら、帰ってもいいんだぞ」
意地悪く笑うと、カリムはぶんぶんと首を横に振った。大変な作業でも、家にい

るよりはいいらしい。
「それにしても、驚くべき力を持つ石が地中に埋まっているなんて不思議ですね。どうやってできたのでしょうか」
カリムが崖を見上げ、目を細める。
『『祈りの書』、第一章十七節」イズモがぽつりと呟く。「神は足元にあった石を拾うと祈った。私の代わりに、この世界をつなぎとめよ、と」
カリムが尋ねるように首を傾げる。
「とある宗教の聖典の一節だ。神が世界を創造する話の中で、魔石が生まれた経緯も語られている」
神は混沌から世界を創った。しかし、世界は己の形を保てず、すぐに崩れてしまった。
神は再び世界を創った。今度は形を維持できるよう、世界に法則を組み込んで。しかし、神が眠っている間に法則は消え、世界は混沌に戻ってしまった。
神は三度世界を作った。今度は自らの力の一部を石に込めた。石が自分の代わりに、世界を維持し続けるように。
そうして世界は今も続いている。
「魔力とは神の力。魔石は神の力が込められた石。物理法則は神の魔術というわけ

だ。魔石によって魔術を維持しているという点では、この世界は巨大な魔術具とも
いえる」
　その宗教の教祖も魔術の才能があったらしい。教祖が起こしたという奇跡の数々も聖典に記録されている。中には嘘としか思えない記述もあるが、それでも信徒は疑わずに寄付をするのだから、いい商売だ。
「壮大ですね。我々の神は世界の成り立ちまでは語っていません」
「教祖に都合のいい話をでっち上げているだけだからな。こういう説もあるってくらいに思ってくれ。オレも信じていない」
「そうなのですか？」カリムは意外だと言いたげな目でイズモを見る。だったら、なぜ、そんなに詳しいのか、と。
「その説は魔術師にとって都合が悪い」イズモはカリムの言葉を、なぜ信じていないのかと解釈したことにした。「魔術師は神の力を、人を殺すために使っていることになるからな」
　人間が魔獣に怯えて生きていた時代、魔術師は人類の矛として、魔獣と戦っていた。しかし、魔獣の脅威が薄れ、人口が増え始めると、その力は人間同士の争いに使われるようになった。
「魔獣相手には力不足でも、人間なら十分という魔術師は多い。そして、魔術師に

対抗できるのは魔術師だけだ。個人間の争いから国家間の争いまで、魔術師はあちこちで求められるようになった」
　科学技術の発展もそれを後押しした。術式機構が開発され、魔術は神が与えたもう奇跡から制御可能な個人技能となり、魔術師の数は爆発的に増えた。
　人々がその危険性に気づいたときには、もう後戻りはできなかった。今や、魔術師は魔獣より人を殺しているとされる。
　魔術師の需要増大に伴い、必然的に魔石の価値も上がり、国際的に高値で取引されるようになった。
「魔術師は強力な暴力装置だ。魔術師を使うには魔石がいる。魔石が動けば金が動き、金が動けば人が動く。人が動けば争いが起き、争いが起きれば魔術師を使う。救いのない無限の連鎖だ。魔石を作ったのが神なら、快く思っているはずがない」
　もし、神が人が争うことを見越して魔石を作ったのなら、それは神ではなく悪魔と呼ぶべき存在だ。世界の寿命を削ってまで、くだらないことで殺し合う様子を、腹を抱えて見ているに違いない。
「しかし、イズモ様はそれを世のため人のために使われていらっしゃる。そうでしょう？」
「どうだかな。オレは雇われの魔術師だ。金がもらえるなら、なんだってやる」

イズモは苦々しいものを吐き出すように言う。
「今回の仕事だってそうだ。オレは相手の事情を知らない。そいつが何をしたのかも、本当にそいつが悪いのかも。それでもオレはやる。金のために」
師匠はいつも、魔術を自分のために使うな、と言っていた。魔術は誰かの幸福を願って使われるべきだ、とも。
私利私欲に走った魔術師がどうなるか知っていたからだ。
しかし、イズモはその嫌悪すべき存在に成り果ててしまった。
「もしかしたら、お前の集めた魔石で、オレは――」
罪のない人間を殺すことになるかもしれない。言いかけて、口をつぐむ。それだけは人として言うわけにはいかなかった。
「悪い、くだらない話をした」
気まずくなり、ごまかすようにパンをかじる。もそもそとして、なかなか喉を通らなかった。水筒を煽り、強引に流し込む。
らしくない、と思う。
いつものように、都合の悪いことは黙っていれば良かった。魔術師がいかに素晴らしい存在かを語る方が、カリムも喜んだはずだ。どうして自分を偽ることに抵抗を覚えたのか。

「そんな顔をなさらないでください。イズモ様のお話は私が聞きたかったことです」
悶々とするイズモに、カリムが優しく言う。
「私は〈風〉たちから多くの話を聞きました。しかし、彼らの話には感情がありません。彼らは人間のように、喜び、笑い、怒り、悲しみ、悩み、苦しまないからです。私が聞きたかったのは、外の世界を生きたイズモ様のお話なのです」
カリムの真っすぐな目に耐えられず、視線を逸らす。
「オレが本当のことを話しているとは限らないだろ。自分に都合よく捻じ曲げているとは思わないのか？」
「それでも構いません。私はイズモ様のおっしゃることを信じます。ですから、もっと話してください」
イズモは深々と息を吐いた。赤の他人から、金でも魔術でも性でもないものを求められるなど、初めての経験だった。
この青年といると調子が狂う。他人には深入りしないと決めていたのに、言わなくていいことを言わずにはいられなくなる。
「話すのはいいんだけどな。お前、本当は外の世界を自分で確かめたいんじゃないか？　オレの話を聞いて、自分の気持ちをごまかして、それで本当に満足か？」
イズモの試すような言葉に、カリムの表情が翳（かげ）る。

「否定はしません。ですが、私は――」
「森から出られないんだろ？」遮るように、言葉を挟む。「それはオレも同じだ。だが、オレはどんな手を使ってでも脱出する。方法が見つかったら、お前も一緒に来ればいい。お前には世話になっているし、できる範囲で案内してやる。行きたいところへ行って、食いたいものを食え。金は、まあ、なんとかなるだろ」
「……本当ですか？」
「オレは守れない約束はしない主義だ」言ってから急に恥ずかしくなる。「ま、まあ、お前が望むんなら、だけどな」頬を掻き、言葉を濁す。
「もちろんです。ぜひ、お願いします」
カリムは朗らかに笑った。
嬉しそうに。そして、どこか悲しそうに。

4

昼食を終え、イズモは魔石探しを再開した。
午前中の遅れを挽回しようと、せっせと石を調べる。競っているわけではないが、魔術を知らないカリムに負けるのは一級魔術師としての矜持が許さなかった。

しかし、一時間もしないうちに、イズモの心は折れた。
「あっづい」イズモは恨めしそうに空を睨んだ。
太陽は素知らぬ顔で、燦々と輝いている。
切り立った崖沿いの道に、日差しを遮るものなど何もない。上着を脱ぎ、袖をまくっても、照りつける太陽の前には無力だった。帽子がなければ、熱中症で倒れているところだ。
「いくらなんでも暑くないか？」
隣で作業をしていたカリムに尋ねると、不思議な顔をされる。
「私は過ごしやすく感じるのですが」
「お前は毛が白いからな。お前たちは暑いだろ？」
後半はラティフたちに向けたものだったが、三人とも首を横に振る。四対一。イズモが少数派らしい。
「お前らは実質、裸だしな」
「イズモ様もお召し物を脱がれてはいかがですか？」
「そんなことしたらオレの自尊心が死ぬだろ」
イズモの気も知らず、カリムは尻尾を機嫌よく揺らしていた。
普通の人間にとって、服は身体保護や体温調整に加え、自分をより良く見せるた

め の道具だ。衣服の情報量は着る者の醜い部分を隠し、文化的背景、社会的背景が見る者の目を本質から遠ざける。

そのいずれも、この虎人たちには縁のないものだった。彼らはごまかしも虚飾も必要としない。服を着ている自分が惨めに思えるほどだ。

——オレも、こいつらみたいな顔と体だったら、人生違っただろうな。

くだらないと分かっていても、つい、そんなことを考えてしまう。

彼らに囲まれていると、自分も虎人になったような気分になる。しかし、水瓶の奥に薄汚い鼠の顔を見るとき、それが幻想にすぎないことを思い知らされる。

彼らの村は彼らのために存在し、イズモの居場所にはなり得ない。

「やめやめ、集中集中」

気を取り直し、石へと手を伸ばす。

そのとき、ふいに日が陰った。体を焼いていた熱が和らぎ、少しだけ涼しくなる。振り返ると、ラティファが立っていた。魔石の判定かと思ったが、手には何もない。

疑問に思っていると、ラティファがカリムに何か言う。カリムは顔をほころばせ、同意するように頷く。

「ラティフが川に行かないか、と言っています」

「川に魔石がありそうなのか？」

「そうではなく、水浴びの提案です。ラティフは、イズモ様が暑さで倒れないか心配なのです」
　カリムはいかにも名案といった様子だったが、イズモは渋面を作る。
「心配してくれるのはありがたいが、この数ではな」
　午後からの追い上げでいくつか見つけていたが、目標には遠く及ばなかった。切り上げて帰るには抵抗がある。
「しかし、このまま探していても、日が暮れる前に集まるとは思えません。今日のところは引き上げて、後日もっと人を集めて探しませんか？　子どもたちも何か見つけているかもしれません」
「そんな呑気なこと言っていて、敵と遭遇したらどうするんだ？　オレは平気だから、せめて日が陰るくらいまでは頑張ってくれ」
　多少の苛立ちを込めてそう言うと、それまで黙っていたムグニが、吐き捨てるように何か言った。
　イズモを除く全員がさっと青ざめる。
　ラティフはムグニに掴みかかる勢いで歩み寄り、声を荒らげる。しかし、ムグニは目を逸らして取り合わない。
「なんて言ったんだ？」

尋ねるが、カリムは返事に困ったように黙っている。
「ちゃんと教えてくれ。隠されると余計に気になる」
それでもカリムは逡巡し、イズモが何度かせっついて、ようやく口を開いた。
「気を悪くしないでいただきたいのですが、イズモ様が、その、臭うと」
「臭う？」
イズモはキョトンとしてシャツに鼻を近づける。すえた臭いと、かすかな獣臭が鼻をついた。
考えるまでもなく、最後に風呂に入ったのは一週間以上前だった。森に入った当初は水場で体を洗っていたが、迷い始めてからはそんな余裕もなくなっていた。
急激に羞恥心が湧いてくる。
「それはなんというか、気づかなくて申し訳なかった。こんな臭いをさせたまま家に泊めてもらったのか。我慢させてすまない」
イズモの情けない表情に、カリムが慌てる。
「そんな、私は我慢などしていません。我々とは異なりますが、決して不快ではなく、初めてなのにどこか馴染みのある、とても不思議な匂いです。どちらかといえば好きですし、なんなら昨夜は残り香で興奮し――」
「おい、やめろ」

カリムのフォローは恥ずかしさを助長するだけだった。臭いを撒き散らしていたことに変わりはなく、ラティフやガビト、村の男たちも黙っていただけだろう。
魔石と清潔感。悩ましいところだが、指摘されて無視するのは気づかなかったより悪い。それに、この天気では夜まで気温が下がる見込みはなく、熱で倒れたら魔石どころではない。
「……そうだな。一度頭を冷やして、計画を立て直すか」
イズモが立ち上がると、カリムが嬉しそうな顔で続いた。怒鳴っていたラティフと仲裁に入っていたガビトもこちらを向く。
「気が変わった。川までの道案内、頼めるか？」
イズモがそう言うと、ラティフとガビトは笑顔で頷いた。ムグニは最後まで顔を合わせなかった。

川に向かう途中、カリムが家に取りに行きたいものがあると言い、一度村に戻ることになった。準備ができたら広場に集合することにして解散する。
イズモは家に戻ると、集めた石を床に並べた。十数個の石ころ。それが今日の成果だった。
あらためて眺め、思わず腕を組んで唸ってしまう。見つかっただけマシとはいえ、

あまりにも心もとなかった。
――オレの不安を理解しろって方が無理か。
魔石は魔術師の生命線だ。しかし、普通の魔術師には肉弾戦という魔石に頼らない戦闘手段があり、たとえ後衛でも、一般人相手なら後れを取ることはない。
だが、特殊技能に特化した魔術師は、魔石がなくなったが最後、完全に無力になる。イズモはことさら力が弱いため、格闘技の心得がない相手でさえ、手足を押さえられたら、用が終わるまで耐えるしかなくなる。
だからこそイズモは魔石を欲するのだが、魔術を知らない彼らには、緊急性が伝わっていないようだった。予備があるにしても焦燥感は募る一方だ。
――ま、いまさらグダグダ言うのは良くないな。
家を出ようとして、足が止まる。外の熱気を浴びた途端、背嚢が急に重さを増した気がした。
――上着と荷物は置いていくか。
ここのやつらが金を盗っても意味がないしな。イズモはそう言い訳し、背嚢を下ろした。これ見よがしに置いておくのは気が引けたので、水瓶の影に隠しておく。
慣れない体の軽さに居心地の悪さを感じつつ、家を出る。
集合場所ではカリムとラティフ、ムグニ、そして巨大な人影がイズモを待ち構え

ていた。
「バーリ？　なんでここにいるんだ？」
　尋ねると、バーリの笑顔が一段上がる。名前を呼ばれたのが嬉しかったらしい。
太陽といい勝負ができそうな眩しい笑みだった。
「ちょうどそこで会いまして、水浴びに同行したいとのことでした」
「別に構わないが」
　水浴びなどいつでもできるだろうに、男の目は子どものように輝いていた。カリムにしろ、バーリにしろ、妙なことに付いてきたがる。暇なのだろうか。
「あとはガビトか」
　イズモがそう口にしたとき、後ろの方で間延びした声が聞こえた。見ると、ガビトが手を振りながら走ってくるところだった。イズモも手を振り返す。
　しかし、近くまで来たところでガビトの足が止まる。その目はイズモの後ろ、バーリに注がれていた。
　イズモが不思議に思っていると、ガビトは早口で何か言い、逃げるように引き返していった。
「忘れ物か？」
「急にお腹が痛くなったので、家で寝ていることにする、とのことです」

食べ過ぎだろうか。

ラティフとムグニを見ると、ふたりとも苦い顔をしていた。

細かな石の河原をラティフが駆ける。獣のように四肢で地面を掴み、右へ左へと何度も切り返して相手を撹乱する。

目にも止まらない速さで動くラティフを、バーリは動じることなく視線だけで追う。バーリの足元には細い木の枝が立てられ、それを守るように構えている。

ラティフの影から、ムグニが飛び出す。脇目も振らず、一直線に枝へと走る。

バーリが一歩踏み込み、右手をムグニに伸ばす。捕まる寸前、ムグニは横に飛んで回避。バーリの目がそちらに流れる。

すかさずラティフが反対側から突進。枝を狙う。バーリの伸ばされていた右腕が即座に折りたたまれ、ラティフの頭を掴むようにして押し留める。

バーリの注意がラティフに逸れた隙に、死角からムグニの手が枝に伸びる。

ムグニが枝に触れる直前、動きが止まる。ムグニの右手を、バーリが後ろを見ないまま左手で掴んでいた。

ムグニの顔が絶望に染まるのと、投げ飛ばされるのが同時。直後に、ラティフもその後を追う。ふたりは見事な放物線を描き、川へと落ちる。盛大に水柱が上がる。

ふたりは川から上がると、またバーリへと立ち向かう。
「あれは何をやっているんだ？」
「狩りの練習を兼ねた遊びです」目の前で繰り広げられる攻防を見ながら、カリムが楽しそうに解説する。「攻めと守りに分かれ、攻めは守りの足元に立てた枝を奪えば勝ち、守りは攻めを捕まえれば勝ちです」
「ガビトはこれが嫌で逃げたのか」
話の間にも、また水しぶきが上がる。
イズモたちが来ていたのは村の下流にある河原だった。上流と違って細かな砂利になっており、川の流れも緩やかだった。
近くの川幅が狭くなっている場所には橋がかかっていた。両岸から低い崖が河原に突き出しており、その間に丸太を並べてある。
橋の向こうの土地は聖域と呼ばれ、女の村と物々交換や〈命脈の儀〉を行う場所となっている。聖域の反対側にも川があり、その向こうに女の村があるという。
つまり、聖域は男女が不用意に会わないための緩衝地帯ということらしい。
「聖域に入れる時期も決まっているのか？」
「いえ、聖域は長の許可があれば大丈夫です。魔石があったかは定かではありませんが、明日は聖域で魔石を探してみましょうか」

「そうしてもらえると助かる」
魔石はよく神聖な石とされ、魔石が採れる場所は神聖な土地とみなされやすい。彼らの聖域がそうとは限らないし、地勢的にも期待薄だが、入っていいなら調べて見る価値はあった。
視界の端で、またもやラティフとムグニが空を飛ぶ。
バーリは三戦目を終えても、息を切らしている様子はなかった。余裕を見せつけるように、腰に手を当てて笑っている。どう見ても数年以内に死ぬとは思えない。
「本来は攻めと守りが一対一で行うものなのですが、バーリが相手では、ふたりがかりでも分が悪いようですね」
「体格や技能、経験で勝る相手に正攻法で挑むからだ」イズモの声に棘が混じる。
脳裏にあったのは魔狼と戦う男たちの姿だった。個々の力や連携は悪くなくても、格上の相手に真正面からぶつかれば、蹴散らされるに決まっている。
彼らの美学が分からないでもない。だが、その先に待っているのは死だ。
――バーリは力も速度もあるし、間合いも広い。動きを制限するか、間合いの外から攻撃すべきだな。
何度目かの攻防の末、水から上がったふたりが、そのまま河原に突っ伏す。体力が切れたらしい。

ずぶ濡れのまま横たわるふたりを微笑ましく思っていると、バーリがイズモに向かって何か言い、手招きするのが見えた。

「バーリが相手をしてほしいようです」

「相手って、あの遊びのか？　そういうのは体格差を考えてから言え」

イズモが頭を振ると、バーリは残念そうに眉尻を下げた。しかし、すぐに表情を戻し、また何か言う。

「えっ」とカリムが声を漏らす。ラティフやムグニも驚いた顔をしていた。

「なんて言ったんだ？」

「イズモ様はどんな道具を使っても構いません。その上で、負けた方が勝った方の言うことを何でもひとつ聞く、という条件ではどうか、と」

「はあ？」

バーリは恐ろしく真剣な表情をしていた。そこまで一戦交えたいのだろうか。

「そういう問題じゃない。そんな疲れることとしたくな――」

イズモの言葉に被せるように、ムグニが何かを言った。

次の瞬間、ラティフがムグニに飛びかかった。ムグニを押し倒し、馬乗りになる。固く握った拳が躊躇いなく振り下ろされる。

ラティフの右手がムグニの左頬に触れる寸前、バーリの怒声が川に響いた。ラ

ティフが硬直。
　バーリは声を和らげ、ふたりに何か言う。ラティフはバーリに目を向け、何か言いたげな顔をした。ふたりはしばらく見つめ合っていたが、ラティフは諦めたように立ち上がり、ムグニを解放した。
　微妙な空気が流れる。
「意気地なしとか腰抜けとか、そういう意味のことだな？」
　カリムが黙ったまま頷く。
　馬鹿にされるのには慣れていた。たかが子どもの言ったことで、いちいち感情を高ぶらせることはない。しかし、舐められたまま黙っていると、状況が悪化することをイズモは経験的に知っていた。是正するなら今しかない。
「売られた喧嘩は買わない主義だが、ここはひとつ、いいところを見せておくか」
　銃を置き、ポーチ類を外す。ついでに帽子と靴、靴下も脱ぐ。足裏から、ひんやりとした細かな砂利の感触が伝わってきた。
「無理をなさることはありません。ムグニには私からも言っておきます」
「いや、いい。お前は荷物を見ていてくれ。オレがその気になったら、誰にも止められないってことを教えてやる」
　軽く体を動かしながら、頭の中で戦い方を考える。先ほど、ぼんやりと考えてい

た方法で問題ないだろう。道具を使ってもいいという条件なら勝ち目はある。
「ちなみに、やってはいけないことはあるか？」
「相手を故意に傷つける行為は禁止です。ただ、枝を取ったり守ったりするために、やむを得ず触れる分には問題ないとのことです」
カリムがバーリに確認を取る。ざっくりしたルールしかないのは、破る人間がいないからだろう。善良すぎる。
「では、オレの戦い方を見せてやろう」
準備運動を終え、バーリと向かい合う。
バーリはもう笑っていなかった。目に射抜くような鋭さを宿し、イズモと見つめ合う。ラティフとムグニも固唾を呑んで見守っている。
イズモは足元から、手のひらに収まるほどの石をいくつか拾った。ひとつを右手に、残りは左手で持つ。
イズモ以外の全員が疑問符を浮かべる中、振りかぶる。
投擲。
石はバーリの足と足の間、枝を固定している砂の山の少し手前に命中した。砂が爆発したように飛び散り、枝が高々と吹き飛ぶ。同時に、イズモは右方向へ回り込むように走る。

バーリは瞬時にイズモの意図を把握、枝を追いかける。バーリが追いつく前に、イズモは地面すれすれから投擲。枝を空へと打ち上げる。

枝がふたりの頭上を舞う。

バーリは落下地点を予測し、河原を走る。砂に足を取られながらもイズモに先んじて到着、落ちてくる枝を待つ。そこでさらに石を投げ、向きを変える。バーリはまた走る。

バーリの顔には焦りがあった。動きもかなり鈍い。

無理もない。そもそも砂地は人間が走り回るのには向いていないのだ。特にバーリのように背が高いと不安定になりやすく、体重が重いと砂に沈みやすい。

足元がそんな状態なのに、頭上を見ながらの移動となれば、体にかかる負荷はイズモの比ではない。

おまけに、イズモはときどきバーリの足元にも石を投げている。飛び散る砂に一瞬ではあるが気を取られ、さらに動きが悪くなる。

枝を飛ばしつつ、バーリの気を逸らす。それを繰り返しながら、イズモは少しずつ距離を詰めていく。

次でイズモがバーリに追いつくとなったとき、バーリの顔に閃きが走る。バーリは足元の砂利を掴むと、力任せにイズモの投げた石へと投げつけた。

石の散弾。
いくつかがイズモの石に当たり、軌道を逸らす。枝はそのまま落下していく。
バーリの機転に歓声が上がる。
バーリが勝利を確信し、枝へと跳ねる。
——今だ！
その瞬間、イズモが加速。
踏み切り、バーリの背中に着地。
足裏に柔らかな毛と硬い筋肉の感触を感じつつ、さらに跳躍。
イズモの手が、バーリの指の先にあった枝を奪い取る。
宙に舞うイズモの姿を、全員が驚きの表情で見ていた。
まるで魔法でも見たような、あっけにとられた顔だった。勝ったことよりも、彼らを出し抜いたという達成感が心地よかった。
バーリの挑戦を受けて、勝ったという事実は、イズモの村での立場をよくするに違いない。
跳躍の頂点に達し、落下が始まる。
イズモは体を捻り、着地の体勢に入る。いくら下が砂地でも、身長の数倍の高さから落ちれば骨折する。着地と同時に転がり、勢いを殺さなければならない。

しかし、イズモの視線の先にあったのは川の水面だった。枝を奪うことに夢中で、着地地点のことまで気が回らなかった。
「しまったあぁぁぁ！」
長い悲鳴を残しながら着水。
水の跳ねる音がくぐもった音に変わる。冷たい水に包まれ、心臓が縮み上がる。
必死に手足をばたつかせ、水面を目指す。しかし、濡れた毛と服が体にまとわりつき、思ったようには浮かばない。
ときおり指先が空気に触れるも、何も掴めないまま水中に戻る。
焦りが増す。必死にもがく。もがけばもがくほど、体は沈んでいく。
息苦しさに、思わず空気を吐き出す。水が肺にまで押し寄せる。
酸素が失われ、体から力が抜けていく。
朦朧とする意識の中、淡く輝く光へと腕を伸ばす。
手首が掴まれる感触。続いて、体が温かいものに包まれる。急速に浮き上がっていく感覚。遠のいていた太陽がみるみる近づき、視界が光で埋め尽くされる。
顔が水面を破り、世界に音が戻る。
激しく咳き込み、水を吐き出す。貪るように息をする。
「イズモ様、大丈夫ですか⁉」

カリムが切羽詰まった様子で声をかける。いつもの笑顔はなく、濡れた毛が顔に張りつき、精悍さが際立っていた。
「なんとかな」ようやく落ち着きを取り戻し、声を絞り出す。「危うく溺れ死ぬところだった」
「イズモ様は、もしかして……」
「ああ。泳げないんだ」
驚くカリムから、イズモは顔を背けた。

川から上がると、すでに火をおこす準備が始まっていた。
ラティフとムグニが枝を集め、バーリが火種を作る。ものの数分で赤々とした焚き火が用意された。
礼を言うと、バーリが神妙な面持ちで頭を下げた。
「配慮が足りませんでした。水浴びはやめておきましょう」
「泳げないだけで、水が怖いってほどじゃない。足がつく場所なら平気だ」濡れそぼったシャツのボタンを外しつつ、笑いかける。「せっかく全身ずぶ濡れになったのに、乾かして終わりなんて中途半端だしな」
しっかりした枝を火の近くに刺し、脱いだシャツとズボンを広げて被せる。下着

に手をかけたとき、視線に気づく。
虎人たちの目がイズモの体に釘付けとなっていた。鼠人の局部が気になるのかと思ったが、驚きと痛ましさの混じった表情で察する。
「これが気になるか？」イズモは手を止め、彼らに向き直る。
イズモの体には、巨大な爪で引っ掻かれたような、歪な桃色の三本線が左の鎖骨から右脇腹へと走っていた。
「傷痕なんて見慣れているだろ」
「それは先日の魔狼との戦いで……？」
「いや。昔、ちょっとな」
イズモが言ったのはそれだけだったが、カリムとバーリには十分だったらしい。
カリムは目を伏せ、小さく「失礼しました」と謝った。バーリはラティフとムグニに声をかけると、不満そうな顔のふたりを連れて、少し離れた場所で遊びを再開した。
ふたりとも、イズモの話したくないという思いを汲み取ってくれた。
「気を遣わせてばっかりで申し訳ないな」
「我々の不明ゆえです。お気になさらず。こちらへどうぞ。背中をお流しします」
イズモは下着を脱ぐと、浅瀬に腰を下ろした。座っても臍が浸からない程度の深

さだった。清らかな流れが足の間を抜けていく。こんな開けた場所で全裸になるなど危険極まりないが、不思議と不安はなかった。
カリムは背中に水をかけると、手のひらで優しくこすり始めた。しばらくすると、手の下で泡が生まれ、薬草の匂いが漂ってきた。
「それ、まさか石鹸か？　この村で作ったのか？」
「薬酒と同じで、祈祷師に代々伝わるものです。多用すると川を汚すとのことで、特別なときにしか使いません」
カリムはあっさりと言うが、イズモは驚きを隠せなかった。
石鹸は油脂と強アルカリを反応させて作る、れっきとした化学物質だ。特に硬石鹸は偶然できるような代物ではなく、化学の知識がなければ作れない。
「誰がいつ頃、作り始めたかは分かるか？」
「残念ながら、私は作り方を教わっただけです。誰が始めたのか、いつ頃から作られるようになったかは存じません」
村の歴史はカリムにも伝わっていないらしい。世代交代が異様に早く、文字がないと必然的にそうなるのだろうが、この村に何があったのか知るすべがないのは残念だった。
――知識のある人間が紛れ込んだとしても、村の人間に教養がなかったら文化と

してはは根付かないだろうな。
だとすると、この辺りにはもともと知識や技術を持った人々が住んでおり、なんらかの理由で森に閉じ込められたのだろうか。長い時間の中で様々なものが朽ちていき、わずかな知識だけが残った。
問題は『なぜ』だ。過去に、この場所で何があったのか。
「先ほどはお見事でした」
カリムの声に、イズモの思考は断ち切られた。首だけで振り返ると、カリムの笑顔があった。
「枝を動かすだけでなく、バーリを踏み台にするなど、我々では逆立ちしても思いつきません。さすがイズモ様ですね」
カリムはまるで自分のことのように嬉しそうだった。
「ラティフとムグニがやっているのを見て、自分ならどうするか漠然と考えていた。オレの体格じゃ、普通にやっても勝ち目がないからな」
「バーリに誘われることを想定していた、と？」
「いや、癖みたいなものだ。魔術師は常に戦闘の危険がある。いつでも、誰とでも、どんな状況でも対応できるよう考えていたら、自然とこうなった」
イズモの非力さ、魔術の性質から、相手と正々堂々と戦うことはあり得ない。い

かに自分に有利な状況を作り、相手の実力を封じるか。敵対の有無を問わず、誰に対しても無意識に考えてしまう。
褒められたことではないが、命を救われたことも少なくない。
「敵か味方かなんて状況でいくらでも変わるし、外面がいいからって内面までいいとは限らない。対策して損はない」
「それでは気が休まらないでしょう」
「戦場では馬鹿とノロマから死ぬ。生き残るには必要なことだ」
カリムが何か言おうとした気配を感じたが、結局、何も言わなかった。
背中が終わると、今度は腕だった。イズモの痩せた肩、上腕、前腕へと石鹸を滑らせる。
黒ずんだ泡が滴り落ち、水に靄を作る。すぐに流され、下流へと消えていく。
イズモは自分の腕を擦る、カリムの腕を見ていた。
白く逞しいそれはイズモの倍以上も太く、毛の薄い上腕の内側には太い血管が浮いている。動くたびに筋肉が盛り上がり、力で敵う気はしなかった。
そんな男に、自分は無防備に背中を晒している。湧き上がる不安に、大丈夫だと言い聞かせる。カリムはあいつらとは違う。
――本当にそうか？　そう思いたいだけじゃないのか？

心の奥底で、暗い感情が囁く。
金をちらつかせ、理解不能な要求をする男たち。カリムが彼らと同じでないと、どうして言えるのか。自分はこの青年のことを、何も知らないというのに。
「どうかされましたか？」視線に気づいたのか、カリムが手を止める。「力が強すぎたでしょうか」
「あ、いや、問題ない」慌てて取り繕う。「お前の体格を羨ましく思っただけだ」
「私の？」カリムは驚いたようだった。「たしかにアドルと同じ体型ではありますが、残念ながら見た目だけです。私には彼のような力はありません」
本当にそう思っているのだろう。カリムに謙遜した様子はなかった。
しかし、イズモの心は暗さを増す。
「筋力は筋肉の断面積に比例する。お前がどう思っていようと、オレより力がある。石で頭を殴ったり、顔を川底に押しつけたり。オレを殺すことくらい簡単に――」
ハッとしたときには遅かった。カリムの表情に影が差している。
「悪い。聞かなかったことにしてくれ」
カリムが何か言う前に、俯き、目を閉じる。水面に映るカリムの顔すら見られなかった。
その後は互いに一言もしゃべらず、それぞれのやるべきことをした。カリムは反

対側の腕、胸、腹、足を洗い、イズモはバーリたちの声を遠くに聞きながら、黙ってカリムに身を任せた。
自分の薄汚さも泡とともに洗い流すことができたら、どんなにいいだろうか。
「終わりました」
カリムがそう言ったとき、イズモは泡だらけになっていた。汚れは完全に落とされ、白い細かな泡で全身を包まれていた。
「泡を流しますね」
目を閉じ、水の冷たさに備える。しかし、一向に水が降ってこない。不思議に思っていると、カリムはイズモの背中と膝裏に腕を回し、体を持ち上げた。
「おい!? 何をする気だ!?」
「おや、常に考えてらっしゃるのではないのですか？」
そう言うやいなや、カリムは走り出した。河原を駆け抜け、下流へと向かう。
後ろの方でバーリが何か叫んでいたが、カリムは無視した。
カリムが向かったのは橋だった。崖横の坂を登り、橋の中程まで来ると、橋の縁に足をかける。
眼下には悠々と流れる川面と、河原でこちらを見上げるバーリたちの姿があった。子どもたちが飛び込んでいた崖よりも低いが、それでも水面から五メートルはある。

「まさか飛び降りるつもりか!?」
「そのまさかです」
「ちょっ、お前、やめやめやめやめやめ――」
カリムは躊躇いなく跳んだ。一瞬、重力がなくなり内臓が浮くような感覚。すぐに落下が始まり、水面がみるみる近づいてくる。
着水。
またもや水に包まれ、イズモは身を強張らせる。今回はある程度の心構えができており、思ったほどの衝撃はなかった。何より、イズモを抱きしめるカリムの温かさが安心感をもたらしていた。
無音の中、おそるおそる目を開ける。
目の前に青い世界が広がっていた。足元には青黒い川底があり、頭上には淡い光の太陽があった。無数の泡が、こぼれ落ちる真珠のように川面へと昇っていく。
透き通る水の向こうにカリムの美貌があった。アドルを彷彿とさせる真剣な顔。
カリムもこんな表情ができるのかと意外に思った。
だんだん息苦しくなり、口から息がこぼれる。水面を目指そうにもカリムに掴まれて動けなかった。
このまま溺死させられるのか。そう思ったとき――。

カリムの口がイズモの口に押し当てられる。
驚く間もなく、肺にカリムの息が送られる。イズモが息を吐くと、今度はカリムがそれを吸い込む。二回、三回。互いの息を交換し、呼吸をつなぐ。
それでも息苦しさを覚え始めたころ、カリムが水を蹴り、上昇していく。
水面から顔を出すと、風のざわざわとした音が耳に響いた。
「お前、どういうつもりだ⁉　オレを水恐怖症にしたいのか⁉」
イズモの猛烈な抗議にも、カリムは表情を崩さなかった。渓流を思わせる青い瞳で、静かにイズモを見つめている。
「私はイズモ様の味方です」
「はあ？」
「イズモ様が私のことをどう思ってらっしゃるのかは分かりません。ですが、私は何があろうとイズモ様の味方です」
先ほどのことを言っているのだと、遅れて理解する。
「気持ちはありがたい」呼吸を落ち着けながら言う。「だが、会って数日の相手に、そんなことを気安く言うな。オレはお前の期待に応えられるような人間じゃない」
「それは私にとって重要ではありません」カリムは揺るがない。「私はイズモ様に命を救われました。私にはそれで十分なのです。たとえ世界を敵に回しても、私は

イズモ様の味方です」
イズモを見つめるカリムの目に、呆然とする自分自身の姿が映っていた。目付きの悪い、貧相な顔の鼠人。肩入れする価値があるとは思えない。
「なんで、そこまでするんだ。赤の他人だろうが」
「私がそうしたいと願うからです。それでは答えになりませんか？」
イズモの心臓は激しく脈打っていた。それが水への恐怖によるものなのか、カリムの言葉によるものなのか、イズモには判断できなかった。
答えを求めるように空を見上げる。
空はどこまでも青く、澄み切っていた。

5

家に戻ったイズモを待ち受けていたのは石の山だった。家の入り口の脇にうずたかく積まれ、崩れた一部が家の中に入り込んでいた。
「なんだ、これ。昼間はなかったぞ？」
驚くイズモの横でカリムが微笑む。
「子どもたちが集めてきた石でしょう。皆、イズモ様のために頑張ったのです」

「オレのためというか魔術見たさだろうが……」イズモはため息を吐く。「それにしたって頑張りすぎだろ。選別にどれくらい時間がかかるんだ」
「私もお手伝いいたします。まずは夕餉にいたしましょう」
カリムは家に入ると、さっそく鍋に水を入れ、かまどに乗せる。カリムが当たり前のように支度に取りかかるのを見ても、イズモは何も思わなくなっていた。
食事はカリムに任せ、石を中に運ぶことにする。
山の中腹から石を掻き出すように崩し、戸口の前に小さな山を作る。山をかき集めるようにして、家の中に入れる。それを繰り返し、少しずつ家の中に山を移動させていく。
途中、明らかに駄目と分かるものが多数あったが、見なかったことにする。
「お食事の準備ができました」
山を半分ほど移動させたところで声がかかった。馴染み深い香りが鼻をくすぐり、腹が鳴る。
「この匂いはキノコか」
「よくお分かりですね。苦手でいらっしゃいますか？」
「いや、むしろ大好物だ」
カリムの後ろから鍋を覗き込む。大雑把に裂かれた数種類のキノコが鍋の中で

踊っていた。いずれも馴染みのある形で、ホッとする。
「食料が盗まれたと聞いたときはどうなるかと思ったが、案外大丈夫そうだな」
「なくなっていたのは肉と魚ばかりとのことです。野菜や果物、キノコや山菜などには、ほとんど手がつけられていませんでした」
「腹を空かせた人間が求めるのは炭水化物、タンパク質、油だ。菜食主義者かよほどの好物でもない限り、野菜には手を出さないだろうな」
作業の時間や運べる量には限りがある。何を選び、何を諦めるかとなると、優先順位は自ずと決まってくる。
「だとすると、その方はよほど肉と魚が好きだったのですね。あれだけの量をすべて持っていったのですから」
カリムの驚きとも呆れともつかない言葉に、少し引っ掛かるものを感じる。
「どれくらいの量だったんだ？」
「調理したとしたら、おおよそ五百食分でしょうか」
「五百？」
いくらなんでも多すぎる。その上、相手は魔狼の首まで持ち出している。どう見積もっても、大人ひとりと子どもふたりで運べる量ではない。車があれば別だが、それならタイヤの痕が残る。

――仲間がいるってことか？　そんなの聞いてないぞ。
　ガラントが聞き逃したか、あるいはユピトガが事件後に雇ったか。どちらにせよ、話が大きく変わってくる。
　しかし、集団で行動しているなら、痕跡がまったく見つからないのは奇妙だった。どんな人間だろうと食事をし、排泄する。人間がいた跡が残る。大勢ならなおさらだ。虎人たちが見逃すとも思えない。
　そのとき、脳裏に閃くものがあった。
――ユピトガの子どもって、何歳だ？
　ガラントは「ユピトガにはふたりの息子がいる」としか言っていない。勝手に幼い兄弟を想像していたが、実は大人なのではないか。加えて、ふたりが魔術師という可能性もあるのではないか。
　辻褄は合う。違和感は拭えないが、検討するに値する。
「ご心配されるお気持ちは分かります。しかし、今は食事にしましょう」
「……そうだな」
　すぐには答えは出そうにない。諦めて火のそばに腰を下ろすと、カリムが椀を差し出した。
「熱いのでお気をつけください」

『熱いから気をつけるのよ』
微笑むカリムに、懐かしい顔が重なる。伸ばしかけた手が止まる。
「どうされました？」
椀を受け取ろうとしないイズモに、カリムが首を傾げる。
「あ、いや、なんでもない」
受け取って、一口食べる。また手が止まる。
干した肉で取った出汁。たくさんのキノコと根菜。見慣れた具材。心の深い部分に押し込めていた感情が湧き上がってくる。
「お口に合いませんでしたか？　それとも、お体が優れませんか？」
異常を察し、カリムが不安そうな顔をする。
どう答えるのが最善か、イズモはとっさに判断できなかった。
「変な話だが、懐かしい気分になった」気づくと正直に話していた。「このスープが、おふくろがよく作ってくれたものに似ていたんだ。具体的にどこがって言われても困るんだけどな」
「いわゆる『おふくろの味』ですね。出汁や具材が同じだったのでしょうか」
「たぶんな」
言いながら、空になった椀を差し出す。カリムは嬉しそうに椀を受け取り、かま

どに向かう。
「イズモ様のお母様はどんな方なのですか？」鍋をかき混ぜながら、カリムが尋ねてきた。「我々は家族を持ちません。親とはどのようなものなのでしょうか？」
「急にどうした？」
「〈風〉が運んでくる話には親子にまつわるものが多くあります」カリムはイズモに椀を渡し、火のそばに座る。「イズモ様が追ってらっしゃる方も親なのでしょう？　親を持つとは、子を持つとはどのような気持ちなのか、私は知りたいのです」
カリムの声には好奇心以外の何かが含まれていた。カリムは今年で十八。最初の子作りで男の子が生まれていれば、来年には自分の子どもが村にやってくることになる。それを気にしているのだろうか。
イズモは考えるように椀に目を落とした。
「おふくろは、優しくて、働き者で、しっかりした人だった」イズモは少し迷ってから、話しだした。「働くのが生き甲斐なのかってくらい常に動き回っていて、いつもオレより早く起きるのに、寝るのはオレより遅かった。穴の空いた靴下を繕ったり、尻尾袋を編んだり。どんなときも自分より、オレを優先してくれた」
「素敵な方ですね。今はどうされているのですか？」
「死んだ。魔獣に殺されたんだ」

カリムはハッと顔を上げ、すぐに目を伏せた。
「申し訳ないことをお聞きしました」
「気にしなくていい。昔の話で、心の整理はついている」
笑ってみせるが、カリムは恐縮した様子で俯いている。
——さすがに白々しいか。
汁に漂う肉や野菜を見つめながらイズモは自嘲する。
実際のところ、イズモの心はあの日に囚われたままだった。普段は忘れているのに何度も夢を見る。ああすればよかった。こうすればよかった。無意味だと分かっているのに、同じことを繰り返してしまう。
椀を突きながら物思いに耽っていると、炉の火が不自然に揺らめいているのに気づいた。まるで風に吹かれているように、ひとつの方向になびいている。
空気が重い。胸が押さえつけられたような圧迫感と息苦しさ。気のせいとするには異常すぎた。
「イズモ様」カリムが声を潜める。緊張した様子で屋根を見つめている。
「〈風〉が来ているのか？」
「はい。御山にいたのとは別の〈風〉ですが、イズモ様を知っているようです。ただ、この〈風〉が自ら村に降りてくるのは……」

カリムの声は震えていた。何が見えているのか、想像もできなかった。

「話を聞くことはできるか？　なぜオレを知っているのか。あのとき何が――」

「これが噂の鼠か」「意外と小さいな」

イズモの言葉は異様な声に遮られた。まるで老人のような、しゃがれた声。見ると、カリムの目は赤く染まっていた。濁った血のような瞳がイズモを見据える。

「カリム……？」

戸惑うイズモに、カリムが微笑む。普段とは似ても似つかない、得体の知れない、人ならざるものの笑みだった。

「はじめまして、イズモくん」「噂はかねがね」

反射的に銃を構え、距離を取る。銃口は下に向けたまま、いつでも無力化魔術を撃てるよう備える。

落とした椀が転がり、地面に染みを作った。

「お前は誰だ⁉　カリムに何をした⁉」

「そう騒ぐな」「少し体を借りているだけだ」「用が終わればすぐに解放する」

カリムの開いた口から複数の声がする。何者かがカリムの体を乗っ取ったらしい。

人に憑依する魔術は話でしか聞いたことがないが、疑っている余裕はない。気配は人間のそれではなく、魔獣と対峙しているような緊張感だった。

カリムが立ち上がり、イズモを見下ろす。
「これはまた面妖だな」「我らに似ているが」「本質を異にする力だ」
「さっきから何を言っている。オレになんの用だ」
「用があるのは君に使われた力であって」「君自身ではない」
何者かは無感情に言い放ち、イズモに近づいてくる。
「なるほど」「〈神獣の瞳〉で死者に生者の真似事をさせているのか」
深紅の目に覗き込まれ、息が止まる。
「しかし、あの〈鼠の王〉をこんなことに使うとは」「竜帝は何を企んでいる」
「お前はなんだ⁉　何を知っている⁉」
イズモはカリムの手首を掴み、肉薄するが、相手は余裕を崩さない。
「我々は〈風〉」「主の目となり耳となり口となる者」「我々はすべてを知る」「もちろん、君が火葬屋に殺されたことも」
「なっ」
「君は火葬屋を追っていたな」「お近づきの印に」「いいことを教えよう」赤い瞳が怪しく輝く。「火葬屋は石の天秤の手駒だ」「天秤に命じられ村を襲った」「火葬屋を求めるなら天秤を探すことだ」
「石の天秤が、あの悪魔が関わっているのか⁉　どういうことだ⁉」

「我々に言えるのはそれだけだ」「あとは竜帝に聞くといい」
その瞬間、カリムの体から風が吹き出し、吹き飛ばされる。家の中で風が吹き荒れ、棚を倒し、炉の火を吹き消す。
数瞬後、風は嘘のように止んだ。圧迫感が消え、静けさに包まれる。
おそるおそる体を起こす。暗闇の中でカリムが倒れているのが見えた。
「カリム！　しっかりしろ！」
「……イズモ様？」
カリムの青い目が、ぼんやりとイズモを見返してきた。
「大丈夫か？」
「はい、なんとか――」
言いかけたカリムが口を押さえ、身を捩る。苦しそうな声が聞こえたかと思うと、さきほど食べた物を床にぶちまける。
「水を取ってくる」
水瓶に向かおうとして、戸口に誰かが立っていることに気づいた。
大きな黒い影。月明かりを背にして顔は見えないが、金色の瞳だけが爛々と輝いている。
アドルだった。

アドルは黙ったまま、家の中に入ってきた。イズモは思わず両手を上げ、壁まで後退する。

アドルはカリムを抱き起こすと、小さな声で何か言った。驚くほど優しい声だった。カリムが答え、短いやり取りがなされる。

「イズモ様」ややあって、カリムが声をかけてきた。「アドルが、イズモ様に聞きたいことがあると言っています」

「オレに、聞きたいこと？」

「イズモ様が何者か、〈風〉と何を話していたのか」

アドルは異常な気配を感じて、少し前から立ち聞きしていたらしい。言葉は分からずとも、何か剣呑な話をしていると察した。

「アドルの言葉をそのまま伝えます。……貴殿は我々の英雄であり、私も尊敬の念を抱いている。しかし、〈風〉が神の使いの身体的負担を顧みず、直接対話を求めたとなると、村を治める者として看過できない。彼に事情を尋ねたが、自分からは話せないと言う。申し訳ないが、貴殿からお聞かせ願えないだろうか」

礼節をわきまえた言い回しだが、実質的な命令だった。

「嫌だ、と言ったら？」

沈黙。数秒の間。

「それならそれで構わない。次善策を講じるだけだ。むろん、それを理由に貴殿が不利益を被ることはないと約束しよう」
アドルの声は、あくまで静かだった。
脅しているようにも、怒っているようにも聞こえず、それゆえに底が見えなかった。返事を間違えば、取り返しがつかない。
厄介なことに、カリムは憑依されたときのやり取りを覚えているらしい。話す気はないようだが、アドルなら聞き出す方法くらい心得ているだろう。
情報が漏れたとして、彼らに得るものがあるとは思えない。残るのはイズモが黙秘したという事実だけだ。心証を悪くするだけなら、先手を打つしかない。
イズモは息を吐いた。
「分かった。全部話す」

「オレが生まれ育ったのは、カジナ村という山の中の小さな村だ。めったに人が来ない、隠れ里みたいな村だった」
炉の火を見つめながら、イズモがぽつりぽつりと話す。
火の向こうにアドルとカリムが座っていた。圧こそないものの、アドルの目はイズモに注がれたまま動かない。

カリムの顔色はまだ優れないが、〈風〉に乗り移られた後遺症というより、アドルが何かしないか心配しているようだった。
「オレが十五のときに、村は〈火葬屋ダルキニ〉と呼ばれる狐の魔獣に襲われた。生き物を焼き殺すことに無上の喜びを覚える最悪の魔獣。〈グレアドラスの大魔獣〉の一匹だ」
「〈グレアドラスの大魔獣〉とはなんですか？」
アドルの疑問をカリムが伝える。
「グレアドラスという大昔の天才魔術師が作り出した魔獣の中でも、強大な力を持つ三十二匹の魔獣の総称だ」
グレアドラスは魔獣研究の第一人者であり、国立魔術研究所の主任研究員だった。魔術の原理解析や術式機構の改良など、華々しい成果を上げる裏で、魔獣を使った非合法な実験を繰り返していた。
頭がいいからといって、人格がまともとは限らない代表例だ。
「一匹一匹が災害級の力を持ってるってだけでも最悪なのに、国に実験がバレたグレアドラスは、魔獣を解き放った上で自殺した」
研究成果や施設、残されていた魔獣は派遣された魔術師たちによって徹底的に破壊された。なぜそんな研究をしていたのか、なぜ自身は逃げずに自殺したのか。

様々な謎を残したまま、事件は闇に葬られた。
「その中の一匹であるダルキニが、イズモ様の村を襲った、と」
「そうだ。ちょうど、秋の刈り入れの時期だった。皆で稲刈りをしていたら、村のあちこちから突然、火の手が上がった」
普通の炎ではないことは、当時も感じていた。追いかけたり、先回りしたり、かと思えば、逃げる道が残されていたり。ダルキニは、人々が逃げ惑う姿を楽しんでいた。
「オレはおふくろを連れて逃げたが、おふくろは食われ、オレも致命傷を受けた」
シャツのボタンを外し、アドルに傷を見せる。
狐の爪は肉を抉り、骨を砕いた。即死はしなかった。させてもらえなかった。自分の血で溺れる苦しさの中で、イズモは死を待っていた。
「あと数秒で死ぬってときに、師匠が現れた」
〈竜帝アルメレク〉。赤い鱗に覆われた竜人の偉丈夫。
国王の近衛兵である〈神獣の七騎士〉のひとりであり、〈血と硝煙の魔術師〉の異名を持つ、特級の魔術師だった。
「師匠の目的はダルキニの討伐だ。人気のない場所に追い込んで、周囲の土地ごと爆破する予定だった。事前に調査をして、入念に計画を立てていた。だが、いざ現

地に行ってみると、ないはずの村があった」
　原因は最後まで分からなかった。
　調査した人間が嘘の報告をしたのか、調査したときには本当に村がなかったのか。
師匠が内部調査を始めたときには、調査に関わった人間はすべて自殺していた。
「助かったのは、イズモ様だけですか？」
　イズモは少しだけ間を置いた。
「公式の報告では生存者はいないことになっている」
「ですが、イズモ様はここに」
「師匠が駆けつけたときには、オレはもう一線を越えていた。そこで師匠はオレの体に〈神獣の瞳〉と呼ばれる魔石を埋め込んで、無理やり生命活動を再開させた」
〈神獣の瞳〉は、最高品質の魔石の中でも、特に強い魔力を秘めた魔石につけられる称号だ。都市ひとつを吹き飛ばす力があるとされ、国王に忠誠を誓った魔術師に贈られる。〈神獣の七騎士〉の名前の由来であり、証となる魔石だった。
　師匠はそれを使った。イズモを助けるために。
「〈神獣の瞳〉は恒常的に魔術を発動し、オレの体の生体機能を維持している。言うなれば生命維持装置だ。魔石が取り出されたり、魔術が止まったりすると、オレは今度こそ本当に死ぬ」

これを生きているといっていいのか、イズモ自身、よく分からない。〈風〉は生者の真似事と言っていたが、言い得て妙だった。
アドルがカリムに何か言う。カリムは眉根を寄せたが、仕方なさそうに訳した。
「その魔石があれば、山で石を探す必要はなかったのではないか、と言っています」
イズモはため息を吐いた。アドルは何もかも知っていて、イズモを追い詰めるために質問をしているのではないかと思えた。
「たしかに、〈神獣の瞳〉があれば魔術を使える。それも術式機構なしで。だが、それには別の問題が発生する」
イズモは自分の胸に手を当てる。手に振動が伝わってくる。魔石が発生させる電気信号で無理やり動かされているだけの心臓の鼓動が。
「さっきも言ったように〈神獣の瞳〉は常に魔術を使っている状態にある。そこに別の魔術を並行発動させると、一時的にだが生命維持の魔術が弱まり、肉体に不調をきたす。いわば反動だ」
カリムがハッとイズモを見る。
「昨日、ラティフが言っていた体調不良は、本当はそれが原因ではないのですか？」
イズモはまたもやため息を吐いた。カリムの勘の良さも相当なものだ。
「そうだ。オレはあのときガビトの下敷きになっていて、銃が使えなかった。ラ

ティフを助けるためには、他に方法がなかった」
カリムは早口でアドルに訳す。アドルが深々と頭を下げた。
「〈神獣の瞳〉は最終手段だ。多用すれば死ぬし、オレを殺してでも奪う価値がある。お前たちを信じたから話した。他言はしないでくれ」
イズモが頭を下げると、ふたりは重々しく頷いた。
「その後、イズモ様はどうされたのですか？」
「師匠に引き取られた。師匠はダルキニの討伐失敗、〈神獣の瞳〉の紛失、その他の責任を取って引退していたから、ちょうどよかったらしい」
本当の理由は〈神獣の瞳〉を手元に置いておきたかったからだろう。
当時のイズモは自責の念と好意からだと思っていたが、それはそれで、あながち間違いでもなかったようだ。
「どうして魔術師になられたのですか？」
「復讐のためだ。ダルキニを自分の手で葬って、母親の敵討ちと師匠の名誉を挽回したかった。だが、先ほどの〈風〉によると、それでは済まないらしい」
アドルの目に鋭さが戻る。
「〈風〉はオレに使われた力に興味があると言っていた。師匠がオレを助けた魔術のことだろうが、その何が気になったのかまでは分からない」

〈鼠の王〉という言葉もあったが、聞き覚えがなかった。もちろん、イズモは高貴な血筋とは無縁であり、鼠人に王がいるという話も聞いたことがない。〈風〉の話は重要そうに聞こえて、その実、なんの手がかりにもならなかった。

「あと聞けたのは、火葬屋は石の天秤の手駒だということ、火葬屋は石の天秤の命令で村を襲ったってことだ」

「火葬屋はダルキニのことだとして、石の天秤とは？」

「最重要国際指名手配犯のひとり、通称〈天秤のズムニカ〉。判明しているだけでも千人以上を殺している特級の魔術師だ。元〈神獣の七騎士〉で、数十年前に大量殺人を行って逃亡。国から莫大な賞金が懸けられている」

カリムが息を呑み、アドルも表情を険しくする。説明するイズモ自身、気が滅入っていた。

「ズムニカはなんらかの方法でダルキニを手懐け、村を襲わせたらしい」

「なんのためにですか？」

「それが分かれば苦労はしない」

〈風〉は師匠に聞けと言っていたが、いろんな意味で会いたくなかった。合わせる顔がない以上に、真実を知るのが怖かった。世の中には知らない方がいいことがたくさんある。自分の力では、どうにもならないことは特に。

現実は物語ほど単純ではない。多くの人々がそれぞれの思惑で行動し、誰がなんのためになにをしたのか、知り得ないまま終わる。これまでもそうだったし、これからもそうだろう。

「師匠はオレが魔術師になることに反対だった。オレの手に負えないことを知っていたんだ。実際、大見得を切って師匠の元を飛び出したものの、今では生きるだけで精一杯だ」

イズモは現実を知らなさすぎた。志だけではどうにもならないことを、人間の悪意の救いのなさを知らなかった。青い理想は早々に砕け散り、いまさら、組み立て直す気力は残っていなかった。

うなだれるイズモの手に、白い手が重ねられる。顔を上げると、穏やかなカリムの顔があった。

「イズモ様は悲しく恐ろしい経験をされながら、前に進まれることを選ばれました。それだけでも尊敬に値します」手に力が込められる。「きっと道は開けます。どうか、自信を持ってください」

誰からもかけられたことのない温かな言葉。しかし、イズモは苦しそうに目を逸らした。

「……ありがとう」

出てきた感謝の言葉は、ひどく疲れていた。

6

その後、いくつかの事実確認をした後、アドルとカリムは帰っていった。ふたりだけで相談したいことがあるらしい。

別れ際、アドルはイズモに非礼を侘び、感謝の意を伝えてきた。表情こそ変わらないものの、アドルの目は今までにない優しい色を帯びていた。

月明かりが照らすふたりの広い背中を、イズモはずっと見ていた。

驚異的な戦闘力を持つ黒虎と未知の知性体を知覚する白虎。只者ではないとは思っていたが、想像をはるかに超えていた。

彼らは何者なのだろうか。

なぜ、こんな辺境の森に囚われているのだろうか。なぜ、無関係な自分が巻き込まれなければならないのだろうか。

そして、なぜ今になって新しい情報が入ってくるのだろうか。それも、よりによって、ズムニカという最悪の殺人者が。

――勘弁してくれ。オレにはもう、そんな余裕はないんだ。

カリムの背中に、声にならない声を投げかける。
実のところ、イズモはダルキニのことを忘れてしまいたかった。母親のことも、師匠のことも、もう終わったことだ。イズモが生きているのは今この瞬間であり、過去は足かせ以外の何物でもなかった。
人はただ生きるだけで金がいる。
着るものも、食べるものも、住む場所も、買うか借りるかしなければ手に入らない。義務教育を終えただけの、魔術しか取り柄のないイズモには、時間と命を切り売りする以外、金を稼ぐ方法がなかった。
当然、他のことをしている余裕などない。
諦めてしまいたかった。しかし、忘れかけるたびに、あの夢を見た。夢だと分かっていても、いざ母親を目の前にすると、助けずにはいられなかった。そのために魔術師になったのだと、あの日の決意を思い出してしまう。
――魔石を探すか。
イズモは家の中に積み上がった石の山に目を向けた。
嘆いても状況は変わらない。森には敵がいて、手元には魔石がない。それが現実だ。やるべきことはいくらでもあった。
炉のそばに戻ると、心なしか火が頼りなく思えた。壁際に積まれた薪を、何本か

火にくべる。乾いた木の枝はすぐに炎に包まれ、端の方から黒くなっていく。
石の山に手を伸ばしたところで、人の気配を感じる。振り返ると、戸口に誰か立っているのが見えた。
「カリム？　何か忘れ物でもしたのか？」
声をかけてみるが、入ってくる様子がない。不思議に思い、外に出る。
そこにいたのはラティフだった。いつになく強張った顔でイズモを見ている。なんとも間の悪い。もう少し早ければカリムがいたのに。
「ラティフか。こんな時間にどうした？」
黙っているわけにもいかず、通じないのを承知で話しかける。ラティフは辺りを見回した後、鞄から石を取り出し、イズモに差し出した。
手のひらに余る大きさの黒い石。よく見ると、石の中で青白い炎が揺れているのが見えた。
「魔石か？　探してくれたんだな。助かる」
昼間、見つけられなかったことを気にして探してきたのだろうか。しかし、水浴びを終えて解散したときには夕方近かった。それから探しに行く時間があったとは思えない。不思議に思いながら受け取る。
石に触れた瞬間、ゾワリと背中の毛が逆立った。心に何かが直接話しかけてくる

ような感覚。不可視の触手に胸の内側を探られるような違和感。
魔石。それも極上の。今回の依頼の報酬に匹敵し、魔術用に砕くのが躊躇われるほどの。少なくとも、これほどの魔石の原石をイズモは見たことがなかった。
「どこで見つけた⁉」
詰め寄るイズモに、ラティフは北にある山を指差した。
「今日行った山か？　見つけていたんなら、なんでそのときに言わなかったんだ」
首を傾げるイズモの腕を、ラティフが引っ張る。指は山を指したままだ。
「今から行こうっていうのか？　今日はもう遅い。明日じゃ駄目か？」
イズモは表情と身振りで懸念を示す。解決済みとはいえ、トラブルがあった直後だ。誘ってきたのはラティフだが、目立つことはしたくなかった。
しかし、ラティフは頑として譲らなかった。それどころか、鞄の中から新たな魔石を取り出した。三つ、四つ。まだまだ出てくる。
イズモの耳元で天使と悪魔が囁く。天使は行くなと言い、悪魔は行けと言う。天使は主張する。甘い話は危険だ。今回の件も金に目が眩んだのが原因だろう、と。
「ラティフ」イズモは決心し、少年の肩に手を置いた。「準備するから待っていろ」
イズモは大きく頷くと、家に戻った。
カリムの見つけた石をどかし、ラティフの魔石を積む。大きさも品質も比べ物に

ならない。新たな魔石の光はイズモの将来を約束してくれるようだった。
いつまでも見ていたくなる輝きから目を引き剥がし、準備にかかる。
背嚢の中身を取り出しながら、イズモはラティフがなぜ今になって魔石を持ってきたのか考えていた。
山で見つけていたなら、その場で言えばいい。昨日なら、最初からそこへ案内すればいい。そうしなかったのはなぜか。山でのラティフの様子がおかしかったことと、何か関係があるのか。
あのときは駄目で、今ならいい理由は何か。
――他のやつらがいるとまずい、とか。
その意味するところをイズモはうすうす理解した。理解できる自分が嫌だった。
――とにかく行くしかない。
これは千載一遇の好機だ。危険を冒すだけの価値がある。
イズモは覚悟を決め、家を出た。
ラティフに先導され、闇の中を走る。
ラティフは松明を持っておらず、月明かりだけが頼りだった。村の近くは木の密度が低いものの、油断していると、すぐにつまずいてしまう。足元に気をつけなが

ら、ラティフについていく。
静かな夜だった。虫の鳴き声も、風のざわめきもない。聞こえるのは、ふたりの控えめな足音だけだった。
突然、ラティフが立ち止まり、伏せるように手振りする。姿勢を低くしていると、前方に松明の明かりが見えた。
槍を持った大人がふたり、周囲を見回しながら歩いていた。
探しに来たのかと焦ったが、それはあり得ないと思い直す。現時点では何もしていないのだから探される理由がない。だとしたら、敵襲に備えての見回りだろうか。そんなことをしているとは知らなかった。
——ラティフ。お前、何をするつもりだ。
隠れるということは、見つかると困るということだ。不安は増すばかりだったが、魔石の誘惑には勝てなかった。
大人たちが通り過ぎるのを待ち、また走り出す。
イズモが逃げないことを確信したのか、ラティフは四足の姿勢になり、どんどん速度を上げていく。森を抜け、山に入っても、ラティフは止まらなかった。昼間に通った道をなぞるように進んでいく。
——分かれ道なんてなかったよな……？

カリムと話をしながら歩いていたが、他の道があれば気づくだろう。行きも帰りも道なりで、迷う要素も、寄り道する要素もなかったはずだ。
疑問を抱えたまま進んでいると、とうとう魔石を探した場所まで来てしまった。
昼間はあんなに暑かったのに、今は嘘のようにひんやりとしていた。気温が低いだけではない。なんとなく、薄ら寒いものを感じる。
「やっぱり、ここだったのか？」
尋ねるが、ラティフはそのまま先へと進んでいく。広場を抜け、その先の細くなった道に入る。
神域の入り口を示す、木の柱が目前に迫る。仕方なく追いかける。
近づくと、柱の近くに、柱と同じ太さの丸太が二本、地面に転がっているのが目に入った。加工の形跡があることから、もともとは柱の一部だったらしい。
――鳥居ってやつか。
極東の宗教的建造物の一種。人間の住む世界と神の領域を区画するもの。
あり得ない場所に、あり得ない物がある。しかし、イズモはもはや驚きも疑問も感じず、不思議とすら思わない。異常事態の連続で、異常を異常と判断する感覚が完全に麻痺していた。
あらためて柱を見上げる。作られてから相当な年月が経っているらしく、日光と

風雨に晒されて灰色になっていた。決して大きなものではないが、異様な雰囲気を発している。ここから先が特別な場所であることを、嫌でも感じさせられる。
ラティフは柱の間にかけられた縄に手をかけた。
「お、おい。そこから先は神域だろ」
引き止めるがラティフは無視した。
縄を持ち上げ、下をくぐる。驚くイズモを気にすることなく、ラティフは何事もなかったように歩いていく。
「おいおい、いいのかよ」
いいわけがない。しかし、魔石はこの先にあるらしい。
イズモは数秒の逡巡の末、追いかけることにした。本当に入られたくないなら、もっと厳重にしているはずだ。心の中で言い訳しつつ、縄を持ち上げる。
『神罰が下ります』
カリムの言葉が脳裏をよぎる。あの青年を裏切りたくはない。しかし、好奇心には勝てなかった。
意を決し、縄をくぐる。
数歩進んで、振り返る。誰がいるわけでもない。静かに風が吹き、月が見下ろしているだけだった。

前に向き直り、先に進む。
鳥居から続く道は闇に沈んでいた。道幅こそ変わらないものの、月は山の裏に隠れ、星の明かりだけでは心細い。大きな石がいたるところに落ちていて、油断すると転びそうだった。道の山側を、一歩一歩、慎重に歩く。
ラティフはしばらく進んだところにある、開けた場所で待っていた。
イズモの顔を見て、ホッとしたように表情を和らげた。ラティフにとっても、イズモが禁を破るかは賭けだったのだろう。
「それで、魔石はどこだ？」
イズモが辺りを見回していると、ラティフが崖近くの石を指差した。
近づいて目を凝らし、息を呑む。
道に転がっている石、そのすべてが魔石だった。
震える手で、近くにあった石を拾う。青白い鬼火のような煌めき。石はイズモの動揺を笑うかのように、波立つ気持ちを煽ってきた。
肩を叩かれ、顔を上げる。ラティフが空を指差していた。指の先には輝く星々。
「空がどうし――」
言いかけて、言葉を失う。空に見えたのは崖、星に見えたのは崖に広がる無数の光点。

イズモはぽかんと口開けて、崖を仰ぐ。
視界を埋め尽くすほどの光の群れが、崖面に緩やかに蛇行する大河を描いていた。
本物の夜空に勝るとも劣らない満天の星空。手にした石がクズに思えてしまうような、圧倒的な輝きの奔流だった。
「まさか、魔石の鉱脈か……？」
一般的に、良質な魔石ほど地中深くに眠っているとされる。
そのため、企業は莫大な金をかけて地面に深い穴を掘り、蟻の巣のように入り組んだ坑道を作る。空気を循環させる機械の駆動音が轟々と響き、照明が昼も夜も煌々と輝く墓穴だ。
高温多湿、崩落、地下水やガスの噴出。死と隣り合わせの劣悪な環境でありながら、わずかばかりの金のために大勢の出稼ぎ労働者が穴を掘り続ける。
そんな名もなき人々の犠牲を糧にして、魔石の原石は産声を上げる。
目の前の光景は、その常識を覆すものだった。
虎人たちの祖先は、この魔石を独占するために、ここを神域としたに違いない。
時の流れとともに理由が忘れ去られ、習慣だけが残ったのだろう。
――この品質なら、大枚をはたいてでも欲しがるやつがいる。
イズモの頭の中で、計算機が動き始めた。どうすれば、この魔石を誰にも邪魔さ

れず売り捌くことができるか。
魔石は単純に掘って売ればいいというものではない。
他の資源と同じように、需要と供給のバランスによって値段が決まる。むやみに流通量が増えれば、どれほど良質だろうと安値で買い叩かれることになる。
過去に、魔石の大規模な鉱山が見つかり、価格崩壊が起きたことがある。結果として、採算が取れなくなった多くの鉱山が閉山し、世界中で失業者があふれた。
今では魔石の主要産出国が作る国際機関によって、魔石の流通量が調整されている。鉱脈を見つけたとしても、下手に売れば政治的な介入が入り、潰される。
――だが、この品質なら無視はできない。
最高品質の魔石は、良質と言われる鉱山でもごく稀に採れる程度だ。それがごろごろ転がっているのだから、非合法の闇取引だとしても、欲しがる人間や企業は山ほどいる。圧倒的需要を味方につければ、国や機関が相手でも交渉できる。
――邪魔されることも考えないと駄目だな。
出どころが露見すれば、超法規的な妨害を受ける可能性は高い。
しかし、ここは誰も見向きもしなかった辺境の土地だ。原住民の文化保護の名目で土地を買い占めれば、誰も手出しができない。買収にかかる金程度なら、転がっている魔石を売るだけで十分確保できるだろう。

——これだけの魔石があれば、人生を何回でもやり直せる。今まで受けてきた屈辱を札束で殴り返すことができる。良心など魔石の輝きの前では無力だった。依頼された仕事も、ダルキニもズムニカも、もはやどうでも良かった。

カリムの顔を思い出し、少し心が痛んだが、それだけだった。

「ラティフ、大手柄だ」

イズモは最大限の笑みを浮かべ、ラティフの頭を撫でる。ラティフは抵抗しなかった。それどころか、尻尾をくねらせ喜んだ。

イズモの目には、緑色の鬼火が揺らめいていた。

イズモは落ちていた石を背嚢に詰められるだけ詰め、神域を後にした。石の重みで鞄の生地が伸び、縫い目が悲鳴を上げたが気にしなかった。拾った魔石があれば、もっといいものに買い換えることができる。

夜道を焦らず、それでいてできるだけ早く走る。

一歩踏み出すごとに、背負い紐が肩に食い込み、拷問めいた痛みを生んだ。重みによろめき、何度も転びそうになった。

しかし、心は歓喜に満ち溢れていた。肩に感じる重さは幸福そのものであり、絶

え間ない痛みはこれが夢ではないことの証明だった。
幸い、見張りの大人たちを見かけることも、家の近くで誰かが待ち構えていることもなかった。
家に着いた途端、緊張の糸が切れたのか、急に疲れが押し寄せてきた。
床にへたり込み、荷物を投げ出す。その拍子に背嚢の留具が外れ、石が転がりだした。いくつもの黒い石。間違いなく魔石だった。夢ではない。思わず口元が緩む。
ラティフを見ると、床に足を投げ出し、肩を上下させていた。
イズモは立ち上がると、水瓶から水をすくった。まず自分で飲み干し、次の一杯をラティフに差し出す。ラティフは礼らしきことを言って受け取り、一気にあおった。こぼれた水が首を伝い、胸の傷痕に垂れる。
「ラティフ、よくやった」
あらためて少年の頭を撫でる。嬉しそうなラティフの顔には、罪を犯した陰りはなかった。興奮状態でそれどころではないのか、イズモが思うほど重罪ではないのか、それほどまでにイズモの役に立ちたかったのか。
――どうあれ、礼をすべきだよな。
ラティフは相応の覚悟でイズモを誘ったはずだ。命を助けたことへの返礼だとしても、言葉だけで済ませるのは気が引けた。かといって、何なら釣り合うのか。

思案しながらラティフを見ていて、ふと異変に気づく。

ラティフの腰布に黒い染みができていた。水滴が落ちたのかと思ったが、その部分が不自然に盛り上がっていることから、別の理由だと察する。

——もしかして、そういうことか？

カリムいわく、この村では日常的に同性間で性交渉を行っている。それには性欲の解消だけでなく、精神的な結びつきを深める意味合いもある。

また、薬酒という事情があったにせよ、カリムは相方がいるにもかかわらず、見ず知らずのイズモと体を重ねた。

——それが許されるなら。

イズモの心にどす黒い感情が広がっていく。

イズモはその場にしゃがむと、ラティフの目を覗き込んだ。互いの鼻がつきそうな距離。琥珀色の瞳には、薄笑いを浮かべる醜い鼠の顔が映っていた。

左手を伸ばし、腰布の膨らみに触れる。布の奥に固い感触。ラティフはびくりと肩を震わせたが、手を払おうとはしなかった。

——逃げないってことは、合意ってことでいいよな。

イズモは布越しに形を探るように、ゆっくりと撫でる。ラティフは目を伏せ、息を荒くする。隠された欲望が張り出してくる。興奮の先端を、円を描くように擦る。

染みが広がっていき、指先に濡れた感触を覚える。
一度手を止め、少年の反応を窺う。
ラティフの声は震えていた。顔を赤くし、目は熱く潤んでいる。続きを期待しているのは明らかだった。
「イズモ」
イズモは頷き、腰布をめくる。布の下から、淡い桃色の屹立が現れる。初々しくも猛々しい肉杭に対し、付け根にある命の袋は毛玉のように愛らしい。他人のものなど気にしたこともないが、ラティフのそれは年の割に大きいように思えた。
手で終わらせるのが無難だった。ラティフの期待もその程度に違いない。だが、イズモの損得勘定は、この期を逃すなと言っていた。今がラティフを絶対的な味方にする絶好の機会だ、と。
――これも金のためだ。
覚悟を決め、裏筋に舌を這わせる。玉と竿の境目から、膨らんだ尿道を通って鈴口へ。充血し膨らんだ先端を舌と唇で軽く撫でた後、また根本へと下っていく。自らの唾液をラティフになすりつけるように。自分の匂いで覆っていくように。
ラティフは驚いたようにイズモを見たが、すぐに温かな快楽に身を委ねた。
『なんでもするって言っただろう、坊や』

誰ともつかない男の、ねっとりした言葉が耳の奥でこだまする。
目に映る暴力的な男性性が、舌から伝わってくる硬い肉と血管の凹凸が、心の深い部分に封じた記憶を刺激する。思い出さないようにすればするほど輪郭が際立ち、細部が浮かび上がる。
ラティフは短く、呻くような声を発する。
舌と唇を使い、肉棒を下から上へ、上から下へと愛撫する。焦らしに焦らし、欲望を膨れ上がらせる。先端に露が浮かび、臭いが強くなる。
口を大きく開け、ラティフを咥える。口腔に塩気が満ちる。唾液を滴らせながら、唇で竿を、喉で先端を刺激する。根本まで咥え込むと、鼻先に下腹部の柔らかな茂みが触れた。
精と汗の混じった臭いが鼻を突く。
『金が欲しいなら、言われた通りにしろ』
頬に打ちつけられる札束、体に伸びてくる腕。
目を固く閉じ、無心で頭を動かす。自分は機械なのだと言い聞かせる。硬貨を入れれば決められた時間だけ動く遊具。金と引き換えに男を慰める道具。そこに心など必要ない。
ラティフを咥えたまま、引き締まった尻に右手を這わせる。ふたつの丘の谷間を

探り、茂みの奥のすぼんだ洞穴を見つける。ゆっくりと撫でながら、力を入れる。
イズモの指はあっけなく飲み込まれた。
『辛いのは最初だけだ。すぐに自分から求めるようになる』
太い指が体を無遠慮にまさぐる。あり得ない場所に、あり得ない物を入れようとしてくる。逆だ。今は自分がやる側だ。
指の腹でラティフの肉壁をこねるように圧迫する。ある場所に触れたとき、ラティフが体を強張らせ、指を締めつけてきた。
イズモは右腕全体を震わせ、ラティフの一番弱いところに刺激を集中させる。ラティフがくぐもった声を上げる。肉棒の先から粘着質な液体が吹き出し、口の中を満たしていく。充満する熱と青臭さと苦さ。
むせかけ、粘液の一部が鼻に逆流する。
『全部飲めたら、報酬を上乗せしよう』
悪意に満ちた提案。後頭部に感じる靴底の硬さ。
五感を刺激する嫌悪感を理性でねじ伏せ、溜まった液体を一気に嚥下（えんか）する。喉を下りていくどろどろした感触に背中の毛が逆立つ。それでもやめない。
——金、金、金、金、金。
頭の中で唱え続ける。そうすれば何でも耐えられる。自分に必要なのはそれだけ

だ。誇りや高尚さでは、腹は満たせない。
口の中の脈動が弱まる。咥えていたものを離し、尿道の残滓をしごき出す。鈴口からあふれたものを舌先ですくい、飲み込む。
ラティフは蕩けきった表情でイズモを見ていた。口元を拭い、笑ってみせる。
少年が飛びかかるように抱きついてくる。信頼の強さを示すように、その腕は力強かった。
イズモは自分が生きていることを実感した。
暗い、暗い、充実感だった。

（下巻に続く）

【謝辞】
本書を制作するに当たり、ご協力いただいた神風シロ様、ぷれいず様に心より感謝申し上げます。

イズモと神の棲む森　上
2022年10月10日　初版第1刷発行

発行　祈りの獣
著者　むらうえ
イラスト　窓枠

連作先　praying.beast.x86@gmail.com
Twitter：@muraue_x86
pixiv　：391681

ご意見・ご感想はこちらのマシュマロまで

イズモの手帳より(1)

【竜の伝説】

昔々あるところに、大きな国があった。資源に恵まれ、作物は豊かに実った。しかし、その国は富を他国に分け与えようとはしなかった。ある日、その国に竜がやってきて、富を貪り始めた。他国が救援に向かったが、竜の力の前になすすべもなかった。国は滅び、深い森になった。竜は今もそこに棲んでいる。

【魔術式通信機】

ガラントが作った二個一組の遠距離通話用魔術具。接続先は組となった相手に限られるが、通信は魔術によって形成された概念空間で行われるため、傍受される恐れがなく、物理的な制約を受けない。ガラントはこれを数百組所持しており、世界中に対を持つ協力者がいる。要となる魔石にはガラントの『大切な相手の声を聞いてホッとする感じ』の祈りが込められている。

【ダルキニ】

〈火華屋ダルキニ〉の異名を持つ、白面金毛九尾の狐の魔獣。〈グレアドラスの大魔獣〉の一匹。「異種族の術式機構により魔術を強化する実験」により、狐の魔獣に魔狼の骨を移植して作り出された。同様の実験は様々な魔獣の組み合わせで行われたが、成功したのはダルキニを含めた数例のみで、多くは弱体化または魔術自体を使えなくなった。この実験から「魔術の性能は術者と術式機構の相性に左右される」ことが確認された。

